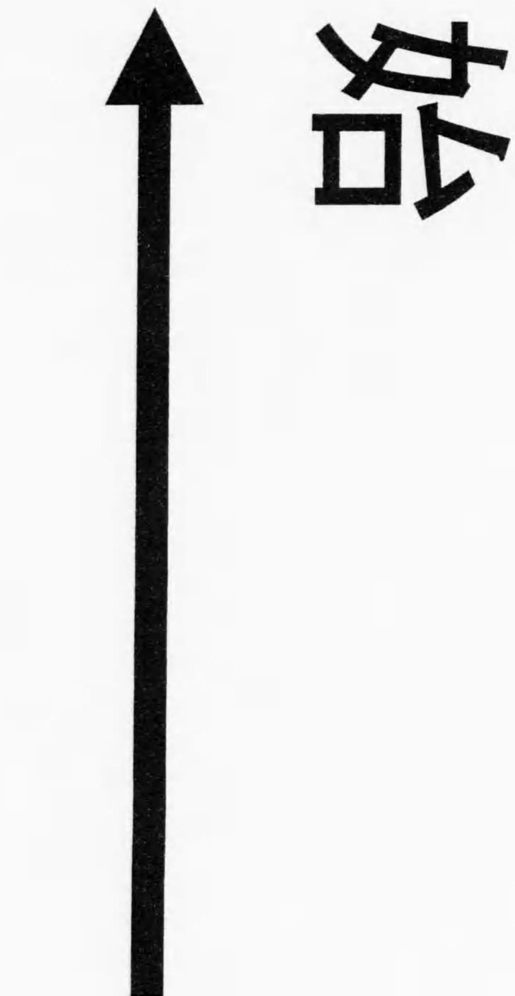
188.82-Ka91ウ
1200500728304
82
71
ウ
X
複写



仁2-16

近世禪僧傳

川邊真藏著

近世禪僧傳

川邊眞藏 著

188.82
KA91
(6)

石書房

澤庵和尚頂相

細川侯爵家藏

白隱和尚筆『關山國師』

（東京　侯爵　細川護立氏藏）

966
63

序

大分前から禪僧の墨蹟に興味を感じて、二三同好の人々とそれを漁つた。そしてその結果はそれ等墨蹟の筆者に深い興味をもつに至り、その事蹟を研究する志を起さしむるに至つた。斯樣な經過を辿つて、私の禪僧傳に對する關心が深くなつたのである。

だから私の禪僧に對する興味は、禪の悟りとか、坐禪とか、或は提唱とかいふやうな方法によつて生れて來たのではない。極めて放懶な感情から生じて來たものだ。從つてこの禪僧傳も普通の禪僧傳のやうな、禪そのものを目標とし、中心とした記述とは多少の相違があるものと思ふ。もし左樣な方面の禪僧傳を期待さるゝ讀者に對しては、この著述は甚だ不滿なものであるかも知れない。しかし私の願ふたところは、たゞこの三四百年の間、わが國の文化の上に、わが國民の精神生活の上に異常な影響を及ぼした禪僧――しかもその代表的な人達が、如何なる時代に生れ如何なる環境の下に育まれて、如何なる生活を送つたかを明にする點にあつたのである。即ち極めて平凡なる俗人として、これ等禪僧の時代と生活を觀測するといふことであつたのだ。勿論

この目的も完全に達成されてゐるとはいひ得ぬかも知れぬ。が、兎も角、この目標の下に徳川時代三百年間の禪宗發展の跡をほゞ髣髴し得るやうに注意して記述を進めた。

このうち「原の白隱もの」の一篇は數年前の舊稿に多少修正を加へたのみで、收錄した。その他は新に筆を起したもの、あるひは新起稿と同樣に書き改めたもののみである。しかし何をいうても、墨蹟に對する興味が先入主となつてゐるのだから、記述も自然その方面に偏傾するに至つたことは止むを得ぬ次第だ。その點で、近世禪僧傳といふ鹿爪らしい題名よりも、むしろ隨筆禪僧ものとでもする方が一層妥當であつたかも知れない。（昭和十八年三月）

目次

配所の澤庵……一
隱元渡來の頃……三一
盤珪和尙傳……六一
賢巖と古月……七九
月舟和尙……九四
鷹峰の卍山……一一三
面山の「祖師墨蹟記」……一三八
最初の曹洞僧史傳の著者……一五〇
良悟下三代記……一五九
一元紹碩のこと……一九一

原の白隱もの……一九六
鎌倉禪と鵠林下……二〇五
享保に生れた人達……二三四
洪川和尚のこと……二四〇
禪僧もの閑談……二五五

配所の澤庵

一

澤庵が紫野の大德寺を視篆したのは、慶長十四年己酉の春三月八日であつた。その時澤庵三十七歳、その陞堂に際しては、實際における彼の師といふてよい圓鑑國師春屋宗園が自ら白槌の役を引受けたといふことである。在住三日、退鼓を打つて、泉州堺の南宗寺に歸つた。爾來十八九年の間、彼は南宗と大德の大仙庵の間を往來し、更らに生國但馬の宗鏡寺にも時折引込んで、變轉極りない世間から全く隔離した生活を送つてゐた。其處へ端しなくも、大德、妙心の出世問題が起つて、彼はその紛擾の渦中、しかもその眞唯中に立たねばならぬことになつたのである。

元來この出世問題といふのは、元和年間、德川家康が、諸般の制度を定め、そのうちにおいて大德寺、妙心寺の住職に出世するについても、種々の條件を附したところに發端する。この出世

法度の條項は當時の僧祿以心崇傳の主として制定したものであつて、彼は家康、秀忠二代の間、所謂黑衣の宰相として、いろ〳〵の政治組織制定に參劃したのである。大德、妙心出世法度も、その際に於ける經綸の一つであつて、大德、妙心側からいへば崇傳がさりげなく、兩山に對して一服の毒を盛つた施設であるといふのである。

それは何故かといふと、この兩山の出世僧に限りて、その條件が苛酷を極めてゐたのである。

卽ち、

一、善智識について三十年間に千七百の公案を綿密に工夫し終ること。

二、諸老宿に參じ請益を遂げ、出家本分の人格終了後、信ずべき智識の連署證明を經ること。

三、幕府の檢閲を要すること。

といふ三つの條件を必要とすることとした、しかし三十年間に千七百の公案を工夫し終るといふことは、實現不可能のことである。第一千七百の公案とは禪宗において普通に唱へられてゐるところであるが、實際には三四百の公案があるに過ぎない。更らに三十年間善智識について請益した後といふことになれば、住職に出世するのは五十六十にならなければ出來ぬことになる。それ

では大德、妙心の後進の出世は事實上杜絶するものといはねばならぬ。これは崇傳が、自分の所屬する五山の勢力に對して、從來對抗的の立場にあつた山隣、卽ち五山外の大德、妙心兩派の勢力失墜を策謀したものに外ならないと彼等はいふのだ。

勿論、この非難は、元和法度發布の直後に於て起つた譯ではなかつたやうだ。大德、妙心側においては、むしろこれを實現性のない制度であると輕く見て、その當時は、別に表面的の問題とせず、實際に於ては從來の慣習を踏襲して居れば、そのうちにこの法度は自然消滅に終るであらうと期待してゐたらしい。しかし事實はこの期待通りに展開して行かなかつた。卽ち寛永三年丙寅の年になつて、幕府から改めて、嚴重なる申達が來たのだ。

澤庵に長く隨侍してゐた武野宗朝の「萬松山東海禪寺開山前住大德澤庵大和尙行狀」には左のやうに記してゐる。

先レ是元和之元、東照神君下二法禁於大德妙心一曰、其道機僧臘不二兼備一者、猥不レ可レ許二住山一。然神君薨去之後、不レ達二台聽一、奉レ勅出二世于大德一者大抵十四五輩。寛永丙寅年、大相國重加二嚴制於兩寺一。明年丁卯師學二玉室翁法嗣正隱知公一、董二本寺一。於レ是大相國召二師及玉室、江月

於二江戸一、詰二問是非一。于レ時衆議蜂起、然師與二玉室一固執而不レ改二前心一。

これによつて見れば、秀忠將軍が、前代の法度勵行を重ねて申達して來たに拘らず、澤庵は、その申達に顧慮することなく、玉室の弟子正隱を大德に出世せしめたものらしい。この正隱は諱を正知といひ、寛永四年四月十二日奉勅入寺と「龍室山大德禪寺世譜」に出てゐる。大德百七十二代の住持であるが、幾もなく寛永六年八月、四十二歳の若さで死んだ。

正隱の師で、澤庵と相携へて硬論を唱へた玉室宗珀は、澤庵の天正元年生れよりも一年の兄で元龜三年に生れ、春屋宗園の法を嗣いで慶長十二年大德に出世し、その後山内に芳春院、大源院等を創建して、一派の長老として重きをなした。江月宗玩は澤庵よりも一年年下の天正二年生れである。やはり春屋門下の傑物で、特に茶道の造詣を以て著聞してゐた。兎も角、大德一派においては、この三人が中心になつて幕命に抗議したのである。この頃彼等は五十臺、即ち玉室五十六、澤庵五十五、江月五十四の思慮分別の圓熟時代であつた。それにも拘らず、敢然として一山の俗論と闘ひ、幕命に抗したところに、彼等の信念の旺盛さが窺はれる。

二

幕府に對する大德、妙心の抗議、即ち辨疎狀は寛永五年の八月頃に出されたやうだ。そして澤庵が江戸に出たのは翌六年に入つてからである。澤庵の手記した「東關紀行」には、

寛永六、予潛二居於南山一、不レ意依二官事一有二東關之行一、潛居之地者、近二吉野泊瀨一、白頭期二春心一在レ花、那事此行背レ花、世事難レ定乎出レ居時和歌

と序して

三芳野や泊瀨も近きやとりをも歸らぬ花に天津雁金

の一首が收叙されてゐる。南山に潛居すといふのは、宗朝の行狀に、「師素好二幽閑一、到二南京漢國一、寓二于芳林庵一、攀二泊瀨勝境一、寄二栖於閑房一」といつてゐるところを指すであらうか。同紀行には更らに、

十一日入洛、於二本寺一門中の人々相かたらひ、東武の御心をうかゞはむとの事さだめ、それより赴二泉南一

というてゐるのであるから、彼等の江戸出府は幕命によるものではなく、却つて一山の自發的協議の結果に出でたとも解され得るのである。しかし兎も角、その結果、彼等の强硬論が罰せられることとなつて、大德派は彼と玉室、妙心派は單傳と東源がながく東北地方に配流さるゝこととなつた。

その頃澤庵は、出生地但馬出石の藩主小出吉英及びその弟吉親に書を寄せて配流地の決定したことを知らせた。

昨晩御使御座候。我等をば出羽もかみの內かみの山と申所へ被遣候。玉室は赤楯（あかたて）と申所へ被遣候。上之山は六日七日に參候よし候。赤楯は白河のあたり、三日四日路と申候。江月は無別儀候。さて又罷出候事は、定日未知候（下略）

日附は廿六日となつてゐるが、「澤庵和尙全集」にその年月は六年五月であらうと推斷してゐる。卽ちその年の五月廿六日頃には、配流地が決定したけれども、出發の時日がまだ判明しなかつたものと見ゆる。

さてその江戸出發の日であるが、「澤庵和尙全集」第四卷書簡集の註には六月三日ともあり、

七月廿八日とも記してゐる。しかしこの書簡集の責任編輯者であつた辻善之助博士は、最近「澤庵和尙書簡集」を發行し、そのうちに於て「江戸を立つたのは寛永六年七月二十五日で、八月十五日に上ノ山に着いた」といふてゐる。或はこの二十五日附を以て出發の命令があつて、實際の出發はその兩三日後だともいはれる。いづれにしても七月下旬の出發が事實なのであらう。さうすると、前の小出吉英兄弟宛の手紙は或は五月でなくて六月であるかも知れない。それはその手紙に對する註解の斷定は六月三日出發を前提としての推算であるからである。兎もあれ、左樣にしていよ〳〵江戸を出發することになつた。「更關紀行」には、

人は古鄕をはなれて、夷が千島に住者也、只左遷といへば嘆息、行人は跡に名殘多おもひ、とゝまるは行を思ふ。互に袖をぬらすをおもへば、左遷流人と聞より起二嘆息一也。知行所領に付て行といはば、目出たしなどとて取はやし、人々悲嘆は見聞のかはりなり。本心は不レ動、依二見聞一者也。古鄕遠くはなれて、千里の外へ行にもあらず、

秋の水底さへ見ゆる隅田川すみかたき世は我のみぞふる

とある。これは「澤庵和尙全集」の文字で、多少讀み誤まつてゐる所がありはせぬかと疑はる、

處もあるが、兎も角その頃の心境を書き現はしたものであらう。また上ノ山着早々越後本莊の城主堀直寄に贈つた書簡も、明かにその頃の信念を物語つてゐる。

今度の儀、御禮と申せば、いそ（原文の儘の旨、全集に註を付けてある）にて御座候間、一向に不申入候、誠此度宗門之事にまつすぐな事を申て、御意にちがひ、出羽の國までながされしと申事は、二代三代も、人の口に殘り可申候。みやうもん〳〵と申ながら、末世にはせめてみやうもんたりとも殘り候へば滿足に存候間、心さへちりにけがれ候はずば、身のくるしみ何とも不存候。心をむさく人に見られて、身の安き事は悅不申候。心をむさうして身をやすく可仕候ほど、安事は無之候。はぢを思ふ計に、人は身をもはたし、苦しみも仕候ことに候。又々不入事申と可思召候恐惶謹言

今夜あこやの松の月を見申候て

さすらへてあこやの松の木の間よりつみなくて見る今夜の月影

これは世間、出世間一切の事を悟り切つた澤庵としては聊か愚痴めくやうにも思はれるが、しかし上ノ山時代の彼には相當に激越な歌もあるらしいから、さすがの澤庵といへども、必ずしも

常に悟りつくした心境のみには止まつて居なかつたのであらうと想像される。

さて江戸を出た澤庵等はどういふ經路をとつて上ノ山に着いたであらうか。東海寺所藏の書簡によると、

玉室與予三日同途、四日之朝分南北別離、室は配所奥州赤楯、予如書面。乘輿中より小筒取出、盃を取かはし、在露命再會ヲ期

宗彭

天分南北兩鳧飛、何時舊樓雙犇歸、聚散無レ恒只如レ北、世上禽亦有二樞機一。

玉室和

草鞋竹杖傍空飛、舊院何時把レ手歸、水遠山長猶絶レ信、別離今日已忘機。

白川

金風吹起白川波、秋滿胸襟感慨多、百歲人間元旅寓、東漂西泊是娑婆。（下略）

また「肖推寺に與ふる書」として「澤庵和尚全集」中に收錄されてゐるものには、

都へとむかしの人も今の身も便あらばの白川の關

便あらば如何に都へつけやらんけふ白川の關は越ぬと　古歌に御入候

白川より八里ばかり過しあとのなべかけといふ宿にとまりて、あけの朝に、玉室とは右左に別て、さらば互に命全くして再會を期すべきとて道のちまたにて、藥酒の小瓶取出て盃取かはし

（前掲の偈略）

奥方の人うちとけたるやうにして、そこの心さらにしられず、たのみかたければ

うちとけてかたるもおくをしらせぬは心のそこの白川の關

關東と奥州との境を越行道すがら、皆名所どもあり、安積山は妥女のことのはにふり山の井にかげをうつすよし

葛城のむかし覺えて影見ゆる安積の山の山の井の水

伊達の郡を通り信夫庄司が館ちかし

みたるなと人をいさむも折からにわが心さへしのぶもぢずり

配所は最上郡上之山、正宗館仙臺へ一日半路、松島へ二日程、近き所也。

ゆるされぬ身はいつ行てみちのくのちかのしほがまちかきかひなし

あこやの松こゝなれは

千とせ山千とせもかけてめでたきはあこやの松に木がくれの月

此國におもひかけきやきさかたの海士の笘屋をやどとせむとは

數々申度候へ共、便候はゞ重而と筆を留候（下略）

とあるによつて、略々その旅程を想像すべきである。かくて八月十五日に上ノ山に到着、前に掲げた堀直寄に送つた書簡はそれから四日經た八月十九日附のものなのである。

三

上ノ山は山形に近い溫泉場である。當時土岐山城守の城下であつた。土岐家では、澤庵を迎へて、敬重措かなかつた。あるひは寺を建てて、其處に住まつて貰はうかとの議もあつたらしいが、澤庵は言葉を盡してそれを拒否したと見へる。そして結局小さい庵を作ることになり、それを春雨庵と名づけて其處に住むことになつた。澤庵がその頃、諸方へ出した書簡に、その間の消息がよく窺はれる。

（上略）爰元いかゞして居申候と、氣遣可被成と存候て書付進候。

一、六でふ敷の座敷次の間、同く物をき三でう敷、せうじや（從者）へや、小者へや、朝夕めしとゝのへて、くりひへ候はぬやうにとて、ゑんまはりも二ぢうへいをかけ、ゆどの、せつちん、ゑんつゞきにして、風をひき候はぬやうにと、ねん入候。ねる下には、大なるかのしゝの皮をたゝみ、二ぢうの下にしき、下よりもひへ候はぬやうにと、山城殿御ねん入候。はん米はしろめ候て、あとから〳〵入次第、みそ、しほ、薪、あぶら、ごぼう、大根、又なばたけは、のきあたりにつくりをきたるを、下人に被申渡候。しはすには、山城殿、江戸より、うらには、いかにもうつくしく、やは〳〵のきぬさつけ、おもてはうつくしき物をきらい申とて、あらきつむぎをつけて、小袖一つ。いかにもうつくしきかみこにきぬのうらつけ、わたあつく入、又御内儀からとて、はだにき申候わたこ、けつこうにして給候。せうじやには、爰元にて被仰付候て、もめんぬのこうつくしく、小者にも同く何から何までねんごろ、中々申やうなる事にてはなく候。山城殿江戸へ御上之時も、道二里が間は、馬の上から、我が事よくちそう申て、事不如意になきやうに、又あまりちさうすぎ候はゞ、いやに可思召候間、何様にもきに

あひ候やうに、家のとしよりども心得候へとて、くれ〳〵被仰置候。とき〳〵は城からも、又としよりどもからも、なぐさみにぺんとうどもも進じ候へ、それもいやに思召候はゞ無用。茶のこなども、とき〳〵進候へなどと被仰置候故、けつこうにもちをつき候て置、四日五日に一度つゝ給候故、去年冬中も、毎日もちをたべとをし候。正月の事は不及申候。當年の正月程、もちたくさんに御入候事は一期になく候。門前も二重につくり、よそからのつかひなど、むざと參て、六ケ敷とて番屋をつくり、人ををかれ候へ共、さむき時分、人のくるしみに成候と存、わび事してをき不申候。次兵衛と申侍一人、我々心安めしつかひ候樣にとて、はしめてふちきりまひをかろく、門の内にをかれ候。前からの者、家中に多候へ共、前から居申候侍は、きやくしんに可存とて、あたらしく侍をおかれ候、寺もあり〳〵と大につくり度候由、色々被申候へ共、たつて申、いかにも小にと申て、歌をよみて、としより衆へ見せ候へば、山城殿へ見せられ候。就其合點候て、右之程に小さくつくられ候。歌には「人はたゞ心をひろくすみなして、かりの庵はとにもかくにも」、皆々家中衆、としより衆はじめ、誠に主のおぢばうずなどの樣に被思候。爰元之事はおもひの外心安事にて候。國とをく候て、皆々に對面申事無之ば

かりにて候。それは出家の事にて候へば、いづれもわが國所に居者はなく候。武士もわが國には不居候。去年當年は氣力もよく、持病もすきとよく候て、一段滿足に候。去年爰元へ參候てから、江戸京、さかい方々からの音信に、狀の返事かきさす日もなく候て、やう〳〵としはすきはに成候へば、人の參候時分にてもなく候ゆへ、いきをつぎ候。（下略）

これは澤庵が弟の秋葉半兵衛に送つた手紙で、正月廿五日の日附があるから、配流の翌寛永七年正月のものであらう。その頃はすでに春雨庵も新築が出來、しかもそれが小庵ながら、防寒その他いろ〳〵の點に心をこめて、建築されたものであつたらしく、それに藩主土岐山城守の心づくし、從つて家老をはじめ家中一般の鄭重な待遇ぶりがこれによつて推測出來る。この手紙にはなほこの外に江戸、京、堺その他諸方からの音問引もきらぬ狀態を事細かに記し、「返事に千萬迷惑申候」とまでいうてゐる。これによつて見ると、當時においてもすでに、武家大名の間における彼の信者は相當に多かつたやうで、それは必ずしも後年、將軍家光が、特に彼を親近したために生じた現象ではなかつたらしい。劍禪一如の見解をとつた彼の教說は、すでにその頃一般武辨の心を掴んでゐたものと見ゆる。現に配流の彼を預つた土岐山城守の如き、彼の提撕を受けて

槍術の上に目得記流の一派を創造したといふし、山城守の師松永定好も鳥居家に仕へて山形に住んでゐたが、しば〳〵上ノ山に彼を訪ねて參禪する內、槍術の極意に徹底して一旨流の一派を開くに至つたと傳へられる。人口に膾炙する柳生但馬守との關係といひ、これ等の人々との交涉といひ、兎も角、澤庵禪はおそらく最も代表的の武家禪というて然るべきものを、そのうちに持つてゐたというてよからう。

さて上に述べたやうに、澤庵の住む小庵は寛永七年の正月にはすでに出來上つてゐた。これを春雨庵と名づけたのは、しかしやはり春雨を聞く頃になつてからのことであらうか。

上ノ山の城外、松山といふところに春雨庵をむすぶ

思ひねてむかしわすれぬさよ枕、夢路露けきまどの春雨。

はなにぬる胡蝶の夢をさまさじとふるもおとせぬ軒の春雨。

ちる花ををしむ涙か入相の聲もうるほふはる雨の空。

苔あつき草の庵の春雨はしづくにだにも降るとしられず。

これ等の歌によると春雨庵は春雨の頃に出來上つたやうにも思はれるのだが、しかし前にもい

うた通り冬にはすでに引移つてゐたのである。そして初の間に、特に何といふ名前もつけてゐなかつたのだが、春雨の幽趣が特に氣に入つたので、その頃になつて、春雨庵といふ名をつけたものと見るべきであらう。兎もあれ、この邊陬の地方における風物は、澤庵にとつてなか〳〵珍らしいものであつたらしい。

羽州謫居三月始見梅

春已半過花未開、山々猶有二雪之堆一、北方南地氣候異、三月移時始見レ梅。

雪中遣興

幾回揭レ箔又還懸、寒氣透レ膚雪滿レ天、風碎二瓊瑳一小窓下、瓦爐溫レ手負レ花眠。

といふやうな作もある。

しかもその間、諸方よりの音信が常に絶へず、またはる〳〵訪ねて來るものも尠くなかつたらしい。一絲等が京から訪ねて來たのも、おそらく謫居第一の春を迎へた年であつたらう。

送二一絲自奚二徒子歸洛一

千里訪來千里歸、圖知前路更依々、綠陰重日離二斯地一、梅雨催時定帝畿。

思ふに澤庵ほど筆まめに消息を書いたものは世に少からう。現に澤庵全集第四卷に收錄された書簡は三百六十餘通に上る。それほど今に殘つてゐるのであるから、すでに失はれてゐるもの、或はまた世に知られずに居るものを數へあげたら、それは驚くべき數に上ることであらう。自らそれほど多くの消息を書いてゐるに拘らず、彼ほどまた他より來る問信をきらうたものも尠からう。澤庵の手紙には常にこの問信の多いことを迷惑がつてゐる。にも拘らず、またその問信のことを一々とりあげて、それを披露してゐるやうに見らるゝところもある。

一、四月廿三日之御狀、今日六月廿二日に披見申候。さて〳〵遠路人を給候。半兵はじめとして親類共の內、一人も音信とて、人などくれ候はゞ、歸洛申候とも、中たがひと申遣置候故、今日まで半兵方よりも人を進不申候。十年音信不通にて候とても、貴殿之御事御心中にそりやく可思召と不存候。此方に存候通も其分に定而可思召候。さ候へば、人を不給候とても、くるしからず候。先々我々事不思議の仕合にて、此國に居申候。身にかゝりたる儀にてなく、宗體之事にて、我等式も、はやかみ一兩人之內にて候へば、可申事不申候ても不成身上にて候故、此通に候。然共外聞惡事にては無之、結句尤之心中などと申やからも御坐候などと申候へば、

心底清存候。其上爰元に居申候へ共、申さば江戸ちかき國にめしをかれ、土岐山城守殿へ御めつけとして、奉行衆なども、御狀被遣、御念入候事にて候へば、山城守殿ねん比さ、中々我等國本にての馳走之樣なる事にてもなく、家中の侍衆までも、殿の祖父などのやうにおも〳〵しくあひしらひ、馳走不大方候。何にても不足なる事なく候。米、すみ、薪、鹽、味噌、何にても城よりたくさんに、つぎ〳〵に被仰付、下々のき申物まで、冬夏ともに結構に念入候て被仰付候。其外方々大名衆より、色々の音信、去年八月初、爰元へ參候、茶なども、はやつめたるつぼ五つ六つ參候。金子などは十兩廿兩づつ給候方候へ共、皆々返進申候。少もとめ不申候。其外の音信どもも、あまり方々より人之參候返事、一段氣がつき候て、わづらい申候間、當年は家中之としまり衆を賴申、法度にいたし、我々耳に入不申候樣に仕、いづかたより參候も不存候。此御使も中々我等不存はづにて候が、我等いもうとなどの方より參候などと使申候か、又とり次之人、貴殿と別而無他事間之由使申に付、とりなしに被申候か、右之通被申とて、耳に被入候故、返事申候。京、大阪、堺又江戸方々から參候使ども、皆々我等不存候て歸申候。此使は不思議に聞申候て返事申、我等も令滿足候。我等事一段とそくさいに候て居申候。此所

一段よき所にて候。何にても、事のかく事なく候。湯御座候て、下々まで、日々冬夏とも入申候て、くつろぎ申事にて候。我等は一ケ月に、二度三度程は入申候。やがて一町ばかり之あたりに御入候か。居申候庵も、わざとちいさくと、色々わび事いたし、かやぶきにて候へ共、內をばきれいにいたし候て居申候。小者一人、出家一人にて下申候。爰元にて侍一人めしつかひ候て、用をも申候樣にとて、ふちかた切米など被申付、あなたより人をもたづね被置候間、不及是非候。山城殿扶持人は何程も御座候へ共、隔心と可有之とて、はじめての人を被置、心あつかひ候樣にとの事にて候。小姓をも一人と達而被仰候へ共、其儀者入不申候とて置不申候。か樣に念比に御座候。萬事我等事、無御心元思召間敷候。我等心は、京とてもいなかとても、かはる事もなく候。いづくも同前に存候。國の床敷事もなく、何心もなくて居申候。來春、上儀可相調候間、歸洛可仕樣に、馳走の方々よりも、折々被申進候。公儀之事者、はかりがたく候。御氣にそむき、か樣の仕合に候へば、歸洛可仕とは不存候。御馳走衆も、油斷不被成由之御狀とも、折々給候。出家はだんなにつき候ては、いかなる遠國へも參者にて候間、此國とて居申間敷國にてもなく候間、人之懇にさへ候へば、いづかたも同前に候。其上我等事は、かれ

木の様にして居申者にて候故、たべ物にも、き物にも、ゐ所にもかまい無之候間、何のくもなく候。但馬に居申も、固前と可思召候。けつく國よりも、山城殿の御懇馳走はまし申候。馳走過候て、何とも迷惑に存ばかりにて候。半兵も何事無之由候。然共近比は左右も不承候。其元無事に御入候て、目出度存候。たがひに壽ながらへ、そくさいにて御めにかゝり度候。さりながら江戸などへ御越候とも、かならずこゝもとへ御出候事、返々御無用に候（下略）

この手紙は實弟秋庭半兵衛に送つたものと同じやうなことを認めてゐる。それに「我等いもうとなどの方より參候」と使がいうたというてゐるから緣戚のものに送つたものに相違ない。そして如何に、方々からの音問を迷惑がつてゐるかは、このうちによく現はれてゐる。更らに左のやうな歌も「東海和歌集」に收錄されてゐる。

都人消息とも多く返書數々にして、染筆に倦、各一首を短册に書てつかはしゝ歌とも

陸奥は道遠けれどおもひおこし思ひやるにはちかの鹽かま　宗昏

花や散ちらぬさきにといそかれてそなたはかりのわが心哉　衛門太

なからへは又も此世にあひも見む君も我身も命なりけり　高橋金左衛門

たつねつるうき世の外はたきものゝかほる煙の中にこそあれ　楢井平右衛門香をめくむ

わかれこし袖しほりつゝ幾年か年波こゆる末の松山　三室圖書

思ふほといかて心をつくさましたゞ一筆のつほの石文　谷口長右衛門

わするなよたゝひと筋の法の道二つはあらし有や無やと　三谷猪右衛門

四

澤庵が配流のうき目を見ても、自ら止むを得ずとあきらめ、寧ろ江戸近くの國に置かるゝのを恩典とさへ思うて居り、更らに出家の身は何處如何なる國にも居る運命をもたねばならぬものであるからと思うてゐたことは、上に引用した秋庭半兵衛その他に與へた手紙によつて明瞭であるが、特に次の書簡に於ては、その事が極めて明確に强調されてゐる。

細書再三轉誦了。御心中之處、令怡悅候。乍去出家者、三界ヲ家とする事勿論に候間、何とても悲事もなく候。武士の御國がへ同前と存候而居申候。御氣遣候間敷候。御なげきも候間敷候。世をなげき、身をかなしむは、白地凡夫の上に候。凡夫にも自然と得心之者は、世ヲ嘆事

はなく候。爲法爲先師、我と心より如此成行候身に、何の嘆あるべく候哉と存候。御氣遣候間敷候。御折檻之初候へば、又赦免の終も可有之候。命候はゞ互に可遂再面候。白州遠路是迄御音信、實書中難申盡存候。此等之旨奉願候。恐々謹言。

しかし時々は都のことも思ひ出でたのであらう、渡邊宗甫に贈つた手紙には次のやうに認めてゐる。

舊冬者、棚倉迄芳書、殊更頭巾一片給候。寄思召御懇意難謝候。大德寺の儀、面白罷成候。時節到來と可思召候。とにもかくにも末に成候、不及是非次第候。玉室、愚老ともに命候はゞ、可遂再面候。山科に御住居候由、不思議に存候。自昔有子細所にて候。誰も住ばやの所にて候。あはれ自由の身と成、其邊にかりの庵ヲ結び、しばし成とも居申候はんと存候。所から御浦山敷候。一首之詠奇特千萬候。いつの稽古候哉とうたがはれ候。うしろは山、前は谷水、おもひやられ候。

すむときゝておもひこそやれ比もいま梅かほるらん山科の里

古歌にも梅などよみ候而、さぞ〳〵折からとおもひ出候。爰元遠國之事候。可有御推量候。乍

去愚身事に候へは、たゞうか〳〵として、時を送ばかりに候。久々御煩之由候。如何無御心元候。實に貴老十四五の以前よりの交にて候へ共近年は互に遠々に候つる。今又はるかの遠國に候へば、一しほ御床敷候。宗且とは今程御間よく候や。いつ比かしか〳〵とも候はぬ樣に承候つる、いかゞ候哉。さて〳〵むかしに何事も成行候。玉室息災に候へかしと存計候。命成けりにて候。我々事は、いづくの浦にて、さてはて候とても、心にかゝる事もなき身に候。玉室之事のみ存候。其邊はさる所にて候。面白所ども多可有之候。おもひやるばかりに候。一度罷上候はゞ、御庵室へ立寄、御茶などたべ度計候。恐々謹言

棚倉とは玉室の配處である。其處へまづ宗甫からの手紙と贈物が送られて、玉室の許から澤庵のところへ轉送されたに對する返事であらう。斯やうにして、一面には京、堺等の空をしのびながら、また一面には現在の境遇に甘んじて、土岐山城守その他の懇篤なる待遇に感謝しつゝ、一日一日を送つて行つたのだ。

土岐山城守近習喜内といふ者して菜園の薯蕷を贈られければたはれ歌よみて喜内につかはす

御城より君の使に喜内殿かたじけなしと手をつくねいも

又海松一重を贈られけるに

ちうばこに入たる物は見るめにてふたゝび君にあふ心ちする

といふやうな當時の日常生活を髣髴さす歌もある。また山形の松本定好に贈つた書簡には、

昨日者爰元へ御越之由承候。不懸御目、御殘多存候。松茸一籠給候、相達候。今日又庭前之菓子梨實、栗、柿、棗、色々贈給候。當國にて一向見不申候棗、別而賞翫候。切々御音信過分難申盡存候。來月比者、城州可有御歸國候間、定而爰元へ可有御越候。其節相積御禮可申入候。

恐々謹言

といふやうなものもある。これも澤庵の日常生活を窺ふ資料となり得る。

五

そのうち寛永九年に入つて秀忠薨去の報告が上ノ山の邊地にも入つたのである。

寛永九年壬申正月二十四日臺德相國うせ給ひて武府には人々いたみの歌ともよむよしを

聞きて

立かへり見まくほしさを心にてむすふもあやな岩城の松

一度とむすふを今のなけき哉とけぬなからの岩城の松

つくはねの嶺のつゝきの海も見す霞の上に君こひんとは

この以前から特赦の噂が起りつゝあつたことは、前に引用した書簡のうちにも、ところ〴〵にほの見へてゐたところであるが、しかし當時の權力者たる將軍他界の結果が、如何に世を動かすかは容易に推測を許さぬ處であつたらう。其處で澤庵は一切世事に關心することを斷念すべく決心した。

この年みつのえさるなれば見さるきかさるいはさるといふことを

春の花さきにけらしも玉ほこの見さるのとしといふかあやなき

よしあしのうき世のことをきかざるの年の朝もうくひすのこゑ

かたふくもよしやさもあれ我庵のす戸の竹垣いはさるの年

何ことも見すのえさるの年なから花にはゆるせ春の一とき

しかしこの年は彼の赦免の年であつた。そして七月の末には江戸に歸つたのである。「行狀」の記者宗朝は、

師在二羽山一者四歲、扁レ所レ居曰二春雨一、學徒又衆也。吁、天爲レ令二師化二遠方一、蓋有二此貶謫一乎。至二壬申一今大樹源君、憐二二老終二于外夷一、更下二鈞命一、共召二喚之一

というてゐる。此處には二老の外夷に終るを憐みというてゐるが、この時赦免されたのは澤庵、玉室のみならず、妙心寺派の二人も同時であつたことはいふまでもない。それは兎も角、澤庵の上ノ山流謫が、その地方人に深い感化を與へたことは事實である。この僻陬の地に化を施す機緣となつた事實は宗朝のいふた通りだというてよからう。澤庵は歸途、仙臺地方を廻つて松島を見物したものではあるまいか。彼の作中には、松島に關する詩歌が大分ある。沼田藩工藤行廣編輯の「萬松祖錄」には、上ノ山滯在中に行はれたものであらうというてゐるが、しかしそれが何時行はれたかの明證がない。兎も角その以前から、松島遊覽はしば〳〵勸誘を受けてゐたものらしい。

仙臺の片倉小十郎景繼より心の月とよみておこせたりしかは

むねのそら心の雲の絕間よりひとつの月の影ぞさやけき

同人いまた相見ざる時より文の通ひはかりのちきりにて

見ぬ人に心はかりを契にてうき世しのふの里の名もうし

ゆるされて歸らん時には必たちよりてなとことつてして

かりにたにその里人をみちのくやしのふの鷹の山かへりせば

といふような歌の往復が「東海和歌集」に載つてゐるのである。左樣な關係から、歸途に松島の勝を見、仙臺の道友を訪ふことにしたものであらうと推測するのが、むしろ妥當の見解でないだらうか。

松島にて

なからへば又も來て見んこゝろより壽も雄島まつしまの月

日數へてけふみちのくのとほさをも忘るゝからにちがのしほかま

松　島

松しまやをしまぬ老の命さへなからへてこそけふきてもみれ

經松島鹽竈二首

久有レ望其志不延、而今始見兩嬋娟、詩人多少得ニ斯句一、松島月兮鹽竈烟。
十倍素聞鹽竈浦、縱開ニ海口一疊難レ宣、曉鐘擊落山西月、潮滿法蓮華院前。

松　島

未レ看ニ松島一莫レ誇レ景、昔日嘗聞今始驚、向レ人他日如何語、心有ニ餘言一終不レ成。

松島五大堂

海寺鐘聲促ニ夕陽一、兼レ山兼レ浦凝ニ長望一、疑身是至ニ龍宮界一、影在ニ波心一五大堂。

雄　島

雄島晩望斜照邊、心隨ニ風景一只茫然、明朝離レ此行千里、夢夜夜在ニ鷗鷺前一。

籬　島

吹來吹去霧籬島、一景隨レ風多景生、漁客歸レ村僧入レ寺、櫓聲斷後又鐘聲。

これ等の詩や歌を見ると、松島の美しさが相當に澤庵の詩情を動かしたものと察せられる。

和ニ仙臺覺範寺峭嶽禪翁韻一

始見仙臺句裡山、五城樓北一樓閑、雲霞庶處可レ難レ到、知是丈人平步間。

贈ニ同人一

覺範重來文字禪、舌端波瀾是天然、三生石上精魂也、復入ニ扶桑一探ニ遺篇一

等の作も、この時のものであらうか。兎もあれこの松島行は澤庵の記憶にその後も時折蘇つたものと見へる。

奥より歸りし後に松島の月を見しを思ひ出て

松島や雄島が磯の月を見てをしみしかひもある壽かな

といふ歌もある。

かくて寛永九年七月下旬には、もう江戸に歸つてゐた。柳生宗矩宛の書簡

一昨日罷上候儀を元盛を以申入候つる。今日者丹後守殿へそと可懸御目ため、是まで參候。それへも參度存候へ共、定而人多に可有御坐候間、出家の見苦候間、是にひかへ申候。いかゞ被成候哉。日々御隙入候て、御くたひれと推量申候。是にはたれも無御坐候而かたり申候而居申候。恐々謹言

といふ七月晦日附のものが、澤庵全集第四卷書簡集に、入府最初の消息として收錄されてゐる。

そしてその註解に、

この書狀は蓋し寛永九年のものなるべし。その故は日附に七月晦日とありて、文中に「一昨日罷上候」云々とあり。日本長暦に據るに、寛永九年七月は小の月にして、卽ち晦日は二十九日なれば、一昨日といふは二十七日に當る。而して和尙の出羽上ノ山より江戸に着したる日が恰も寛永九年七月二十七日に當れり。因りて寛永九年のものと認む。

と記してある。宗朝の行狀には、

師一去二東邊一抵二江府一、居二神田廣德寺一、又探二幽寂於城外一寓二駒込之地一。

といふてゐる。さてこれから後に澤庵と家光の相見があり、澤庵自身には極めて不本意であつた得意時代が開けるのである。

隱元渡來の頃

一

寛永の末年から、隱元が來朝した承應年間にかけての十四五年は、當時に於ける禪界耆宿の凋落が、特に目立つて多かつたのである。寛永十八年には大德の玉室、廿年には同じく江月、その翌正保元年には妙心派の有力者で江戸東禪寺の開祖であつた嶺南、同二年には東海寺の澤庵、それにその翌三年には永源寺の一絲文守も三十九歲の若さで病死したのだ。それから三年ほどの間を置いて慶安三年に豐後多福寺の雪窓が逝き、更らに四年ほどして承應三年に、曹洞宗の長老山城興聖寺の萬安が遷化した。そしてこの承應三年こそ、隱元來朝の年であつたのである。

斯樣にして舊い時代の權威者が年々凋落して行つた。しかしながらこれ等の人々によつて代表された舊い時代に代る新しい時代も、その間に默々として生長してゐたのである。曹洞中興と稱

せられる月舟宗胡と、自らも臨濟一方の法將であり、その上更に白隱と並んで今日の臨濟禪大成に寄與した古月禪材の師であるといふ特殊の地位を占むる賢巖禪悅とは共に元和四年に生れ、承應二年には賢巖すでに三十六歳で豐後の多福寺に視篆し、月舟はその前年能登の總持寺に瑞世し、有馬の山中に聖胎長養の時代に入つてゐたのである。それから、月舟、賢巖と殆んど生死を同うした監珪永琢は、彼等よりも四年後の元和八年に生れて、その頃すでに三十を越し承應二年に受業師雲甫に死別して、翌三年には備前の三友寺に於て大に岡山の儒者達と論議を闘はした年である。もしそれ後年の白隱を生むに至つた正受老人及びその師至道無難の事蹟を檢討すると、無難は寛永七年、愚堂和尙に從つて江戸に下る途中に於て本來無一物の難關を透過し、同じく十八年、四十の齡を迎へた時、遂に妻子を捨てゝ本格的に佛門に入つた。だから正應年間にはすでに五十代であり、正受老人は寛永十九年生れといふからまだ十代に入つたばかりの時代と見るべきであらう。

これ等の人々はいづれも禪界の新時代を負うて立つべき法材であつたが、その外にも當代の耆宿としてなほ一代の權威と認めらるゝ老僧が幾人か殘つてゐた。卽ち妙心派の雲居、愚堂、大愚

等の如きは全德川時代三百年を通じても、それ〴〵一方の禪將として推重せらるべき法材であるというてよからう。いづれも頹齡七十を越してゐたのだが、しかし當時の禪界が、これ等の人々の存在によつて如何に重きをなしたかは、此處に說明するまでもあるまい。

澤庵は、その出生地但馬出石の領主であり、且つまた彼の熱心なる信者であつた小出吉英に贈つた手簡に於て、「紫野の佛法、今の世には用に立ち不申候」といひ、また京都の宮廷、江戸の幕閣等から屢々嗣法の僧を養成することの勸告を受けたに對しても、言を左右に托して一切これに應じなかつたと傳へられてゐる。思ふにそれは、澤庵の次の時代に對する不信任の情を端的に表現したものといふべきであらう。もし狹義にとつて紫野の佛法といふ意義を、大德一派の敎義と解するならば、それは正しく澤庵のいふた通りであつて、澤庵沒後の大德派には、注目すべき禪將がまことに寥々として數ふるに足るものがない。しかしながら、萬一にもその意義が禪宗全體を指す意味ならば、澤庵の焦慮は結局杞憂に過ぎなかつたといふべきではないだらうか。

德富蘇峯氏は嘗つて、日本禪宗の興亡を論じて、禪宗本來の意義からいへば足利時代はその最も衰頹した時代であつたというてゐる。

若し夫れ室町時代に至りては禪宗は或は文藝に、或は美術に、或は政治に、或は社交に、あらゆる社會的生活と抱合し、其の感化を及ぼしたるも、然も禪宗其物の本體に至りては、殆んど模捉すべき實質を見ず、乃ち世間的流行より見れば、之を極盛といふを得べく、禪其物より見れば、或は之を極衰といふを得可し。（成簀堂叢書第九篇「大梅夜話解說」）

斯く論じて蘇峯氏は、足利時代の禪界、必ずしも人なきに非ざるも、「然れども彼等の多くは文字禪にあらざれば世俗禪なり」と斷じ、さて德川時代に及んでゐるが、其處で更らに斯ういふ風にいうてゐる。

德川氏の初期に於ては、亦た若干足利氏の政策を踏襲し、禪宗を政治的に使用したり。卽ち金地院崇傳の如き是れ也。（中略）

斯る時代に於て吾人が見逃す可からざる禪僧二人あり。其一は澤庵にして、他は一糸也。彼等は政治僧としてよりも、學僧としてよりも、詞僧としてよりも、寧ろ碧眼胡兒の眞面目たる禪僧としての眞骨頭を有し、眞面目を發揮したり。若し德川氏初期に於て、正しき意味に於ける禪道の興隆ありしとせば、此の二人に負ふ所甚大ならずんはあらず（同上）

斯樣にして足利時代に於て文字禪、世俗禪に陷つた禪宗は、德川初期に至つて、碧眼胡兒の眞面目を發揮する新しい傾向を示して來たと見てゐる。澤庵はこの傾向を悲觀して、自ら子孫を斷絕し、紫野の佛法は今の世に用立たずといふたのであるが、しかし當時の禪僧がすべて澤庵の悲觀的見解をとつてゐた譯ではない。澤庵沒後十五年、萬治三年妙心寺の開山遠忌三百年に際して、愚堂が佛前燒香の偈に、

二十四流日本禪、惜哉大半失二其傳一、關山幸有二兒孫在一、續焰聯燈三百年。

というてゐるのは、妙心寺開祖無相大師關山和尙の法脈維持に對する彼等の矜持と確信を披瀝したものと見るべきであらう。最初「關山幸有兒孫在」の一句は幸有愚堂在というたが、その席に居合はした大愚宗築が、「此處に大愚もゐるぞ」と遠慮會釋もなく大聲を放つたので、有兒孫在と訂正したのだといふ傳說もある。それほど彼等は眞面目に自ら矜持する處があつたのだ。

斯樣な狀態で、德川初期の禪界は、足利時代の舊い隷屬的慣行の世俗禪を離脫して、達磨の眞面目に還らうとしてゐた。そしてその大きな潮流の間に在りて、まさに前の大濤が一つ退いて、新しい巨浪が跳躍して來ようとする關頭に在つたのだ。

二

話を續ける前に、この際一つ、隱元渡來の承應三年における目星しい禪匠の年齡を檢討して置かう。

愚堂	七八	雲居	七三
大愚	七一	無難	五二
月舟	三七	賢巖	三七
盤珪	三三	卍山	一九
正受	一三	無著	二

斯樣な次第で、雲居はその後五年に當る萬治二年、愚堂は七年後の寛文元年、大愚は十五年後の寛文九年まで生きてゐた。なほ後年禪宗史上の巨人となつた古月と白隱についていへば、古月はその後十三年を經た寛文七年、白隱は三十二年後の貞享二年に始めてこの世に生れて來たのである。

一體その頃の日本は、一種の勃興的氣運が上下に汪溢してゐた時代であつた。秀吉の大陸遠征の後をうけて、個人的にいろ〳〵の人達が海外飛躍を試みたのもこの時代であり、國內においては、あらゆる新奇なもの、外國的なものに深い關心をもつて、それを研究し、それを咀嚼して、これを攝取し、これを滋養分として新しい自己を建設せんと努力してゐたのである。例へば、足利時代の末期から急にその勢力を得て來た基督教の蔓延の如きも、結局は斯ういふ時代に、斯ういふ人心の潮流に乘じたがために外ならぬともいひ得られよう。

斯やうに當時の日本は、精神的飛躍の狀態にあつた。だからふとした木の葉のそよぎも、國民の心理に深い感銘を與へるといふ狀態にあつたのである。其處に、本國においてすでに著名になつてゐる支那の禪僧がやつて來たのだ。その噂が直ちに全國の津々浦々にまで耳から耳へと傳へられたのも無理がない。

それはひとり隱元に限つたことではなかつたのである。現に隱元の渡來に先立つこと三年、慶安四年、長崎崇福寺の住持となつて渡來した道者超元の如きも、非常な評判となつて、日本の禪界に相當な足跡を印象した。隱元渡來前後の情勢を知るためには、まづ第一にこの道者元の業蹟

を檢討せねばならぬ。

妙心寺藏版川上上孤山著「妙心寺史」に左のやうな一節がある。

開山三百年遠忌前、卽ち慶安三年（隱元來朝前三年）明人道者（超元）長崎に來り、崇福寺の三世となつた時、我禪界の雲衲翕然として風を望んで之に嚮うた。中にも我派の盤珪、無門、濟宗の三師は道者の禪風を憧憬し、其欲する所に向つて各自其長所を發揮せんとし、道者が歸國するに及んで、三師は何れも相互に後日を約して分散した。惟ふに三師は道者禪師を關山一流に和して其機用を發現したのであるが、今や吾人は三師終生の業績上から此の點を推究すると、丁度三師は敎中に所謂三學（戒、定、慧）の隨一に向つて專ら其特殊の風格を發揮したかのやうに思はれる。無門は慧學に專進して閱藏を主義とし、遂には法山に藏經を謄寫し輪藏を設備した。盤珪は道者の不生禪を發揚して頻りに持戒主義を鼓吹し、濟宗は專ら傳法の定を主として道者に嚮うた。

此處に三百年遠忌といふのは、前に述べた正法山妙心寺の開山關山和尙の三百年遠忌をいふもので、卽ち萬治三年、愚堂が佛前燒香に關山幸有兒孫在といふ偈を捧げた時を指すのである。そ

して此處に出て來る盤珪、無門、濟宗の三人中、無門は廣島禪林寺虛櫺の法嗣で、十七歲にして剃染具戒した。長崎に出て道者の下に居たのはおそらく廿四五歲の頃のことであらうか。彼は道者が萬治元年に支那に歸つてからも、なほ九州地方に居たらしく、肥前の諫早藩に關係をもつに至つたのはこの頃のことであつたらしい。その後攝津の勝尾山に住んで、其處に明本大藏經を寄進し、更らに最勝王經を謄寫飜刻して日本六十六ケ國の名山大刹に寄贈する等、その頃から藏經に對する非常な關心を示してゐたのである。しかし無門の大事業は、何というても妙心寺の大藏經書寫事業の完成である。その頃妙心寺には完全なる大藏經は所藏されてゐなかつた。其處でそれを設備しようと思ひ立つたのが無門で、それには如何なる種類のものを撰定すべきかが問題となり、誤字の多い活字版よりも謄寫本を備付するがよいといふことに決定し、建仁寺所藏の高麗版を借り、五年の苦心經營を閱した後、漸くその書寫を完成したのである。この經費は、無門が諫早藩の有志者から得た捐金を基本としてこれに充てた。

それから濟宗であるが、彼は道者の許を辭してから、豐後多福寺の賢巖に參し、同門の古月、定山、大機、大道等と切瑳拈提するところあり、豐後の海潮寺に住して、西海の禪界に重きをな

した。

盤珪に對する道者の關係はおそらく、彼が日本の禪界に感銘を與へた最も偉大なる業蹟であらうと思はれる。「盤珪佛智禪師法語」に左のやうな一節がある。

師（註、盤珪）また曰、今此會中に老若男女貴賤僧俗四衆の弟子、惣じて諸方の舊參、新到の四來の雲衲、多く御坐る。若、人々悟たとおもふ衆が御座らば、何人によらずいふて出さしやれ、身どもが證據に立てしんじやう。身どもが二十六歳の時、一切事は不生でととなふといふ事をひよつと思ひつきわきまへましてから、それが人に咄して見とふござつて、あそこへ行、爰に行て見ますれども、一切事が不生で調ふといふ事を思ひ付てより、天下に身どもが三寸の舌頭にかゝる人は御座らなんだわひの。身どもがわきまへました時分は、明知識がござらなんだか、又ござつても不緣で御目にかゝらなんだか、身どもがために、たしかに證據人に立てくれてがござらいで、いかふ難儀をしましたわひの。今この難儀した事を思ひまして、かくの如くに病者にござれども、悟つた人が御ざらば、其證據人に立てしんじやうばかりに、大願を起して、身命をおしまず、毎日此座へ出まして、皆の衆にあふ事でござるわひの。したほどに此事

をわきまへたとおもふ人が御ざらば、身どもが前でいわしやれい、證據に立てしんじやうわひの。身どもが年三十のとき、師匠のいわれまするは、此間長崎へ南院山道者朝元禪師といふ唐僧が渡らせたといふ程に、其方も行てあふたらばよからうとおしやりましたによつて、長崎へ行支度をいたしましたれば、また師匠のおしやるは、其方も今までは十德ですんだれども、今は唐僧にも相見にゆけば、十德ではすむまひか。法のためでもある程に、本のころもを着て長崎へ行て、道者禪師にまみへよといはれましたに付て、始て本のころもを着まして、道者禪師にまみへまして、直に身どもがわきまへました通りを申て御ざれば、道者一見して則汝此漢生死を超りといはれました。其じぶんの知識の中では、まだしも道者が此ごとく少ばかり證據に立てくれましたが、今仔細にむかしを思ひますれば、道者も今日十分には御ざらぬ。道者もし幸ありて、今までもいきて居られましたらば、よき人にしてやりましやうものを、はや〳〵死なれまして不仕あはせで御座る、ざんねんでござるわひの。

後年の盤珪から見れば、當時の道者はなほ不十分なところがあつたやうに思はれるが、しかしその頃、盤珪の契悟を肯つたものは、ひとり道者のみであつたといふのである。道者の盤珪に對

するこの態度に對しては、當時、道者の許に、四方から雲來してゐた納僧どもが容易に納得しなかつたらしい。其處でいろ〳〵の議論が起つたといはれてゐる。しかし盤珪はすべてこれ等の挑戰に對して應戰少しも屈しなかつたばかりでなく、平常時の所作は極めて恭謙であり、自ら典座寮に入つて大衆の臺所奉行を勤めたのである。斯樣にして盤珪は一年近くも道者の下に居たのであらうか、それから崇福を辭して吉野の山中に入り、其處で靜思瞑想の三昧に入り、受業師の雲甫が死んでから明暦元年春、再び長崎に道者を訪れた。

元來盤珪は受業師の雲甫以外には、殆んど師らしい師についてゐない。二十六歳、初めて不生の理を悟つた際においても、これを天下の師僧に質さんと願うて、まづ美濃に愚堂和尚を訪ねたのであるが、時恰も愚堂は江戸に下つてゐたので面謁が出來なかつた。よつてその地方に名を得てゐた石翁といふ長老に參じたが、しかし彼も盤珪の求むる處に酬ゆることが出來なかつたのである。盤珪のいはゆる「天下にたしかな證據人がなく、難儀した」といふのは、その頃のことを述懷したのだ。其處に道者が現はれて、兎も角、彼を導いたのであるから、その感激もまことに深いものがあつたであらう。

これ等の人々の外に賢巖も道者に會うてゐる。曹洞派で最も深い交渉のあつたのは、長崎皓臺寺の獨庵玄光であるやうだ。彼は道者が支那に歸るまで隨侍してゐたばかりでなく、その後も長崎に止まつて皓臺寺の月舟宗琳に師事したのである。なほこの月舟宗琳は、月舟宗胡とは別人である。しかし時代もほゞ同時代に當る。現に宗胡の方の月舟も、この頃受業師肥前圓應寺の華嶽和尚を省覲した途次、長崎に至り、法兄松雲宗融と相携へて道者を崇福寺に訪うたことがある。「月舟老和尚行狀」によると、その時、「三人相逢笑談互樂」と記してゐる。この松雲宗融はその頃の奇僧であつて、長崎に月桂山光雲寺を開き、皓臺寺の重興一庭和尚を開祖として自ら二代に居たのであるが、如何にも放散な禪僧らしい逸話がいろ〳〵傳へられてゐる。その他、鐵心道印、雲山愚白をはじめ、後に隱元の黃蘗下に走つた慧極、潮音等の人々は、みな初めは道者の門に集まつたのである。

道者は元來、支那の杭州雪峰亘信和尚の法嗣で、隱元の法姪に當る。即ち師の亘信は隱元の法弟なのである。だから隱元が日本に渡來するに際しては、亘信から道者宛てに、隱元の爲めに助力すべき旨の信書があつた程である。左樣な間柄であつたから、隱元が長崎に來てからも、兩者

の往復は頗る頻繁で、現に隱元來朝の翌年、明暦元年の夏は、興福、崇福の兩寺に於て結制した程であり、また明暦三年に、隱元が卽非を招んで來朝させた時にも、まづ第一に崇福寺に居らしめたといふやうな事實がある。斯樣な關係はあつたが、しかし隱元來朝以後の長崎は、すべて隱元一派の勢力が旺盛で、道者の旗色があまり振はなかつたらしい。元來彼は學問の人でなく、詞章を得意とするものではなかつたらしい。獨庵玄光は、「師、書を讀まず、文字に長ぜず、而かも求に應じ、卒然偈を說き、頌を作りて自然古道の顏色あり」というてゐるさうだが、それ等の點も當時においてはその勢力の消長に關係があつたのであらう。それに隱元一派の間には、暗に彼を排斥し時の執政者に對してこれが追放を諷示した形跡もあつたと傳へられてゐる。兎も角左樣な形勢があつたので、道者の周圍に於ては、これに對抗する方法がいろ〳〵講ぜられたらしく、盤珪が金澤の天德院に曹洞の鐵心道印和尙を訪ねて、北國へ迎へる計畫を立てたともいはれてゐる。それから平戸の松浦侯に說いて見たが、これも思ふやうには進展しなかつたらしい。そして遂に萬治元年歸國の船路に着くことになつたのである。

斯樣にして道者の日本に留まることは僅かに八九年の間に過ぎなかつたが、しかし彼の殘した

足跡は相當に大きいものがあるといふてよからう。それはまことに隱元來朝、黃檗創立の前奏曲としてばかりでなく、立派に獨立してもこれを研究する價値がありはせぬかと思はれる。

三

隱元來朝の招請について、「黃檗開山普照國師年譜」には王命であるとしてゐる。卽ち、

未レ幾日本興福住持逸然、奉ニ王命一、差ニ僧古石一、齎ニ書帛一、聘レ師東渡開化。

と記してゐるのである。しかしそれが王命とか官命とかいふやうなものではなく、全く興福寺の住持逸然及び同寺の檀徒によつて計劃された私的招請であつたことはいふまでもない。元來、長崎の唐人寺と稱せられた興福、福濟、崇福寺等は、長崎在留の支那人が、彼等自身の弔葬のために創立したものであるが、しかしその裏面には多少の政治的意義がなかつたといへない。それは德川初代の基督敎嚴禁政策に對して、在留支那人が、自ら基督敎徒でないことを證明するために、佛寺の檀徒になる必要があつたので、さてこそ是等の寺が次ぎ〳〵に建立されたのである。そして彼等はこの寺の住持を、彼等自身の出生地から迎へて、故鄕をなつかしむ情を幾分でも滿足せ

しめた。斯くして唐人寺に唐人僧が住持する慣例が作られたのである。隱元もたま〳〵その一人として渡來を招請されたに過ぎない。

しかし、何というても彼はすでに支那においても一かどの名僧として一方の法將であつたのだ、それに齡も六十を越してゐた。だから容易に日本に渡らうとはしなかつた。逸然が隱元招請の招狀を發したことは前後四回に及んだ。そしてこの四回目の招狀には逸然及び興福寺の檀徒總代の名を署したばかりではなく、時の長崎奉行の名もまた記されてゐたと「長崎市史」には記してゐる。おそらく其處に隱元等が支那において、王命と解釋したであらう理由があつたのではあるまいか。兎も角、左樣な經緯を經て隱元は日本渡來の決意を固めた。そして滯在の時期は三年といふことに話合つてゐたものらしい。なほ隱元が日本に渡る決心の裏には、前年、崇福寺の招請を受けて渡日した弟子の也嬾が、途中風浪に遇うて横死したことを悲しみ、子の債を父が還すといふ心情も深く動いてゐたのだとも傳へられてゐる。

斯くて隱元が長崎に上陸したのは、承應三年七月五日であつた。前にも述べたやうに、すでに道者の禪風によつて非常な衝擊を受けてゐた日本の禪界は、更らにこの支那の有力なる禪師の渡

來によつて、一層深い衝擊を受けたのである。當時日本の禪界に於て最も隆盛であつたのは妙心寺の一派であつた。大德寺派は澤庵歿後、いよ〳〵茶禪の迷路に迷ひ込んで其處から容易に拔け切らず、曹洞宗は山林に瞑目長坐の教風が何時の間にか沈滯長眠に變つた風があつた。そして五山の禪風は、足利以來の文字禪が一層萎縮して行つただけで、其處に新局面を打開するやうな形勢は少しも認められなかつた。その間にあつて兎も角、雲居、愚堂の長老から、賢巖、盤珪等の少壯連に至るまで、眞參實究、世間の信仰を集めてゐるのは妙心寺の一派であつたのである。しかしこの妙心寺の一派にも裏面におけるいろ〳〵の紛糾は免れることが出來なかつた。そしてこの妙心寺内の紛糾こそ、實は隱元の傳法に重大の關係をもつものなのである。

妙心寺派から隱元に歸依して遂に、その門下に入つた有力者は龍溪性潛であつた。彼は妙心寺の住職となつて紫衣を賜はつた禪師で、その頃は諱を宗潛といつたのである。その禪師が、五十年の長い間所屬してゐた宗派を離れて、渡來僧の下に奔つたといふのは、決して單純なる信仰の問題と見ることが出來ない。其處には深い利害の關係がからまつてゐるのだ。一種の權力爭奪戰の結果に外ならないのだ。その點に於ては僧侶の世界も、俗人の世界と少しも相違する處がな

い。現に隱元渡來に伴うて、一種の政權爭奪的爭端を開いたのは、此外にも前に述べた隱元隨徒の一派と道者超元との關係があり、その後において渡來した心越東皐との交渉がある。心越も、黃檗一派の策動によつて、ほとんど日本から追ひかへされる憂き目を見ようとしたのである。

さて、龍溪の妙心寺派における立場である。話は大德派の澤庵、玉室、妙心派の單傳、東源の四僧流謫の寛永時代に遡る。當時幕閣の信任を得て、僧祿の職に在つた金持院の以心崇傳は、大德、妙心に對して極めて皮肉な態度に出でた。卽ちそれは、曩に家康によつて發布された大德、妙心兩寺の法度は、その後兩寺によつて遵奉されてゐぬ疑がある。特にその後における兩山の出世が、悉く幕府を經ずして直に傳奏に附し、紫衣勅許の濫授が行はれてゐるのは如何なる理由に基くのかといふ趣意の詰問狀を發したことである。

これに對して大德、妙心兩派が、一面には法度の條件履行の實現不可能なことを辨疏するとともに、幕府に對する許可申請は、京都所司代まで常に申出でてゐると抗議したのであるが、兎も角斯樣な態度をとるについては、妙心寺においても、大德寺においても、相當に議論があつたのである。そして大德の硬派は澤庵、玉室によつて代表され、妙心は單傳、東源によつて代表され

たのであるが、これ等硬論に對して幕命恭順の軟論がまた一方に主張された。妙心寺派において、これを主張した筆頭は伯蒲和尙であつたらしい。彼は弟子の琢首坐を帶同して遙々江戸に下り、特にこの硬論を主張するものが、妙心當時の行政事務に任じてゐる位頂の單傳、執事の東源であると訴へたといふことだ。その結果、單傳、東源の召喚となり、配流となり、しかして一方には、自今妙心寺一切のことは、伯蒲の裁斷を受くべしといふ幕命が下つたのである。だから伯蒲の一派と、單傳、東源の一派とは、その時からすでに一山內に對抗してゐたものと見てよからう。そしてこの伯蒲は實に龍溪の師であり、當時江戸に隨行した琢首坐こそ龍溪その人であつたのである。

斯樣な關係にあつたのだから、その後崇傳失脚して、德川幕府の宗教政策が一變し、寛永十一年、配流の四僧が許されて京都に還るに至り、特に寛永十八年には、將軍家光の澤庵に對する好意の表示として、大德、妙心の出世問題を元和法度以前に還元することにして以來は、妙心寺內における伯蒲派——伯蒲は江戸から京都へ還る途中で死んだ——の立場が極めて微妙なものになつたであらうことは想像するに難くない。たとひそれが表面に現はれないにしても、一種の暗流

がそれ以來容易に拂拭することが出來なかつたのは自然の勢であつたらうと思はれる。

龍溪は慶安四年、五十歳に達したので妙心寺々格の待遇例によつて勅を奉じて改衣瑞世し、承應三年再び妙心に視篆したのである。そして彼が隱元を知るに至つたについては、次のやうな話が無著道忠の「黄檗外記」に傳へられてゐる。

東叔云、初め京の本屋、書二三十卷を縛(から)め仙壽院に來りて云、是一處に買得たり、一處に御買王はれ、價は其直に任べし、もしよりわけ御取なれば、賣不申と云。禿翁一齊に買之。中有二隱元錄二卷一、讀レ之爲レ奇。その時世間寛やかに仙壽より龍安の浴室に入て浴す。或時浴室にて龍溪に逢て、隱元錄のことを語る。龍溪借て見て大に奇とす。後三年に隱元來朝、龍溪、禿翁大に驚喜して、まづ誰をか長崎へつかはし、樣子をも聞べきと云て、竺印にましたることあらんとて、兩人すゝめて竺印和上を長崎へ下す。程なく廣島の虛櫪和上、因幡の鼎宗、妙心大雄の萬拙等、多人長崎に集會す。

まづこの文中に出て來る禿翁といふのは、當時千壽院の住持で、山内有數の德望家であつた。それから竺印といふのは退藏院千山の法嗣で龍華院の開祖、そして亦無著道忠の師である。彼は

非常な働き手であつたらしく、南都大佛殿修造のため諸國を勸進したこともあり、隱元問題についても最初の間は華々しい活躍を示してゐる。それから虛櫪といふのは禿翁と同門の法兄で、その頃は廣島禪林寺の住持であり、鼎宗は後年龍溪と共に黄檗に改宗した一人、鐵牛の法師である。萬拙また法山宗派圖の作者として知られてゐる。

最初これ等の人々が協力し、中頃は更らに同志が增して隱元を妙心に請待するの運動が捲き起されたのである。しかしそのうちに種々の事情が起り、特に開山三百年遠忌が開かるゝ等の關係があつて、何時の間にやら、同志のものが一人去り、二人去つて、最後まで隱元のために奮鬪したのは龍溪たゞ一人であつた。これには勿論、止むを得ざる經路があるのではあるが、兎も角、龍溪一人だけが飽くまで妙心の大衆に對して對峙したところに深い示唆があるといはねばならぬ。卽ち寛永以來の山内對峙の傳統が、遂に此處に結局したのではないか、と見れば見ることも出來るのである。

四

隱元來朝とともに、まづ第一に長崎に驅け付けたのは虛櫪であつたやうだ。彼は其處から長い手紙を禿翁に寄せてゐる。

後便呈上一封、久不聞德音、無御心元候處、此頃會津境山之子、信、球二禪客到來、其元之樣子具さに承り、可爲堅固由演說、快然之至候。卽今彌可爲同意存候。

一、愚子事、隱元禪師來朝相不圖存至、八月初爰元下着、相見禪師、追付可乞歸京と存じ候處、不慮に隱老に被留、其上爰元奉行衆も、是非共、今少逗留仕候樣に被申候に付、無是非應其意、南京寺に居申候。年內無餘日候條、來春正月中には廣島へ參着候樣に爰元可被立覺悟候。

一、隱元禪師彌堅固、今程日本僧七十人許、大明衆二十人餘有之候、十月十五日より結制正月十五日迄、衆僧坐禪法令嚴然、倭漢交會言語不通、其上日本僧も唐僧も我慢貢高、動事生じ、拙子一人の難義御推量可有之候。併今程は大形しつまり申候條、今の分に候へば無別條解制にて、うんと安堵申候。隱禪師も、日本にて始の結制に候へば、一入氣遣の體に候。就夫日本大衆某甲に御豫け有之候故、何とぞ仕り無事にて候へばと候樣、隨分大衆和合仕候樣にと精を出し候。

一、貴翁の事隱元へ委敷通事に申させ候。龍溪和尙の儀も、得と申候はゞ事の外滿足被成候。

一、來春、爰元へ降下可有由、尤に候。寺中には色々六ケ敷事共候條、寺外程近所にて、別甑可然候。存之外、銀子入申事ども候條其御心得候て小人數可然候。（中略）

一、妙心寺へ、隱元御請待可有之旨、龍溪和尙、貴翁など別けて御取持の由、信首坐雜話にて具に承慮候。誠に以て可然、愚拙なども內々左樣の御事に候。併し大衆同心有之間敷と奉察候。若し一山點頭に候へば、定而公方へ被仰、其上にての事にて可有御坐と存候。玆に一つの有內意、龍溪和尙へも能々被仰談、御尤に候。其故如何となれば自然請待の儀相調候はゞ、隱元も無別條、可有上洛候。

左候はゞ思召の外金銀も澤山に入可申と被存候。先當坐造作も五貫目十貫目にて調間敷と存候、其上其元入院候はゞおびたゞしき金銀入可申候。日本流など御あて候はゞ天地懸隔の事に候條、能々御分別可被成候。一年に四五十貫程づつも用立調候はゞ、せめてにて可有候、其分御心得可有之候。兎角爰元へ御下候而、緩々と樣子御見物の上にて御合點可參候。是は先拙子見及び候通、推量に書付おき候。

一、諸清規の事、信（首座）へ被仰渡候通、拙子も略承候、いか様日本とは相違の事共多候。

一、食物は一日に三度宛に候。早晨、午時、喫粥飯如常、哺又喫粥、夜に入る又菓茶、是毎日の常式なり、其間不時の菓茶あり、六七度食する日も有之、大衆腹便々、是日本と大相違。

一、朝暮勤行の後、大衆詣方丈三拜、是又日本に無之、誠見事作法也。

一、上堂の儀軌大劣於妙心者乎。

一、朝暮勤行の末、大衆南無阿彌陀佛の行道、鐘鼓木魚等の唱物拍子面白候。併日本にては不相應の儀式、毎日針耳者なり。其外色々の作法有之候へ共、然し覺え不申に付不能筆記候。

一、坐禪の儀式はいかにも殊勝に見え申候。總じて能々見申候に外は淨土宗に似、内は禪宗の様に存候、是雲棲の軌範故乎。

一、隱元伴僧にも、さのみ出格の人無之候、西堂獨應と申人發明の仁と承候、其次には書記獨知と申人にて、是は唐土にても好人の内と申候。其外待者良演と申者作爲能く候。又獨湛と申者工夫專一に勤め、隱元も感じられし人なり。其外衆少つゝ才智ありといへど、日本人に無知事、我慢情識無而不好人。

一、本年は隱元傳法の人、一兩輩も可有様に申候。其外、二三十人も同伴可有之と取沙汰申候。先々一往御下候而爰元の様子御覽可有候。尙期後音候。恐惶不宜。

十二月十三日　　虛櫺了廓華押

拜進仙壽院

待司下

これによつて見ると、虛櫺は、七月五日の隱元來朝後一月程の間に長崎に下つたものと見へる。そして十月十五日からの結制には日本側の大衆を預かつて、言語不通の日本人と支那人間に葛藤を起さぬやうに苦心したものらしい。且つこの消息によつて見ると、支那人側の生活は、枯淡な日本の禪僧生活とは大に趣を異にして居り、從つて費用も日本人の想像に及ばぬものがあるから、もし妙心寺に彼等を請待するなら、その點を最も考慮せねばならぬと忠告してゐるのである。この忠告でも容易に推想し得るところであり、また文中所々にも明記されてゐる通り、龍溪、禿翁等は、この頃からすでに隱元招請の意思を持つてゐたのであらう。

當時大阪大仙寺にゐた湛月も亦隱元崇拜の一人であつた。彼は虛櫺に書を贈つて、

復承、黄檗山隱元大禪師、行化時至、得々神遊于我扶桑、宜揚祖風、於戲是何幸哉、當于叢林衰替之秋、適遇祖師之西來者、如冷灰之復燃矣。孰不隨喜焉邪。所以足下賓從於彼法席、偏能扶助道義、實有心圖祖道之興隆者乎。可謂努矣。余又來春隨商船、造謁于隱元老禪之閣下、和尚若未解歸纜、會晤必有日矣。

というてゐる。湛月は長崎に行かなかつたやうであるが、兎も角、斯やうな熱烈な隱元派が、龍溪その他と合流して、遂に一應隱元を龍溪の住持寺である攝津の普門寺に招請することになつた。その招請文をもつて竺印が長崎に下つたのである。「普照國師年譜」にはその時のことを斯う記してゐる。

七月望日兩處解夏、會竺印上座、齎賜紫龍溪大德等書、請師住攝州普門。師曰老僧年邁、遠涉洪濤、以踐長崎之信足矣。那堪又遠應乎。却之至再、既而二鎭主及竺印懇請不已乃許之

このうちの二處の解夏とは興福、崇福兩寺の夏安居結制の終了を意味し、二鎭主とは黑川與兵衞、甲斐庄喜右衞門の兩長崎奉行を指すものであらう。斯樣にして隱元は明暦元年八月九日更らに東上の旅程に上つたのである。

我是支那老比丘、隨緣應化赴東遊、相知惟有江頭月、一夜清光伴客舟

これが船中の作だ。九月五日大阪着、翌六日龍溪等に迎へられて普門に入つた。

未幾、京尹板倉防州大守造謁、謙恭致重、恨相見之晚。尋同寺主等請師、開堂祝國、由是碩德高士聞風而至。

隱元が普門について幾日も經ぬに京都所司代板倉周防守が參謁したのだ。しかも隱元を遇すること極めて鄭重であり、その噂が一般にひろまつて京阪の碩德高士がみな集まつて來たといふのだ。斯樣にして翌明暦二年の春は、隱元にとつて最も有力な外護者となつた江戸の閣老酒井空印侯に偈を贈つてゐる。しかも彼の故國に對する思慕はこの頃になつて漸く深くなつて來た。

一日坐西來亭、有懷西詠、尚未脫穎、忽報無上侍者、齎黄檗暨諸宰官書、迎師回山、踐三年之約。

斯やうに無上侍者が支那から三年の約を果たしたのだから早速歸國するやうにと要望した信書を持參して來たので、隱元も「聊萌片念家音至、始信天涯在一倪」といふ句が生れる程、歸

國の念を湧かしたのだが、しかし、

會下寺主從二江府一回、懇留再四ㇾ姑許之。

と龍溪の請を聞いて、なほ普門に留まることにした。そしてその冬禿翁、竺印に招請されて、京都に遊び禿翁の仙壽、竺印の龍華兩院を訪うたのである。その際、妙心、南禪、東福等の諸禪刹にも參拜した。

五

隱元請待の問題が、妙心寺に於て白熱したのはおそらくその頃ではないだらうか。妙心寺史によると、請待論の一派に對して最も手痛く反對したのは愚堂であつたというてゐる。愚堂の論法は、元來妙心は一流相承の地だ。だからその法系を嗣ぐものは他山に住せざるは勿論のことであるが、それと同時に他流他山の法系をも迎へざるのが、正統錄のあるゆゑんだといふのであつた。この論が遂に妙心大衆の主流を支配したのである。

愚堂は晩年を山科の華山寺で送つた。其處にある日、その頃頻りに隱元の左右に參じてゐた弟

子の大春元貞がやつて來たのである。

隱元來朝あり、天下の人皆奔り向ふ。而して我、渠に至らず、普門の一衆我を何とかいふ

と問ふたら大春は、

或は譏り、或は高しとす

と答へた。其處で愚堂は從容として、

元來隱元は禮法を知らざるもの、老僧は是れ日本禪林の大老、渠、日本に來らば、まづ我に謁し、然る後分に從ひ、度生に就くも亦遲しとせず、我若し支那に行かば如此くせん。龍溪の輩、何ぞ老成の量あらんや。徒らに他の屋裡に向つて顚倒狼狽する底の可憐生のみ

と豪語したと傳へられてゐる。

斯樣にして一方には、隱元の名聲が日に隆盛になつて行き、宮廷の御信任さへ深くなつて來るといふ狀態であり、一方には山內の主流が隱元請待に全く反對の態度をとるといふことに決定したのであるから、その間に立つて隱元を支持して來た妙心派の諸禪僧は、いづれも何とかその態度を決定すべき破目に押しこまれた。竺印はそのうちに龍溪等と意見を異にするやうになつて、

何時の間にかその一派から遠かることになつた。禿翁、湛月その他も亦、開山三百年遠忌の準備その他のために隱元の側を離れて行つた。そして最後に踏み止まつたのは龍溪である。彼の隱元支持は彼の信仰でもあつたらうが、一面から見ればまた彼の事業でもあつたのである。そしてこの事業の遂行に、彼が如何に努力し奮鬪したかは、故鷲尾順敬博士が「黄檗派の開立と龍溪」と題する一篇に、極めて精到なる研究を發表してゐる。まことに當時龍溪が居なかつたならば、日本の黄檗宗といふものは果して創立されてゐたか否か、頗る疑問であるといはねばならぬ。しかしその黄檗開宗に關するそれ等の經緯は、前記鷲尾博士の研究に讓り、此處には單に、隱元が竺印、禿翁の招請を受けて京都に出た翌々年、即ち萬治元年に龍溪と禿翁に伴はれ江戸に行化して將軍に謁したこと、その結果幕府上下の信仰を一層增して、翌二年、京都の近郊に開山すべき許を得、地を宇治の大和山上に選んだこと、そして其處に黄檗山萬福寺が翌々寛文五年五月に至つて開創されたことだけを記して置くに止める。

盤珪和尚傳

盤珪永琢は少くとも德川時代二百五十年の禪宗史を通じて、一種特殊の存在であるといはねばならない。彼は普通の禪僧のやうな修業、いはゆる古則公案によつて省悟に入つたものではない。古來禪宗に傳統してゐる普通の修業方法を無視して、直ちに彼獨自の疑惑と、その疑惑に對する解決方法とによつて、一種特殊の境地に新天地を打解したのである。だからその傳道の方法も自ら他と大に面目を異にしたのである。

彼はその經歷を斯樣に語つてゐる。

身どもが親はもと四國浪人で御ざつて、しかも儒者でござつたが、此所に住居致して身どもをうみましたが、父には幼少ではなれまして、母が養育でそだちましたが、あんばくものにてそこら内の惣ての子供の大將をして、わるひ事仕て御ざつたと、母が咄しました。されども二三歲の時よりも、死ぬるといふ事が嫌ひで御ざつたと申されたが、それゆへ泣ば、人の死んだ時

のまねをして見するか、人の死んだ事をいふて聞すればなきやみ、わるき事を仕止ましたと申す。漸成人いたして幼年の頃爰元には儒がいかふはやりまして、身共も師匠どりをして、母が大學の素讀をならはせ、大學を讀まするとき、大學の道は明德を明かにするにありといふ所にいたり、この明德がすみませひで、疑しく御ざつて、久敷此明德を疑ひまして、或とき儒者衆に問ましたは、此明德といふ物は、いかやうな物ぞ、どのやうなが明德ぞといふて、問まして御ざれば、どの儒者もしりませひで、ある儒者のいひまするは、其やうなむつかしき事は、よく禪僧が知て居る物じや程に、禪僧へ行ておとやれ、我々は我家の書て日夜朝暮口では文字の道理を說てよくいへども、實は我らは明德といふものは、どのやうなが明德といふ物やら、しりませぬといひまして、埒が明ませなんだゆへに、さらばと存じたれども、此許に禪宗は其頃御ざらずして、聞ふやうもなくて、其とき存たるは、どうがなして此明德の埒を明て、年寄ました母にもしらせまして、死なせたい事かなと存して、いろ〳〵とあがき廻りて、明德の埒が明ふかと思ひまして、爰の談議かしこの講釋、或はどこに說法があると聞ば、其まゝ走り行て聞まして、尊ひ事を戻りて、母にいふて聞せ〳〵すれども、彼明德は埒が明ませぬによ

つて、それから思ひよつて、さる禪家の和尙へ參じて明德の事を問ましたれば、明德がしりたくば座禪をせよ、明德がしるゝ程にと仰られましたによつて、それからして、直に座禪にとりかゝりましてあそこな山へ入ては七日も物をもたべず、爰な岩ほへ入ては、直にとがつた岩の上にきる物を引まくつて、直に座をくむが最後、命をうしなふ事をもかへり見ず、じねんとこけて落つまで、座をたゝずに、食物はたれが持て來てくれうやうも御ざらねば、幾日も〳〵せざる事が、まゝ多く御ざつた。（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書上）

即ち彼は別に明師に就いた譯でもなく、これをさがし廻つた譯でもないやうだ。「たゞ大學の道は明德を明にするに在り」の章を讀んで、明德とは何ぞやの疑惑を起し、その疑惑を解決することのために苦難の途を驀進したのである。

それよりして古鄕へ歸りまして、庵室を結びまして、安居して、或は臥さずに、念佛三昧にして居ました事もござつて、いろ〳〵とあがき廻つて見ましても、彼明德はそれでも、埒が明ませなんだ。あまりに身命をおしみませず、五體をこつかにくだきましたほどに、居しきが破れまして座するにいかふ難儀致したが、其頃は上根にござつて、一日も横寢などは致さなんだ。

然れども、居敷が破れていたむゆへ、小杉原を一狀づつ取かへて鋪て座しました。其ごとくにして坐しませねば、中々居敷より血が出いたみまして、座しにくふ御ざつて、綿などをしく事もどざつたわひの、それ程に御ざれども、一日一夜も終に脇を席に休ませなんだわひの。其數年のつかれが、後に一度に發りて、大病者に成まして、彼明德はすみませず、久しう明德にかかつて、骨をおりましたわひの。それから病氣がだん〳〵次第におもつて、身が弱りまして、後には痰を吐ますれば、おやゆびのかしら程なる血の痰がかたまつて、ころり〳〵とまん丸に成て出ましたが、或とき痰を壁にふきかけて見ましたれば、ころり〳〵とこけて落る程に、御ざつたわひの。此とき庵居で養生せよとみな申によつて、庵居しまして、僕一人つかふて煩ひ居ましたが、さん〴〵病氣が指つまりて、ひつしりと七日程も、食物が留り、おもゆより外は通りませいで、それゆへもはや死ぬる覺悟をして思ひましたは、はれやれ是非もなき事じやが、別而殘多事も外にはなけれども、唯平生の願望が成就せずして、死ぬる事かなとばかり思ひ居ました。おりふしにひよつと一切事は、不生でととなふ物を、今まで得しらひで、扨々むだ骨を折た事かなと思ひ付いて、漸〳〵と從前の非をしりて御ざるわひの。又それから氣色が

はつきりとして、よろこばしう成て、食きげんが出來、僕をよびまして、粥をくはふ程にこしらへよと申たれば、今まで死かゝつて居た人の、不思議な事をいはるゝと、僕もおもひながら、悅びまして其まゝいそぎふためいて、粥をこしらへ、少しなりともはやく喰せうとおもひまづ粥をくはせましたが、まだろくにも煮へませぬ、ほちつく粥をくはせましたが、かまはず二三椀たべて御ざれども、あたりも致さず、それより段々快氣いたし、今日まで存命居まする事で御ざるわいの。終には願成就いたして、母にもよくわきまへさせ、死なせましたわひの。

（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書上）

即ち臂が破れて血が出るやうな座禪もやり、その結果血痰がころ〳〵出る程に至り、生命も且夕に迫るといふ狀態になつたのであるが、その際ふと不生で一切事が解決されると思ひ付いたのだ。それは廿六歳の時であるといふ。勿論この間盤珪は全く師匠なしでゐたといふ譯ではない。十七歳の時に赤穗隨鷗寺に雲甫和尙といふ禪僧の下に參じて剃度してゐる。それでこの時もまづこの雲甫の處へ行つて、その所解を述べたのである。雲甫は「汝徹せり」というたが、しかしその所見を述べて天下の尊宿に質して見たがよからうともすゝめたのである。盤珪が愚堂を美濃に

たづねたのはその折の話だ。

しかし愚堂は江戸に行つて居たので會へなかつた。よつてその邊に著名な二三の人に遇つて見たが意に充たなかつた。それで自ら日立郷といふところに盧を結んで玉龍庵と名づけ暫らく其處に留まつたが、やがて故郷に歸り、そのうち道者超元が長崎に來たことを聞いて、はる〳〵長崎へ下つた。

盤珪は前に引用した不生の理を悟つた時の思ひ出咄しについで、すぐ斯樣にいうてゐる。

それより以來、天下に身どもが三寸の舌頭にかゝるものがござらなんだわひの、其前身どもがあがき廻つた時分に知つた人が御座つて、いふて聞かせたらば、むだ骨をおりますまひが、しつた人がなかつて、いふてくれてがなさに、久しう骨を折つて、身命をこつかにくだきましたゆへに、今に至るまで病者に御ざつて、思ふやうに皆の衆へ十ぶんに出て得逢ませぬわひの。

（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書上）

斯樣な苦い經驗を踏んで來たので、彼は後に來る者のために、出來るだけの事をしようと思うてゐた。特に彼が明德とは何ぞやの疑惑解決そのものにあがいたのも、彼一身の疑惑を解決する

だけの心願ではなかつたのである。即ち「年寄ました母にもしらせまして、死なせたひ事かなと存じて、いろ〳〵あがき廻」つた次第であつた。そのやうな事情があるのであるから、盤珪省悟の動機そのものからいうても、必ずしもそれは彼一身のためではなく、むしろ他人のためにするといふ精神が深く含まれてゐたといはねばならない。即ちある一派のやうな唯我獨尊的態度ではなく、衆生濟度といふことが大袈裟であるとすれば、少くとも他人を化度するといふ氣持ちが非常に濃く動いてゐたというてよい。現に美濃の玉龍庵から故郷に歸つて安居した際においても、「安居閉關をして、時の人の機を關じ、化度の手立をはかつて居まする內に」というてゐる程であつて、彼はその頃から、自己の苦い經驗を、後の人々に繰り返さすことを成るべく阻止しようと思うて居たやうだ。其處に彼の易行安心、在家安心の教理が組織立てられるに至つた理由があるのではないかと思ふ。

慶安四年、一旦長崎から歸り、更らに明暦元年、再び道者を訪うたまでの間に、彼は吉野に山居し、また岡山の三友寺に於て陽明學を奉じた一派の儒者と對論する等のことがあつたのであるが、その吉野山居の前に京都五條橋下に於て乞食の群に入り捨身の修業をしたと傳へられる。そ

して再度の道者の訪問から歸つた後に於ても、今度は江戸に出て淺草駒形堂下に於て再び乞食の群に入つてゐたといふのである。その間に、兼ねて彼を尊崇してゐた肥前平戸の藩主松浦鎭信の發見するところとなり、その邸内の向東庵に招請せられて其處にゐるうち、伊豫大州の城主加藤泰興と相識るに至り、その崇拜をも受くるに至つた。かくて泰興が彼を大州に招請して遍照庵を建立したのは明暦三年の春、即ち盤珪三十六の年であり、播州網干に海晏寺——龍門寺の前身——が創設されたのは、その二年後萬治二年の春であつた。これから四十年に近い彼の傳法生活に入るのである。

然らば彼の教ゆる處、いはゆる不生の理とはどんな内容のものであるか。

拙僧が何れもへ申聞せまする說法は、別の事でも御座らぬ、不生の斷で御ざる。人々佛心そなはりて御ざれども、それを御存知なき所を、拙僧が申聞せまするで御ざる。されば佛心有とはいかやうなる事ぞと申に、此御屋鋪の面々、拙僧が申事を聞しめされんとおぼしめして、何れも御宿より覺悟なされ御越あつて、說ほう聽聞の内に、此等の外にて犬が鳴ますれば犬の聲と聞しり、からすが鳴ば、烏の聲としり、大人の聲を大人としり、子供の聲をば子供としりたまふ。これは是何れも宿々より、此寺へ參詣せんとおぼしめすとき、それがしが法談いたす中に、餘所になく犬の聲からすの聲、大小の人のものいふ事あれば、聞んと覺悟なされて御出なけれども、此會座におゐて、餘所になく犬からす、人のものいふ事を、耳に聞、目に赤白の色を見わけて、鼻には善惡の香をかゞしやる。前廉より覺悟なくては、いかでか物の聲も、色香をも、此會座にてしらつしやろうやうはなけれども、其覺悟なき事を、見しり聞しり致す所が、面々にそなわりたる不生の氣と申ものでゐざる。假令ば何れものきかつしやる犬の聲を、千萬人が今のはからすの聲で有たと申とも、合點なされふや、中々人には云まどはされまい。是が靈明なる不生の佛心で御ざる。見ようの、聞ふのと、まへ方より覺悟なく、見たり聞たりいたすが、不生で御ざる。見よう聞ふと存る、氣の生じませぬが、是不生で御ざる。不生なれば不滅で御ざる。不滅とはめつせぬで御ざるなれば、生ぜざる物、滅すべきやうは御ざらぬ。爰が面々の佛心そなはりたり所で御ざる。されば佛菩薩の世より今の人界に至るまで、佛心と申ものは、不生不滅で御ざるによつて、面々の名に、此佛心そなはりて有ではござらぬか。其佛心有事を御存じなきにより、何れもが迷はつしやるで御ざるぞ。迷ふといふは、いか樣なる事で

御ざるぞなれば、我身にひいきの御ざるによつて、迷ひまする。我身にひいき御ざるとは、いかやう成事なれば、まづ何れもの隣の人、我事をそしりたるといふ事を聞ては、それを嗔り、其人を見ては悪み、聞えぬとおもひ、其人のものいふ事をも、あしく聞なしなどいたす事は、是我身にひいきの有ゆへで御ざる。かくのごとく嗔り腹立ますれば、我にそなはりたる佛心を、修羅道の罪にかへまするで御ざらぬか。又となりの人が我をほめるか、悦はしき事を我に申聞まするときは、いまだ譽らるゝ事も見へず、悦ばしき事もふり來らざるときに、はや悦びまするでは御ざらぬか。此悦びは何事なれば、我身にひいきの有ゆへで御ざる。此身の本をかへり見るに、出生したるときに、嬉し、悪し、つらしと、思ふ念をおやのうみ付てあたへたるには、更に御ざらぬ。是は出生の後、智恵が生じました物で御ざる。如件にくしと思へば、修羅道へ、此佛心が替り、人の物がほしゝと思へば、我らにそなはりたる佛心、餓鬼道と替りまする、是を流轉と申まする。右のおもむきを何れもとつくりと合點さつしやれて、嗔り腹立もなく、ほしやにくやの念をもおこさず、つらしかはゆしの心もなければ、是則不生の佛心で御ざる。（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書下）

盤珪は斯様に不生の佛心を説いてゐるが、更らに一時の妄念と不生佛心との關係については、次のやうに説いてゐるのである。

一　此間何れも聽聞の通り、面々生れ付たる佛心で御ざるに世間のならはしで、あしき世渡りをならひましたによつて、おしや、かはひやの餓鬼道に、佛心をかへまして御ざる。爰をとつくりと御了簡あれば、不生の身になりまする。併し不生に成たいと思し召して、嗔り腹立や、惜しや、貧やのおこるを、止とおもはしやつても、それを留ますれば、一心か二つに成ます。走る者を追がごとくで御ざる。おこる念を止とたしなみましたぶんでは、永代おこる念と止と存る念が、たゝかひまして、止ぬ物で御ざる。たとひふと思はずしらずに、嗔る事御ざるとも、又おしや貧やの念が、出來ませうと、それは出次第にいたし、其念を重ねてそだてず、執着致さず、おこる念を止とも、やめまいとも、其念にかゝわらざれば、おのずから、止ひでは叶ひませぬ。たとへ色々の念がおこりまするとも、其おこり出ました當座ばかりにて、重ねて其念にかゝわらず、うれしきにも永く念をかけず、一心を二心に致さぬがよふ御ざる。常に心持をかやうに思はつしやれば、あしき事をも、よき事をも、思ふまひの、やめふのと、思はつしやら

ねば、おのづから、止ひでは叶はぬ。嗔りといふも、嬉しいといふも、是みな我より生じましたれば、其心が滅せいでは叫はぬ。とにかく常に不心の心を心掛させられい。第一で御ざる。是にゆだん御ざらねば、善悪におこる念も御ざらず、もつともやめふと存ぜず。然るときは生ぜず滅せずて御ざらぬか。爰が不生不滅の佛心と申物で御ざる。（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書下）

だから彼は、その會下に對しても、窮屈なる規矩を設けることはせぬというてゐる。

身どもが所には、不斷不生の佛心でばかり居よとすゝめて、別に規矩といふて外に立て、勤めさせは致さねども、毎日線香十二炷づつは、みなのものが談合して、勤めうと申程に、いかやうともいたせといふ事で御ざるわいの。十二炷づつ定て置てつとめさする事で御ざるわひの。併不生の佛心は線香の上にありはしませぬぞひの、佛心で居て迷はねば外に悟りも求めず、只佛心で座し、只佛心で居、只佛心で寢、只佛心で起、只佛心で住して居るぶんで、平生行住坐臥、活佛ではたらき居て、別の子細はござらぬわひの。座禪は佛心の安坐が、坐禪じや所で、常が座禪で御ざるによつて、勤める時ばかりを座禪とも申さぬわひの。座の時でも、用事があれば立てもかまひは御ざらぬ程に身どもが會下では、皆の衆の心次第にいたす事じや程に、一炷

は經行をし、又立てばかりも居られぬものじや程に、一炷は座して、つとめて居るやうにさしやれば、寢てばかり居やう筈もなきゆへ起もし、咄してばかり居やう筈もなきゆへに、つとめも致させますれど、規矩にもかゝはりはしませぬ。惣じて近代の智識は、道具をもつて人を接して道具でなければ、埒は明ぬやうに思ひて、道具なしに直路にさし付て、しめす事をしませぬわひの。道具でなければ、叶はぬやうにして、道具で人を接するは、膽漢の禪子といふもので御ざるわひの。或は又此道にすゝむに、大疑團を起して、其疑團が破れねばやくにたゝぬ程に、先どうで有ふとまゝよ、疑團を起せといゝて、不生の佛心で居よとはおしへずして、疑團のなきものに、疑團を擔はせて、佛心を疑團にしかへさせますわひの。誤りな事で御ざるわひの（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書上）

かくの如き見解をもつてゐた盤珪は、その當時における禪宗の傳統的修業方法であつた古則公案の商量に對しては極めて冷淡の態度を示した。例へば下のやうな實例がある。

僧問て曰、それがしは久しく百丈野狐の話の提撕いたし、骨を折ますれども、いまだ會得いたしませぬが、是は唯工夫の純一ならぬゆへかと存じまする。ねがはくば禪師開示し玉へといふ。

禪師の曰、身どもが所で其やうな、古ほうぐのせんぎはいたさぬ。そなたはいまだ不生にして、靈明なる御心じやといふ事をしらぬ程に、いふて聞しませう。それで埒の明く事じや程に、身どもがいふをとつくりと、能きかしやれいと當のごとく不生の示しをしたまふなり。

又かたわらなる僧問て曰、然らば古人の古則話頭はやくにもたゝず、いらぬ物で御ざりまするかといふ。

禪師の曰、古德の一挨一拶は當機覿面に卽問をふさいだ分の事で、別に用事なし。身どもが口からいるものとも、いらぬものとも、役に立ものともたゝぬ物ともいはふやうはおじやらぬ。人々只不生の佛心で居れば、それですむ程に、相すむ事に、又脇かせぎをしやうやうは御ざらぬわひの（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書上）

斯樣に盤珪は、古來の禪修業の實體に對して遠慮會釋のない改革意見を持つてゐたのであるが、更らにその商量の方法に對しても、まことに適切確實な實際的改革を加へたのである。それを彼は斯ういふ風に表明してゐる。

身どもも若ひ時分には、ひたと問答商量をしても見ましたが、しかしながら日本人に似合たやうに、平話で道を問がよふ御ざる。日本人は漢語につたなふ御ざつて、漢語の問答では、思ふやうに道が問つくされぬ者で御ざる。平話で問ばどのやうにも問れぬといふ事は御ざらぬ。すれば問にくひ漢語で、精はつて問まはらふより、問やすひ辭で精はらず、自由に問たがよふ御坐る。それも又漢語で問ねば、道成就せぬと云ば、漢語で問がよふ御ざれども、日本の平話で、結句よふ自由に問れて相すむに、問にくひ語で問ふは、下手な事で御ざる。した程に皆そふ心得て、いかやうな事で御ざらうとままよ、遠慮せず、自由な平話で問ふて、埒明さつしやれい。埒さへ明ば心やすひ平話程、重寶な事で御坐らぬか（盤珪佛智弘濟禪師御示聞書下）

× ×

盤珪の不生禪は從來の繁瑣なる古則公案禪に對する革命であり、それは一種の簡易禪、易行禪であつて、著しく世間的、實際的色彩を帶びたものといつてよい。これは前にもいうた通り、盤珪の目的が單に自己一人の悟省のみを目ざさず、年寄つた母に安心させることが、一半の主要な目標であつた點にも深い關係をもつであらうと思はれるのであるが、それとともに、繁瑣な規矩、難解な理論を超脫して、直截簡明な實踐的原理を求めた時代の要望によつて生じた自然の結

果であつたともいふべきではあるまいか。

例へば當時、幕府の御用儒學として一代を風靡した林家一派の朱子學に對し、直截簡明の良知說を高調した陽明學が、中江藤樹によつて初めて唱導されたのも、盤珪の不生の理を發見したと、あまり年代を異にせぬ時代であつたのである。即ち藤樹は慶安元年に物故したが、この藤樹の沒年は盤珪が不生の理を發見した正保四年の翌年に當るのである。そして藤樹が陽明學を知るに至つたのは、その晩年の十年前後に過ぎなかつたと傳へられる。だから藤樹學の影響が盤珪に及んでゐたとは思はれぬが、しかし、藤樹の學說がその後間もなく非常な勢で世間に擴がるに至つた思潮的傾向、即ち世間の要望といふものは、盤珪の思想にも、黙默のうちに作用してゐたであらうことは容易に想像出來る。

斯樣にして彼は特別の師匠にもつかず、特別な學問的修養を積んだといふ譯でもなく、恰も王陽明が僻陬の地に於て、參考すべき書籍もなく、沈潛默想の結果、當時の繁瑣な朱子學に反抗して良知に對する新解釋を發見したと同じやうに、長い沈潛の後、傳統の禪解釋とはまるで別物で極めて明快にして極めて實際的な不生の理を發見したのであらう。そしてこの不生の哲理に對す

る信念は一生の間少しも變ぜず、四十年に亙る長い化生の生活を通じて、幾萬といふ人を導いたのである。

彼の名聲が漸く昂るにつれて、隨從するものも日に〳〵增し、遂に海晏寺ではそれを收容し切れぬやうになつたので、彼の外護者の一人京極高豐が土地を寄附して、新に龍門寺を建立した。それは寛文元年、彼が四十歲の春である。次で四年には京都の山科に地藏寺を再興し、同九年には伊豫の大州に如法寺が創建せられた。江戸の光林寺の開山は延寶六年、平戸の普門寺は貞享二年であつた。その他彼によつて草創もしくは再興された寺院四十餘、開山とした者百有餘といふのであるから、彼の德化、彼の名聲の一世に振うたことは推して知るべきであらう。元祿六年九月龍門に於て寂を示した。閱世七十二。

門下には大梁祖敎、節外祖貞、潛嶽祖龍、逸山祖仁等が最も傑出してゐたやうである。しかし大敎、潛龍の二人は盤珪よりも前に死んで、直接彼の後を嗣いで最も敎化に力を盡したのは、節外であり、節外沒後、更にその後をついだのが逸山である。この二人は、それ〴〵その時代における名僧として尊敬せられた。

曹洞の學僧卍山の廣錄第二十卷には左のやうな文字がある。以て如何に彼が他派の人々の間にも推重されてゐたかゞ窺はれる。

龍門盤珪禪師

身心雙空、道非二物外一、邪正頓辨、鑒在二機前一、生不生、始無レ迷、終無レ悟、滅不滅、下拄レ地、上拄レ天、涅槃後有二大人相一、萬仞龍門鎖二翠烟一。

山科地藏寺主幢公捧二佛智弘濟禪師珪公道影一來、乞レ著二一語一。因記師有二竹林偶成一云庵中獨彈沒弦琴、聽得何人到二竹林一、調古格高我家曲、普天匝地少二知音一。謹次二原韻一以充二贊語一。

臨レ行拋擲一張琴、唯剩二淸風一在二竹林一、洗二却今時雙耳朶一、枝々葉々轉二雷音一。

賢巖と古月

私は山庵老拙賢巖圖併贊と落款してある蓮華渡洋の觀音一軸を所持してゐる。極めて薄い彩色の、蓮華一片を船としてそれに乘つてゐる立身の觀世音菩薩像である。讃は、「一葉蓮舟浮願海、尋聲救苦大慈悲、百千萬劫無窮己、薄福衆生惣不知」といふのだ。元來賢巖は頗る器用な人であつたらしい。傳によると、

緒餘通二衆技一、嘗雕二自像一、精巧逼レ眞、躍如欲レ動。又手二刻彩二畫補陀大士像一、或書二寶號一、頗二與諸緇素一者、不レ知二其幾千萬一也。

というてゐるから、彼の墨蹟は相當多くあるべき筈と思はれる。兎もあれ彼の畫技は、線も美しく、相貌も整うて居り、普通のいはゆる禪僧物とは聊か赴を異にしてゐるやうである。心外無一物、端的に主觀を吐露して縱橫に初祖大師の頂相を塗抹する鵠林一派の餘技とは自ら異り、法理を究明し文字禪を唱導した一派の源流となつた程あつて、その筆端も自ら嚴格適法のものがある

やうに思はれる。

×

賢巖は豐後臼杵の人だ。元和四年生れ、姓は土屋氏、父は道竹といつて當時の名醫延壽院道三に學び、その門下に於て一二の高足といはれたものだとのことである。寛永十一年、十七歳の秋、多福寺の雪窓和尚によつて出家した。雪窓は當時の名僧であつた。彼は雲居の影響を深く受けて念佛禪を鼓吹し禪林にも慈悲の一門を開き易行安心を擧揚せんとしたので、一時妙心一派の問題を惹起したことがあるさうだ。彼はまた一絲和尚の推擧によつて仙洞御所に參じ、碧巖錄を進講したこともある。その頃、一絲からの消息に左のやうなものがある。

答二雪窓座元一

慈辱二惠敦一、盥沐披讀靡レ勝二欣幸之至一。昨者始荷二寵臨一、傾レ心倒レ情、幾乎超二越十年舊知一、殊愜二素聞一、益傾二景慕一、且所レ被二錄示一碧巖集數則、深領二盛意一、宜レ達二叡聰一。擧唱之日限、當二再報去一、（下略）

彼は正保三年妙心に入寺したが、その翌年長崎に行き興福寺――後に隱元の滯留した寺――に

於て廿一日間開法結談した、それは吉利支丹門徒を改宗せしむる爲めであつたのである。これが非常の效果を示したので、奉行井上築後守は、早速これを江戸幕府に報告し、彼のために佛寺建立を計劃したのであるが、それが實現するに至らぬ間に、慶安二年三月、六十一歳をもつて示寂した。後年、賢巖が自ら雪窓の頂相を畫いて、愚堂の讃を乞ふたところ、愚堂はそれに對して、

憐二後學不レ達二本性一、愍二初機無レ出二常情一、開二方便門一、有レ志二建二立宗旨一、應二慈悲境一不レ倦二引二接衆盲一、

といひ、更らに、

有時登二禪狀一、講二慧能壇經一、禪者未レ信、有時入二律寺一、談二慧照語錄一、律師乍驚。但事二無事一、要平二不平一、氣呑二佛祖一、不レ妨二欺胡謾レ漢、化行二當世一、豈忘二利物度生、領二世尊拈華之旨一。

というてゐる。即ち雪窓は禪僧に向つて戒律を說き、律寺に於て禪を談じ、放談縱橫、まことに端倪すべからざるものがあつたのであらう。

雪窓示寂の際、賢巖は多福に居なかつた。その頃彼は四方に參學して、天下の名師を訪ね廻つてゐたのである。中にも愚堂には痛く鉗鎚を加へられたといふことだ。その間に雪窓が長逝した

のであるが、臨終に際して領主稲葉侯が、「誰れか是れ和尚に嗣承する者ぞ」と多福の後繼者を尋ねた。ところが、窓曰く「嗣者あること無し。」侯曰く「悅首座は如何」卽ち賢巖はどうだというた。窓曰く「彼れ、文字の學あるは山僧之を聞く、見性の事に至つては、未た之を聞かず。」斯やうな次第で、雪窓は賢巖の學識は認めたが、契悟の點についてはなほ疑惑を抱いたまゝこの世を去つたのである。

賢巖は師の凶報に接して晝夜兼行、京洛の地から豐後に馳せ歸つた。同門の人々が、彼にすゝめて「公は因より雪窓の子たり、嗣香を眞前に拈ずれば亦た可ならずや」というてくれたが、しかし彼は頭を揮つた。「若し然らば自ら欺く也。子にあらずして子、子にして子にあらず。」彼は實に雪窓の印可を受けなかつたことを痛恨した。しかしその翌三年の年頭、

歲旦祝聖、當ㇾ進二佛前一、見㆑縷香灰燼片々墜㆓爐外㆒、豁然省悟

といふから、まさに多福の佛前、雪窓の靈牌が嚴然監視してゐる前で、縷香の灰燼片々、爐外に落ちるを見た刹那、忽ち人我の境を離れて一切を截斷し、過去と現在を全然切離した新なる心眼が胸中に開かれたのである。それは賢巖卅二歲の時であつた。

それから彼は再び諸老宿歷參の旅に出たのである。そして最後に伊豫の正眼寺に節巖道圓和尚を訪ねて、其處で印訣を稟けた。かくて彼が多福に歸つて其處に視篆したのが三十六の年。それからあるひは參徒に對して經を講じ、あるひは江湖に出遊して名師を訪ね、ひたすら眞參實窮の功を積んだのである。道者超元に參謁したのも、隱元、木庵等に面識したのも此間のことであつた。特に木庵に對しては、

如意當頭機智圓、謁來親結二勝因緣一、吾朝勿レ道無二智識一、山色溪聲長說レ禪

といふ偈を贈つて、矜恃の一端を披瀝してゐる。彼は再三妙心に入ることを勸められたが、何時もこれを峻拒した。しかし開山三百年遠忌や、その他、諸方遍歷の順路等に妙心寺に登山したことはしば〳〵あつたやうだ。これもさういふ際の話であらう。後年、妙心派隨一の學僧と稱せられるに至つた無著道忠が、幼年時代には祖忠といふ名で竺印に隨侍してゐた。賢巖が山內の德雲院に寓してゐたある日のこと、この少年僧がたま〳〵その傍に侍してゐた。その日賢巖はまことに氣嫌がよかつたものと見え、

祖忠、祖はこれ鼠、忠はこれ鼠聲

と戯れた。すると無著は言下に、

賢はこれ犬、巖はこれ犬聲

と應じたので、賢巖も大に笑うて、この少年僧の將來を祝福したといふ。彼には斯樣な性格の一面もあつたと見へる。

延寶九年、六十四歳で、彼は多福を嗣法の上足、大機祖全に讓り、自らは臼城城南の鎭南山頂に山庵を築いて其處に退隱した。多福に住持すること實に三十三年であつた。この山庵の地は「城を距ること里許、巖ありて危絶、以て禪すべき」の地であつたから、賢巖は兼ねてから其處に宴坐して還るを忘るゝことがしば〳〵であつたのだ。偈がある。

曾闢南山地、于レ今三十年、叢筠親自種、喬木亦依然、覓雜ニ誦經聲一、雲連ニ烹茶烟一、何趁利名意、活計任ニ因緣一。

卽ち田を開いて耕種し、日用安閑、放曠自在の三昧境に遊んだのである。四方、これを傳聞して羨欣しないものがなかつた。黃檗の南源は書を寄せて、

忠國師之黨子谷、藥山儼之牛欄、風穴之單丁、潙山之隻影、皆巖居野處、不レ求ニ名聞一、是與ニ

和尙一同道、眞活三昧者歟

というて、その巖居野處を羨み、高泉はまた、

聲名灌レ耳雷霆響、踪跡相違雲水重、三十年來難ニ一面一、知君眞是釋中龍

といふ偈を贈つて、三十年來、聲名を聞きながら相會する機會なきことを遺憾としてゐる。

元祿九年の秋、彼はすでに七十九の頽齡に達した。そして聊か不豫を示したのである。領守恩知侯を初め彼の提撕を受けたものは每日この山庵に來り訪うた。多福の大機が來た日には、

夫主法們、須レ看ニ古人體裁如何一。方今末世、識レ羞者幾希、靜言思レ之、不レ覺涕洒滂沱也。一生敗闕、到レ此露矣。

と指示したが、その翌日には月桂和尙と領守自ら疾を尋ねた。そしてその翌十六日の夜半、庵中寂として聲なきうちに、小師等が遺偈を乞ふたら、「要レ聽ニ末梢句一、看ニ老僧平生」というたのみで、端然坐脫した。

賢巖が自肖に題したうちに、

受ニ業佛智禪一、嗣ニ法節巖圓一、大不レ肖ニ二大老一、滅ニ却心印單傳一、具ニ痴瞋悲貪一、欲ニ癡坐飽食

倒眠、是此人間弃物、今年七十二年。

といふ一偈がある。佛智禪といふのは、佛智丕照禪師卽ち雪窓禪を意味するもので、雪窓の統を受け、節巖の法を嗣いで、しかも大に、この二大長老に似てゐないと自ら謙遜したものであらう。しかしこれは單なる謙遜であらうか。雪窓の禪法は、雲居の念佛禪の影響を深くうけて、それに一絲の持戒禪を加味したものであるといはれる。卽ち世俗大衆に對しては慈悲易行の一門を啓くとともに、一身上には嚴格なる持戒主義をとらうとするのが、雪窓の大體の傾向であつたかのやうに察せられるのである。節巖の見解が如何なるものであつたか、それを明瞭にすることは出來ないが、兎も角この二人の見解を賢巖がその儘踏襲したかどうか、特にまだ三十前後の頃から「文字の學は山僧之を聞く」と雪窓をしていはしめた彼が、その後になつてもその方面に異常な精進をしたことは、ひたすら繁雜を避けて、求めて九州の邊陬に跼蹐したことによつても容易に推測することが出來るのである。そしてその結果が賢巖獨自の境地を打解して、其處に雪窓、節巖兩大老に肖似せざる面目を發揮したのではないか。

賢巖が書畫彫刻の技に長じてゐたことは前に述べた。傳によると彼はまた「一針三禮、自裁二

法衣、或血二書日輪當午經一」したさうである。彼の法統を傳へた武州東輝庵の月船禪慧の「武溪集」には、

山舍靜二朝暉一、傍レ窓補二衲衣一、停レ針纔欲レ語、風起白雲飛。

の一偈がある。賢巖もまたしば〳〵斯樣な心境を味つたものであらう。

沒後十餘年を經て寶永四年四月、勅して諡號を佛燈明覺禪師と賜はつた。蓋し黑衣の諡號の始めだといふことである。古月、定山、大道、大機、濟宗、頑極等は門下の錚々たるものであらう。

×

賢巖示寂の元祿九年は、禪界における一の劃時代的時期であつたといつてもよい。その年曹洞宗においては月舟宗胡が死んだ。賢巖と相並んで臨濟禪の明星であつた盤珪は三年前の元祿六年、至道無難は約二十年前の延寶四年に七十四で死んでゐる。そしてその頃、支那から渡來して一代の人心を風靡した黃檗の隱元も無難より三年前の延寶元年、木庵はそれから十一年目の貞享元年、三代慧林は木庵に先立つこと三年の天和元年にみな歿して居り、元祿八年には更らに潮音

と高泉とが八月と十月に相ついで示寂したのだから、新しい宗派の魅力によつて一時人心を衝動した黄檗も、最早時代の信仰をつないで行く中心的人格者を失うて、たゞ壯麗なる寺院を維持してゆくに過ぎぬ狀態に陷つた。

斯やうにして世間は一般に新しい時代に應じた禪界の中心人物を翹望してゐたのである。この時、賢巖の法を嗣いで、多福を司つてゐた大機祖全は最早五十歳に達してゐたが、古月はまだ廿九歳の壯齡であつた。それで暫らく大機の許に留まつて修養を積んでゐた。

古月は諱を禪材といふ。日向の生れで、俗姓は金丸氏。佐土原藩の大光寺別院、松巖寺の一道に就て得度した。この大光寺は嘗つて單傳——澤庵等と配流に遇うた妙心派の長老——を產した由緒のある名刹で、後年古月は、この單傳の百年忌に當つて、

產二西陬一也貶二東羽一、大法住持總委レ身、勿レ謂同坑無二異土一、吾山傑出沒量人。

と一偈を捧げて、その德をたゝへてゐる。古月がこの大光寺を嗣いで、その住持となつたのは寶永四年、彼が四十一歳の年であつた。

それまでの古月の踏んで來た參究の途は、廿一歳の時、本師の一道に從つて法山——正法山の

略、妙心寺の山號——に上り、智勝院に於て瑞堂に師事し、且つ京都の儒家に就て文學を學んだ。それから二十三歳の時、阿波の慈光寺梁岩和尙の名を聞いて其處へ出かけたが、しかし意に滿たぬものがあつたと見え、間もなく多福寺の賢巖和尙の膝下に走つた。その後あるひは諸方歷參の旅に出で、あるひは本師一道の死によつて松巖寺を監守する等のこともあつたが、しかし賢巖の死に至るまで多福に止まつた。そして賢巖の死後もなほ大機の室を補佐してゐたことは前にいうた通りである。

しかし間もなく古月の名はそろ〳〵禪林の間に知れ亙つて來たものらしい。元祿十三年には紀州の禪林寺に於て楞嚴經を講じて頗る評判を得、十六年にも再び其處に碧巖錄を講じた。また豐後秋岡にその前年一茅庵を結んで古月庵と稱した際にも、隨侍する者が大分あつたやうだ。そのうち大光寺に住持してゐた法兄の英山が彼を呼んでその法嗣としたが、幾干もなく英山歿して、彼が遂に大光の主人となつたのである。

賢巖歿後の禪界特に臨濟一派の禪林が、その中心人物を失うて、ドン栗の背くらべに陷つたことは前に述べた通りだ。そのうちに九州の古月の名が漸く全國に鳴り渡つて來た。近代禪宗の歷

史を檢討して見ると、九州が注目の焦點となつたことが二回あるやうに思はれる。その第一回はいふまでもなく隱元の渡來によつて捲き起された人心の衝動であり、その第二回は賢巖、古月を圍繞した一團の禪風によつて妙心一派の禪宗が全く風靡されたかの觀あつた際のことである。特に古月の勢力は大したもので殆んど一時は、全妙心派を支配したといつてよい程のものがあつたのである。それは寶永頃から正德、享保へかけての二三十年に亙る間で、その間彼は東奔西走、諸方の要請に應じて、一流の禪風を鼓吹した。

古月についで禪界の支配權を握つた白隱が彼の住持してゐた駿州松蔭寺を離れ、他山の招請に應じて講說した最初のものは、元文二年、伊豆の臨濟寺に於ける碧巖錄の提唱であつたといふ。そしてその三年前、享保十九年、松蔭に參じた良哉は、實に古月輪下から鵠林門に移つた最初の頭陀であつたのである。だから白隱が世間から認めれて來たのはこの前後であるといはねばならぬ。賢巖示寂の元祿九年から、白隱が臨濟寺に於て碧巖錄を講じた元文二年までは實に四十二年の間隔がある。假りに古月が大光寺視篆の寶永四年から數へて見てもなほ三十年になるのである。卽ちこの間に於ける妙心一派の最も大なる明星として、古月が九州の一角に燦爛たる光鋩を放射

してゐたのだ。

古月その後の業績を見ると、四十四歲の寶永七年、兼ねての宿願であつた大般若經書寫に着手、助筆三十人を得て二年の後に成功した。それから今度は大藏經を求むるの志願を起し、これも擅越の寄捨を得て全藏六十函覯入し、且つ經藏も建設した。是より先、彼が大光寺に視篆するや、新たに一庵を結んで知又軒と名づけ、終焉の所としたのであるが、五十四歲の享保五年に至つて、遂に此處に退居し、大光を法嗣翠巖從眞に讓つた。

時人知又否、松徑遶三禪關、茅屋三間窄、神光萬境閑、朝暾晴浴レ浪、烟靄暮纏レ山、何管非和レ是、偶諧自解レ顏。

これが彼のその時の偈だ。ところが其後、擅越島津惟久、この知又軒を改修し、僧堂を建てるやら、廻廊を作るやらして寺にした。天壽山自得寺といふのがこれである。その後この自得寺は一度火災にかゝつたが、すぐまた復興された。それで古月は、更らに自ら衣鉢の餘資をもつて小室を山內に構ひ、扁して骨淸堂となし、其處に退隱した。それは享保十八年、彼が六十七歲のことである。自得は法嗣禪興に讓つた。この時も偈がある。

三十年來立二化城一、點二過寶所一、接二群情一、累思寂室好言語、死在二巖根一骨亦清。

しかしながら、世間はなほ彼を骨清堂の寂室裡に留めて老を養はしむることをしなかつた。筑後久留米の城主有馬頼憧が一寺を建立して彼を開山としたいと申込んで來たのである。彼は笑つて、「命且暮に在り、何を恃んでか敢て命を奉ぜんや」と拒絶したが、命を受けて來た使僧が、「師もし諾せざれば、余敢て歸らず」と頑張つたので、止むを得ず、これを受諾することとなり、遂に久留米に出かけた。それは彼が七十八歳、延享元年の春である。白隱まさに六十一歳、東國においては、その勢力が隆々として盛んになつて來つゝあつたが、しかし西國に於ける古月の感化になほ少しも衰へず、途中、遠近の男女老幼競爭して拜瞻する者途を塞ぎ、邑吏及び官吏之を護るといふ狀態であつた。その時は地を相して寺基を定めたのみで歸り、その後工成り、萬般の經營緒について、彼が入寺開堂したのは八十三歳の寛延二年であつた。寺は慈雲山福聚寺といふ。その翌年、妙心寺から使があつて入寺を求めて來た。有馬侯も亦頻りにこれに應ずることをすゝめたのであるが、「德薄く身衰ふ。豈に千金を費して、臭骨を莊嚴にすることを願はんや。吾寺、黑衣を以て主と爲す、是れ余の希ふ所也」というて遂に從はなかつた。

かくてその翌寶曆元年四月、「好不卿嚕、八十五年、飜身一擲、捧二殺青天一」の遺偈を留めて、その二十五日に福聚寺に示寂した。白隱の死に先立つこと十八年である。門下には翠巖、玉洲、北禪、蘭山、百朋、海門、寒岩等があり、北禪の法嗣に月船を出し、月船は誠拙を生んで、いはゆる關東禪なるものの源流となつた。

月秋和尚

城邑聚落に住する勿れ、須らく深山幽谷に居すべし、といふ天童如淨禪師の教に從つて、曹洞の開祖道元禪師は、自ら北越の地を選んで永平道場にその生を終へた。從つてその子孫たるものも、多く摯實堅確の途を踏んで、世間的に華麗な行動に出づることを最も避けたのである。それは勿論出世間を主とする禪僧當然の生活方法であらう。しかしその結果が、一種の遁逸、獨善の傾向を辿つて、遂にはその宗派全體を何となく沈滯の風あらしむるに至つたことも、免れ得ない自然の結果であつたといはねばならぬかも知れぬ。

道元以後五六世に亙つて、言葉をかへていへば、道元の德風がなほ幾分でも直接の感化をもち得る時代においては、懷奘、瑩山、峨山等々、有力な後繼者が續々現はれて、曹洞の宗風をますます發揚した。しかしながらそれ等の時代が過ぎ去ると、同系の寺院がいよ〳〵全國に普遍するとは反比例に、一宗を代表する偉大なる禪匠がだん〳〵稀になつて來たのである。特にそれが德

川時代に入つてから甚しかつた。

これを臨濟宗の方面について見ると、足利末期から德川初期にかけて、大德、妙心を初め五山その他の各方面に、それ〴〵一方の代表的人物がゐる。極めて手近いところを見ても、武田氏に殉じて心頭を滅却すれば火も亦涼しと火中に禪定のまゝ燒死した甲州慧林寺の快川紹喜、德川初期の禪界に雄飛した妙心寺の愚堂東寔、奥州瑞巖寺の雲居希膺、もしくは一絲文字の如き、澤庵宗彭の如き、いづれも一代の崇敬を受けた人々である。曹洞宗にも勿論宗内の長老と認めらるゝものが、如何なる時代にもなかつた譯ではあるまい。しかしこれ等臨濟宗の英傑と並立し、雁行し得る代表的人物が、その時代には容易に認めることが出來なかつたやうだ。

月舟宗胡が世に出たのは斯樣な時代に於てゞある。彼は元和四年、肥前の武雄に生れた。不思議にも彼と臨濟の賢巖とが、その生年を同うし、死んだ年をも同うしてゐる。たゞ月舟は賢巖に比して數ケ月の兄であり、その死も亦數ケ月早かつたやうだ。即ち彼は元和四年四月五日、日の出づる時に生れて、元祿九年一月に死んだと傳へられてゐるが、賢巖は同じ年の冬に生れて、やはり同じ年の冬に死んでゐるのである。そして一方は肥前、他方は豐後といふやうに、九州の程

近いところに生れ合せたのであるが、月舟は若い時から他郷にふみ出して、曹洞宗では最も由緒のある加賀の大乘寺に法幢をかゝげたに反し、賢巖は、修養時代は兎もあれ、一生を郷里臼杵の多福寺に捧げて、妙心寺から數度の招請があつたに拘らず、固辭して出なかつたのと、極めて興味深い對照をなしてゐるのである。

月舟に隨侍すること廿餘年、法を月舟の嗣卍山について、月舟の開創した城州の禪定寺に三代として、卍山の後を受けた曹源滴水の「月舟老和尚行狀」によると、

先投二密宗快義法印一、執二驅烏役一、然宿植所レ感、自慕二禪門一、後事二圓應寺華嶽和尚一、得二剃度一、年甫十二。

というてゐる。その頃彼はしば〳〵家に歸つた。そして近隣の群童と前途のことをいろ〳〵語り合つたのである。ところが、ある日、それについて母からひどく叱りつけられた。それを月舟が老年になつてからもよく記臆してゐて、常に隨徒に話したものらしい。卍山の「和下老和尚薦二先妣一偈上序」に斯ういふ風に記してゐる。

先意利春大姉者老和尚之先妣也。老和尚嘗在二大乘一與レ衆夜話云、我爲二童子一時、父母許レ爲二

出家一、以二冬月一入二山寺一。隨レ師誦レ經、有レ暇則遠顧二親里一、不レ能レ無二戀々之情一暫歸レ家。母喜設レ食、摩頂而撫愛焉。一夕隣家童數輩來訪レ我、互說二所思一。余云、願爲二此國之主一、撫二育群下一。母在二屏所一聞レ之、艴然起レ色、瞋而云、昔者釋尊捨二金輪寶位一、踰レ城到レ山、難行苦行、成二頭陀身一、化二三界一度二九類一、汝今出家欲レ爲二佛弟子一却願二區々一國之主一、志之所レ之、與レ佛背馳、其如レ此而豈得レ成二出家無上功德一乎。古所謂一子出家九族墮獄。自レ今以後、莫二復行レ寺、我誓不レ許二汝出家一。言訖入レ內。鄰童見二母盛怒一、皆恐懼而去、我獨在レ坐深悔二前言一、心中自誓、向後假使有レ得二天下富貴一不レ可二敢受一、何況瑣々名利乎。中夜潛出奔、獨自歸レ寺。明日母遣二使於寺主一告以下不レ許二出家一之誓上、於レ是乎族類相議、數日說レ母、母心漸解矣。自後我專樂レ在レ寺、不レ戀二族生家一。且行脚遊方之際、能忘二世情一而一味爲レ法者蓋以レ憶二念母言一也。母是我最初善智識也。不肖爾時在レ坐、預聞焉、聞者皆感云、在二此賢母一而有二此老和尚一不二偶然一也。今玆七月二十一日、當二大姉半百之遠忌一、老和尚尊年七十八、而猶戀々懷二孺慕念一馳二信香於叨利天上一、招二玉靈於補陀堂中一、誦經說偈祭二其神一實如二神在一也。不肖幸陪二齊會一不レ勝二感喜之至一恭和二寶偈一以薦二淑靈一云、叨

利天宮通レ信辰、香雲影裏頓降レ神、報恩端的剎那際、一句喚回五十春。

月舟七十八といへば、長逝以前二年の年に當る。左様な老年になつてからでも、彼は母を最初の善智識として追慕してゐたのである。但しこの五十年忌に於ける月舟和尚遺錄には收錄されてゐない。遺錄に收錄されてゐるのは、たゞ左の一首だけである。

母訃到

理盡詞窮母子緣、訃音到處暗潸然、年來數有二編蒲意一、空作二返魂一炷烟。

この母の訃の到つたのはまだ彼が修養時代であつたので、おそらく諸國歷參の客窓においてこれを聞いたのであらう。

彼が故鄕を後にして遊學の途についたのは十六の年であつた。「到二東關一掛二錫於常州多寶院一」と「行狀」にあるから、まづ關東に至つたものらしい。そしてその頃から、いろ〳〵疑惑をもつに至つた模樣だ。「聞二衆中商量云二無心是道一大發二疑情」というてゐるから、この「無心是道」といふことが腑に落なかつたのであらう。「若是無心、如二同木石一、木石豈能成二佛祖道一、現有二此心一、何云二無心一」これがその當時の月舟の理窟であつたのだ。ところがある本を讀んで、「要レ到二無

心田地一、直須二見性如得一」といふ言葉を發見したのである。それが彼の心を打つて聊か癢處に抓著した感があつた。其處で頻りに見性の工夫に沒頭した。「行狀」には「至二寢食共廢一者有レ年」というてゐるから、その沈潛默考の時代が幾年か續いたものであらう。

一朝在レ厠、切疑二此事一、移レ時忘レ出、時暴風吹レ扉、忽開忽合、磕然有レ聲、直下了然驀打二破從前疑團一、如二夢忽醒一、如二忘忽記一、不レ覺二手之舞足之踏一、歡喜不レ可レ言也。

卽ち第一の關門が打壞されたのだ。しかしこの關門打壞の歡びは、容易にこれを他の人々によつて理解されることが出來なかつたらしい。

以二前所得一、雖レ說レ向レ人、無二辨レ之者一、粤聞二萬安和尙在二丹之瑞巖一、故往參扣。

萬安英種は當時に在りてはまことに曹洞有數の禪匠であつた。宇治の興聖寺は元來開祖道元が最初に開創した寺で、いはゞわが國曹洞宗の開創の由緒をもつた名剎である。然るにそれが、後年全く荒廢して跡形もなくなつてゐたのを、淀の城主永井尙政の援助を得て再興した。その他萬安の開いた庵院は凡そ三十餘ケ所に及ぶといふ程、德化四方に及んだ一宗の耆宿であつたのだ。この老僧の下に月舟が走つたのである。

安知二其法器一、懇加二瑳磨一。

かやうな時代が幾年續いたことであらうか。「一日出レ山行次、失脚倒レ地、廓爾得二大無礙一」と「行狀」には記してゐる。即ち前の第一關門を打破してから幾年、此處にまた第二の關門を透過したのだ。しかも「得二大無礙一」というてゐるのであるから、此處に大徹無礙の大境地に達したのであらう。その時の述懷に、

一日汲盡四大海、無レ處レ藏レ身婆竭龍、洞水逆流流不レ竭、只有二今日一契二我宗一、

というてゐる。兎も角偉い見幕だ。

それから彼は加賀大乘寺の白峯玄滴の室に參じてその心印を傳へ、信衣を領し、暫らく攝州有馬の山寺に寓した。

寺曰二宅原一、寂莫無二塵緣一、禪餘吟咏、陶然自樂。

と「行狀」にその頃の生活を描寫してゐる。「月舟和尙遺錄」には「萬休山中春日」と題して、その頃の彼の偈數首を收錄してゐる。

林下迎レ春事自閒、僧儀畢竟異二人間一、新年有レ法非二心外一、滿目靑々四面山。

賞心定是有二人動一、日暖風和物自新、不レ管春光深與レ淺、萬休山裏一閒人。

六白甘レ閒寄二此生一、幽棲是處値二新正一、東君賜與山中曆、掛在二梅花枝上一明。

金鷄後夜覺二天明一、出レ定吟行囀二鶯聲一、舊臘已和レ春不レ競、幽棲豈與レ世應レ爭、窓舒二嶺雪一團白、瓶煮二石泉一千古淸、獨自點頭塵外樂、爐添二榾柮一賀二元正一。

この宅原寺における聖胎長養時代は、月舟の生涯において最も意義深いものがありはせぬかと思ふのであるが、しかしその依據すべき文獻を未だ見出し得ぬことは極めて遺憾である。兎もあれ、「六白甘レ閒寄二此生一」というてゐるのであるから、萬休山裏の閒寂境に沈潛したことが六年以上に及ぶのであらう。その間彼は受業の老師華嶽和尙を省覲するために肥前に歸り、そのついでに長崎に出て、支那から渡來した道者超元を崇福寺に訪うてゐる。そして明曆元年、板倉周防守の招請によつて三州の萬燈山長圓寺に移り住むことになつた。それは恰度彼が三十八歳のことであつた。

是から月舟の轉法輪時代に入るのである。その頃はすでに彼の名が宗內に漸く認められて來たものらしい。そして十年の長きに亙る彼の住持時代は、「諸方指二目長圓一稱二東海法窟一」に至つ

たのである。

十年喫レ飯萬燈峰、坐二斷煙雲一幾許重、柱杖一朝頭自點、把二將鉢口一掛二虛空一。

これが彼の長圓寺退院の偈であつた。それから同州の大澤龍溪院に輪住すること一年、退二一院一會歸二一院一、就レ中無レ是又無レ非、有心不レ似二無心好一、坐見白雲自在飛。

の一偈を殘して、此處も亦退院した。それからは暫らく全く白雲流水を學んで自在に飛び、自然に流るゝ境地に入つたものらしい。

其後不レ定二行止一、腰レ包行脚、如二衲子輕一、或留二村落一、或寓二山林一、

と曹源は「行狀」に記してゐる。しかし「此時泉南禪德、住吉興禪、前後請レ師爲二開山祖一」ともいうてゐるから、これ等の寺院を開創したのが、この白雲流水時代であつたのであらう。

かくて加賀の大乘寺の請によつて、其處に留まつたのは寛文十四年、彼の齡がまさに五十四に達した時である。

先レ是、本朝洞門、宗風不レ競、日致二寂寥一、而今參玄之輩、聞二師進山一、四方雲集、俄成二禪市一、師亦以二法幢一爲レ任、勉行二永平瑩山之古規一、於レ是洞上一路全合二古轍一。

その時の事情を曹源は斯う記してゐる。「月舟和尙遺錄」に收載されてゐる左の諸偈は、おそらくこの頃のものであらう。

講二永平清規一示レ徒

昔日永平定二清規一、叢林從レ是振二嘉聲一、到レ今博約折中語、留二與禪家一成二戰爭一。

刻二瑩山清規一成示レ衆

事無二大小一合二清規一、便是金毛獅子兒、世上野狐精見解、由來夢也不レ應レ知。

祖々清規不レ可レ猜、事無二大小一絕二安排一、江湖滴々朝宗水、盡自二靈源高處一來。

この大乘時代は月舟の圓熟時代であつた。卍山道白、德翁良高、雲山愚白等の俊英が、彼を圍繞して法幢を高く揭げたのであるから、一代の人心が其處に傾注したことも當然の歸趨といはねばならない。その結果、彼は曹洞中興の祖師と稱せらるゝに至つたのである。

月舟の大乘時代は約十年に亙る。延寶八年、彼が六十三歲の秋、この法席を高足卍山に讓つて退鼓を打つた。

得レ請應レ招來意重、了レ緣終レ化去身輕、一條柱杖赤骨律、無極清風脚下生。

まさにこの心事は、政治家が内閣を組織するに際して、勇躍の間にも、いふべからざる重くるしい壓迫を心中に感じ、骸骨を乞ふて厥下を退下するに際しては、思はず蘇生の吐息を吐いて安慰の情を味ふといふものと、全く同一なものがあるというてよからう。

その頃京都郊外、宇治の田原に補陀山禪定寺といふ寺院があつた。もと東大寺派のものであつたが、地主等がこれを禪宗に改めて新に月舟をその開山としたのである。卍山はこの禪定寺について「補陀山觀音妙智院禪定寺記」といふ長篇の記文を作つてゐる。

夫れ名山靈跡隱顯時ある者は其の人に係る也。我れ山城桑在郷補陀落山の事に於て之を知る也。山は洛陽の東南六七里に在り、宇治郡を出でて行くこと三里、始て此の山を見る。山一朶にして三峰の勢あり、寶珠の形の如く、圓伊の點に似たり。昔南都の正法院主平崇上人、深く密嚴華藏の宗旨を探り、飽まで顯密兩教の義趣を暗んじ、常に禪那の室に坐し、阿字の大定に入る。止觀雙修して智行兼ね全く、朝誦午梵、口金光を放つ。一條天皇の正暦元年庚寅、東大寺の別當に補せらる。榮遷を賀する者、法門を問ふ者、眞となく俗となく、日夜喧闐、往來霧を蒸す。身、散業に縈れ、心、靜觀に疎なり、梵誦の時に當りて、口光遂に息む。是を以て早

く榮職に居ることを厭ひ、僅に一歳を越て、明年辛卯の春、勤て寺務を辭し、因に、攸を桑在に相し、果して此の山を得、大相界を結して大伽藍を營む。工を其の年三月に鳩め、手を長德元年乙未の初秋に斷つ。名づけて觀音妙智禪定寺と曰ふ。四年戊戌十月十九日、大會齊を設け、落成の慶を修し、六十僧を請して二部の樂を奏し、四方群集、一時の盛觀なり。大殿の壇上、十一面觀音の像を安ず。像の長八尺、文珠、普賢、左右に挾侍す。上人常に法華を持して、入講長講、孜々として怠らず（中略）其の餘の諸堂に安ずる所、大日等の諸佛及び諸菩薩四天王の像、是れ皆叡山定朝の手刻、相好巧妙にして世に希有なる所なり。是に於て上人衣盆の資を盡し、杣山千町を買ふ。（中略）更に久世中村に於て田園若干を求め、合して莊地と爲し、以て香火の費、僧食の料に充つ。九夏安居の制、正二兩月の勤修、般若梵網の誦讀、佛名懺悔の禮讃、規繩井々たり。上人の弘教、盛なりと謂ふ可し。（中略）長保四年壬寅十月十七日、世壽七十有七、端然として坐化す、寺の西隅に葬る。後、長元二年に至て御堂關白道長の長子左大臣賴道、この寺を崇奉して以て植福の地と爲す。此より日々富饒にして住する者流記を守らず。賴道、宇治の別業を捨てゝ平等院を造り、復た此の寺に詣でざるに及んで、寺稍々

衰薄相繼ぎ、田畝、山林、券牒、亡失して多く豪右の爲に侵さる。延久の初め、覺勢阿闍梨、伽藍界及び莊地を擧げて平等院に屬し、恰も子院の如し。蓋し官寺の威を借りて、以て其の侵奪を免れんと欲するのみ。元暦二年、三昧堂を置く。貞應元年、定仁法師と公文藤原兼重と議して、熊野、山王兩處の權現を勸請して、上津下津兩建藤明神の社を造る。（中略）正應四年、住持一和尙信快沙彌乘願下司藤原石熊丸等、志を同うし力を勠て諸堂を修理す。未だ幾ならず、寺に火あり、寶構塵と化し、空しく焦土を餘すのみ。其後之を造修する者ありと雖、舊規の十一に及ばず、且つ田畝山林皆官家に歸す、是によつて、寺、年を逐うて荒殘して逃亡人の家の如き者三百五十餘年、寛文年間に至つて、巖松寺慈仁律師、一たび遺跡を見、悵然として興復の志あり、乃ち大悲堂の傍に於て小茆屋二間を作り、時々に來憩し、平崇の葬所を荆蕀林中に得て、石を立てゝ記す。益々前古を慕ふ。而かも幾ならず、故ありて他に赴く。既にして百癈日々に極つて、まさに麋鹿の區と爲んとす。（中略）延寶八年庚申、吾が月舟老人、將さに大乘住持の事を謝して退隱せんとす。四方の檀信、之を延くに幽棲の地を以てする者尠からず、師皆赴かず、たゞ補陀山の事を聞て自ら之を得んと欲す。縣人喜んで官に告ぐ、官の云く可也

と。師欣然として來て敗屋中に安居し、兀々とし一冬を涉る。大悲の古堂朽損して撑へ難く、像儀壞失して纔に殘る所の者は七八尊、而かも手足坐光、處を異にして狼藉たり。師之を見るに忍びず、即ち像工氏に命じて一々焉を莊挍し、次で土木の役を興して大悲堂並に方丈、香積、廊廡等を鼎新し、以て百餘衆を棲ましむるに足れり。嗚呼此の地、從來觀音大士の遊舍、小白華の境たりといへども、人の跡を發するあることなくして、會々平崇の隱を卜するに至りて、夫の公卿相將より以て田夫樵夫に至るまで皆能くその勝地たることを知れり。崇公の後漸々衰癈し、今吾が師の此に居するに至て復た浩然として興る。所謂靈迹の隱顯は、時と人とに係れる者、それ此の如し。（下略）（原文漢文）

以つてこの禪定寺の盛衰と、月舟が其處を再興するに至つた經緯とを知ることが出來る。月舟は禪定に住むこと約十年に亙つた。

人々脚下圓通閣、箇々面前盤若臺、觸目分明觀自在、白華山裏白華開。

これがその頃の作であるとのことだ。まことに心境洞然、當時の彼を容易に推測することが出來る。

春宵煮茶

縱盡千金一價遏窮、春宵一刻煮二松風一、有レ香有レ影花兼レ月、移入二盧同七椀中一

これなども恐らく同時代のものであらう。そのうち元祿四年になつて、卍山が大乘を退き興禪に坐つた。そしてその秋に老師月舟を見舞うて來たのである。月舟はこれを機會として卍山を禪定第二代に推さうと思ひ立つた。彼自身が卍山に代つて興禪に寓居することとしたのである。「月舟和尙遺錄」には、卍山に關する作が多い。

喜二卍山長老來儀一

一條柱杖徹二根源一、倒用橫拈解脫門、不假二陽和些子力一、掌中至寶曬二乾坤一。

和二卍山長老遊山一

松下重栽無數杉、千尋氣勢衝天參、棟梁姿在二寸苗裏一、暗蓋西東與二南北一。

卍山長老赴二西海鄉一後逢二鄉人歸一寄二書並偈一問二訊旅況一

別後神馳西海頭、行程無レ恙到レ鄉不、憑レ人傳語問二消息一、此日投レ閒何處休。

此處には西海とあるが、元來卍山は備後の人であるから、其處へ歸省したものであらう。兎も

あれ一代の學匠として宗內に重きをなしてゐるこの長老に對し「此日投閒何處休」などと老婆心切を見せてゐるところは、流石に子弟の情であらうか。

そのうち元祿八年には、月舟七十八歲の老境に入つた。「行狀」には「老且衰」と記してゐる。其處で卍山は自ら洛北鷹ケ峯に源光庵といふのを手に入れ、自分は其處に退いて、月舟をしてまた禪定に歸らしめたのである。「蓋欲レ令レ取二滅度於山中一也」といふのが、卍山の老師に對するの思ひやりであつた。

春三月、卍山及雲山白、德翁高等、同時省覲、賀二師還山一。師大喜、而囑云、老僧身心疲勞、殘庚不レ久、今日一會、甚爲二希有一。當山者、往世巨刹、一癈荒涼、老僧一來、營二立禪居一、充二終焉處一、山林幽邃、愜二老僧意一、以爲二一代開法行道地一、前來老僧所レ創寺院、共以二此山一爲二本山一、本末相扶、宜下護二持法門一、興中隆吾道上。諸徒唯々而去。（「月舟老和尙行狀」）

その頃の月舟はすでに斯樣に身後のことまで考へるやうになつてゐたのである。しかし、遺錄によると、なほその頃の作として、

卍山長老覓二得洛北鷹峯之源光庵一爲二幽棲地一以レ偈陳レ賀

將二他慧遠舊蓮社一、變作二曹溪新寶林一、時節因緣難思議、鷹峯增翠古來今。

過二源光庵一和二卍山長老呈偈韻一

行藏用捨不二曾空一、隱顯隨レ時全二始終一、來見下幽棲無二一物一、情知自有二古人風一。

といふやうな作があるのであるから、兎も角宇治から源光庵に出かけて行つたといふやうなこともあつたのであらう。

しかしそれは長いことではなかつた。「行狀」にはやがて下のやうにこの老僧の終焉を記してゐるのである。

此冬示二微恙一。翌年正月、病較重。五日夜、擧二淨極光通達之偈一、爲二侍養者一、懇々垂誨、到二十日曉一、寂然不レ動、如レ睡而化。留龕三日、面如二平生一。世壽七十九、法臘六十七。辭世偈云

出息入息、前步後步、生死去來、箭鋒相拄、無中有レ路通、是我眞歸處。

火化、收二骨身一、塔二于寺西隅一。塔曰二含空一。

斯樣にして曹洞中興と稱された老僧は、泊然として遷化した。「行狀」は進んで彼の性格について次のやうにいうてゐる。

師賦性朴實、有二古德風一。有レ慈而如二春風一、有レ威而如二秋霜一。雖二流金之暑一、裂裘不レ離レ身、雖二折膠之寒一、雙手不レ收レ袖、蚊蚋侵レ肌而流レ血、不レ使レ扇、禪誦先レ衆、而至レ死無二惰容一。

これは大體僧侶の性格を形容するに際して、如何なる場合にも用ゐられる文字で、極めて普遍的のものではあるが、しかしこれによつて彼の生活が兎も角、禪僧としての淸規をよく守つてゐたものであつたといふことだけは、明白にし得るであらう。

平生言行不レ許二人記一、雖レ不レ嗜二文字一、其偈言超絕、動令(ヤ、モスレバ)二人驚一。自然能レ書、不レ厭二揮洒一、扁額等大字、雖二數十紙一、一時掃盡、無レ顧二巧拙一。

おそらく書は彼の最も得意としたところではなからうか。曹洞派においては、彼を以て近代の書き手としてゐるといふことだ。草々筆を下して、何等氣取つたやうなことのないところに、寧ろ自然の妙味があるといはれてゐる。それだけ彼の墨蹟には出來、不出來があるともいはれる。

大體、その壯年時代の書は、相當に覇氣の多い書風である。しかし晩年になるに從つて、自然に圭角がとれて、淡々たる自然の味が出て來たやうだ。

鷹峰の卍山

一

月舟の生涯を知れば、次で卍山の事蹟を檢討する希望をもつに至ることは當然の成行だ。曹洞の一派は、月卍二師と必ず並稱してゐるのである。卍山の宗門復古の事業は、月舟によつて基礎づけられた上にこれを建造したのだというてもよい。兎もあれ、前に月舟あり、後に卍山があつて、曹洞宗が復興した。もし曹洞復興といふに語弊があるとすれば、曹洞の一派、明峯派が、曹洞全派を牛耳るやうになつたというてもよい。

卍山は寛永十三年正月、備後に生れた。俗姓藤井氏。父も母も篤信の人々であつたさうだ。七歳にしてその地方の龍興寺といふ寺に入り照山和尚に師事したが、十歳の時、この師の坊が死んで一線道播和尚が後住となつた。よつて卍山もこの一線和尚に從つて經籍詩文を學んだのである。この一線和尚は相當の坊さんであつたものと見へ、慶安四年、卍山十六歳の時、龍興寺を退山して關東に出た。そしてそれから引續いて江戸に居ついたものらしい。從つて卍山もその年から暫らく關東の生活が續いたのである。

卍山が一線和尚の命を受け、初めて王子山觀淸寺に住山したのは四十一歳の延寶四年であつた。しかし四十三歳の延寶六年に、彼は大乘寺月舟の道風を聞いて、遽かに北遊を思ひ立ち、直ちに走せてその門に參じたのである。偶あり。

老來豈是愛遊蕩、行脚將敲最後關、此心只許龍天識、不在閒言長語間。

月舟と卍山との間の肝膽相照はまことにこの上もないものであつて、月舟は、直ちに「古より法門人を得ること難し矣、今我れ汝を得て、世尊の迦葉を得、靑原の石頭を得るが如くなることあり、我が宗汝に至つて大に興らん」というて、嗣書、法衣並に付偈を授けたといはれてゐる。のみならず、その翌々年、卽ち延寶八年、月舟が大乘寺を退山するに際しては、特に卍山をその後住に推薦した。

斯樣にして卍山は瑩山下の名刹大乘寺の主となつた。そしてその時代は十幾年か續いたのであ

るが、元祿四年、五十六歳の春、其處を辭して攝津の興禪寺に入り、やがて月舟の命によつて禪定寺に代つた。それから三年經つて元祿七年、彼は更らに幽棲の地を求めて洛北鷹ケ峯に一廢庵を見つけ、其處を買取つて最後の安息所としたのである。

予大乘を退いて後、洛南の補陀山に隱るること四年、稍々にして人の臭を逐ひ來る者あり、因て居を移して更に幽僻に入ることを思ふ。長老元貞、予に代て攸を洛北の鷹ケ峯に相して一處の廢庵に逢着す、恰かも逃亡の屋の如し、閒曠蕭條として隱棲の地と爲す可きに堪たり。所謂源光庵なり。歸り來て告ぐ。予一たび舌頭底を聽て、未だ其の境を見ずといへ共、暗中に摸索して其の梗槩を知る。油然として支遁、山を買ふの志あり。乃ち書を加州中田氏靜家居士に寄て、告ぐるに予が意を以てす。居士書を一見して、告る所を疑はず、黃金七十兩を喜捨して地を買ひ、庵を買うて、以て開基の檀主と成る。（原文漢文）

卍山は自ら「鷹峯源光庵緣起序」に於て、源光庵開基の事情を斯う說いてゐる。洛南の補陀山とあるはいふまでもなく禪定寺であり、中田靜家居士といふのは名を莊三郎といひ、金澤の富豪で彼の有力なる檀越であつたらしく、源光庵の外護は一切この人に依賴してゐたやうである。更

らに長老元貞といふのは、彼の嗣法の弟子で號を乾光といひ、後に攝州興禪寺の住持となつた和尙であるが、この源光庵の經營については、並々ならぬ苦勞をしたやうだ。

此庵未だ何代に肇るかを詳にせず、近世に至て僧智空、把茅を結び淨業を修す。爾來洛の長講堂管領す。既にして數年以來、地荒れ庵破れて、復た一僧の念誦を課する者無し、只老弊の一奴を置て之を守らしむるのみ。而して今元貞官府に達して淨門を革めて禪門と爲し、彌陀佛を念ぜずして乾屎橛を念じ、四色蓮を觀ぜずして二株の桂を觀ず。是も時節の然らしむる也。初め庵の事未だ定まらざる時、元貞補陀より洛に赴く前後八九度、往來十里、暑を侵して驅馳す、汗衣を染むといへども換洗するに遑あらず、然も曰、勞せる言なく、面難色なし。（「鷹峯源光庵緣起序」）

元貞が斯樣に骨を折つたのは、元祿八年春から九年にかけてのことであるらしい。源光庵修造のことを官府に願出でたところ、「小障礙あり」て容易に進まず、事の成否を二度までも自らトつて見た程で、最後には、もしこのトにおいて吉兆の卦を得なければ斷然工事を中止しようとまで決心した程であつた。それが一夜靈夢を感じて、氣をよくして待つた結果、九年菊花の節に官

許を得て築造を完うすることが出來たと、卍山自らその時の元貞の告白を聞いて「感夢記」の一篇を手記してゐる。

卍山はこの幽棲の地を寶樹林と名づけた。蓋し靈山淨土の寶樹莊嚴なるを思うて斯く名づけたといふのである。なほ彼はこの地方について左のやうな説明を加へてゐる。

我が寶樹林の鷹峯の里に在るや、帝城を距ること里餘、直に北山の根に據て雲松を以て界を表し、烟霞を驅て門を擁す。門前に市居ありといへども蕭々たる破屋、繁華の人意を亂すに非ず、往來ありといへども、區々たる樵客、富貴の世塵に走るに非ず。實に隱淪の社多、棲遲の處にして、寂寞幽僻、塵外の境也。嘗つて雍州府志を閲するに、所謂大燈國師の上足徹翁享禪師、鷹峯に在て坐禪す、而かも水の乏きを患ふ。時に仙の白馬に騎し、龍の童兒と化するあり、同く禪居の後溪に入て沒す。乃ち其の處に就て二池を得たり、一は白馬池と曰ひ、一は童兒池と曰ふ、亢旱の時といへども枯涸せず。二池今現に此の庵後に在り、府志に言ふ所の如し。嗚呼百年前、徹翁、坐禪を此中に肇め、數百年後、老衲坐禪を此中に續く、前後交參、豈に因緣なからんや。老衲近來龍寶派下の諸德と時々相見え、交態隔なき者蓋し偶然ならざるに似たり。（原文漢文）（「冬日偶懷偈序」）

その頃、卍山は龍寶下、卽ち大德一派の人々と時々相見えて、交態隔なき狀態にあつたことは、彼の詩文に、大德派の人々がよく出て來ることによつて明瞭である。

二

最初、卍山が源光庵に移り住むに至つた時、月舟は其處を訪づれて、「來見幽棲無一物情知自有古人風」とたゝへたのであるが、しかし、年とともに庵の設備もいろ〳〵整うて行つたらしく、まづその左側には療枯廚といふ飯堂が出來、その右には陽喬軒といふ客室が增設された。そして門前には化城窩といふ待合所も出來、庵後の堤は芙蓉隖と名づけられた。そのうち、正安年中に禪定寺の住侶某によつて鑄造された古銅鐘が、何處やらの肆頭に賣物となつてゐたのを元貞が見つけて人をやつて、買ひ取らしたものも、庵の西檐にかけられた。これ等の設備に對しては、それ〴〵その典據をあげて卍山自ら一々記文を作つてゐる。その一例として此處に「陽喬軒記」を引用して見よう。

鷹山は洛北にあり、我が庵、峰北に在り、茆茨を以て蓋ふ、是の故に人或は喚て北山草堂と爲す。然れども周顒が隱を學ぶに非ず。庵の左り、素と小齊厨を造て名て療枯と爲し、今一小軒を庵の右に營て、扁して陽喬と曰ひ、以て來客安頓の處に備ふ。陽喬は魚の名なり、釣らずして來る、士の招かずして至るに譬ふ。我が庵は所謂水淺くして是れ舟を泊する處に非ず、又釣鈎を投せず、香餌を落さず、然かも往々客の招かずして至る、彼の陽喬の如き者あり。軒の扁するところ此を以てする也。或は曰く、今客の爲めに此の軒を設くる、射栗の箭を招くが如く、鈎餌の魚を待つが如し、豈鈎を投せず、餌を落さゞる謂ならんや。予曰く然らず、招ずし至る者の已に至て安頓の處無きときは、釣ずして來る者の已に來つて躍て沙上に在るが如し、其の處を得ざるときは須臾といへども亦安ぜざる也。此の軒の設け、彼の沙上須臾の不安を免れしめんと欲するのみ。若し招く所あり、待つ所ありと言ふは予が意にあらざる也。（原文漢文）

陽喬軒は以上のやうな意味をもつて命名したのである。その他芙蓉陽にしても、それは實物の芙蓉花を植ゆるとか何とかいふ意味ではない、天寧の芙蓉道楷禪師が、紫衣禪師號を固辭して拒命の罪に問はれ、淄州に配されて芙蓉湖心に庵居した故事を追慕してその名を付けたのであり、

療枯厨は「良藥の事とするところは形枯を療せんが爲め也」といふ意義に基づいて、佛弟子の飲食はたゞ枯悴を防ぐことを得れば足るといふ趣旨をもつて命名したのである。

斯樣にして寶樹林裡の設備が日に月に整うて行つた。そして寶永元年には、檀越靜家居士が、特に寢堂を造つたのである。卍山はそれを復古堂と名づけて、自ら復古道人といふに至つた。その記がある。

昔は臨川の饒君孟持、軒を名づけて復古と爲せる者は、諸れを其の五世の祖、某府君の琴の名に取る也。而して今中田長主、老衲か爲めに此の堂を作る、老衲堂を名づけて復古と爲る者は、諸れを洞上の法曲古調に復するに取る也。彼は遠祖の物子、亂賊の爲に奪はれて、重ねて其の手に歸するを喜び、此は從上の曲子、今時の爲めに誤られて、又舊譜に歸するを喜ぶ。彼は有琴の琴、形ある者也。此は無琴の琴、相無き者也。形ある者は有より無に之き、竟に朽亡に至る、無相なる者は無より有に之く、誰か滅盡を見ん。夫れ此山猨鶴の鳴を雪煙に寄せ、艸堂松竹の響を風雨に託するも亦皆無琴の琴にして、法曲の寓する所なり。今已に法曲古調に復するときは、滿耳の聞く所盡く是れ太古の正音にして、家傳の妙操に非ずといふこと無し。老衲常

に此の堂中に在て、湛然默々として喜怒如何といふことを知らず、堂の名を立つる蓋し喜を志する也。（原文漢文）

たゞこれだけでは聊か茫漠たる感なきを免れぬが、この文は、卍山一代の大事業である嗣法復古の訴訟が、彼の希望する通りに決着した翌年に於て記されたものであることを知れば、自ら其處にその意義も明瞭になつて來るであらう。おそらく靜家居士の寢堂建造もその祝意を以て計劃されたものであつたのかも知れない。そして居士の意思の如何に拘らず、卍山がこれを命名した意旨が、其處に在つたことはこの一文によつて明瞭に看取される。其處で問題は、その宗弊改革、嗣法復古とは如何なるものであつたかといふ點になつて來る。

彼の門人三州白龍の編纂した「鷹峰和尙年譜」によると、寛文三年癸卯の條に斯う記してある。

師二十八歳、常に永平の正法眼藏を閲して嗣書面授の篇等に至つて、未だ嘗て卷を掩て歎ぜずんばあらざる也。曰く佛祖の傳法、要一師印證面稟手授に在り。永平高祖、丁寧反覆、戒飾尤も嚴なり。然るに中古以來、宗風地に委し、代付俑を作し、杜撰釁を開き、院を將て嗣を換ふ。習ひ久うして法なりと謂ひ、時勢輓き難く、沿襲返り難し。系紊れ統亂る、熟れか焉より甚しからん。我れ何ぞ擇ぶべからざらん。寧ろ棄てゝ他派に投ぜん乎、將た發願して古に復せん乎、二念岐趨すること久し。一旦奮爾として古に復するの志決せり。是に於て特に因光禪師を龍穩に、丹心禪師を總寧に訪ひ、告ぐるに其の革弊を以てす。皆曰く是れ可なり。時の在るあらん。師因に唱和、「扶宗一念久成レ僻微焰至レ今猶未灰」の句あり。（原文漢文）

即ちこの二十八歳の年においてすでに復古の志を立て、その意思を關東の曹洞宗役寺である武州の龍穩、總州の總寧兩寺の長老に具申したものと見ゆる。しかしこれ等の長老達は、いづれ時機があらうからと、卍山の雄心をおさへたのだ。

卍山が南都の公慶、黃檗の鐵眼と相會し、各その大願を立て、公慶は大佛殿建立、鐵眼は大藏經の開刻、彼は宗統復古を約したのであるが、その際にも彼の素願が最も難事業であるといふ事實が三人によつて等しく認められたといふことだ。それほど、この宗統復古といふことが、當時の環境においては困難なものがあつたらしい。從つて卍山等がいよ〳〵この問題を表面的のものにして、幕府に訴へ出てからも數年の日子が空しく經過したのである。年譜によると、この問題を提げて彼が江戸に出たのは元祿十三年七月である。そしてその落着を見て鷹峯に歸山したのは

十六年の十月といふことになつてゐる。その間、宗内の利害が錯綜し、意見が紛亂したのであるが、總持寺派の有力者に彼の法統に屬する者があり、幕府の有司中に彼の同情者があつたといふやうな事情もあつて、結局彼等の意見を貫徹することが出來たのだ。

宗統復古の是非その他については、門外漢の容易に容喙すべきところではない。たゞ七十に手の屆いた老僧が、一宗の俗論に對抗して、敢然數百年來の因襲打破に起ち上つたことそのこと自體に、人心を深く感動せしむるものがあるといふに止めて置かう。斯くして彼は宗門改革の完成者といふ名譽を荷うて源光庵に歸つたのだ。そして復古堂の建立されたのがその翌年に當るのだ。

三

「鷹峯卍山和尚廣錄」第三十一卷に、「頌二先師鏡一序」といふ一文が收錄されてゐる。彼が月舟和尚に對する追慕の情が綿々として盡きざるものが觀取される。

先師老和尚興禪に在りし日、常に鏡を把て自照して云く、年老て父母を憶ふとき、鏡に臨で我が面を見る、我が面來源あり、即ち是れ父母の面と。不肖其の言を受けて今に至て忘れず、先

師滅を禪定に示して既に八年、一日の如し。是の年已に過て又臘月に至る。臘月十二、禪定の長老源公、使を馳せ、偈を以て所謂先師の鏡を寄せ來る。偈に云く、

祖翁指二此鏡光圓一、形影親譚三昧禪、今日獻レ師重拂拭、高懸二臺上一照人天。

偈を誦し、鏡に接して、悲喜交馳す。悲む者は先師已に亡きを悲み、喜ぶ者は此の鏡の猶ほ存するを喜ぶ。乃ち一時の感を以て響を接し韻を次て云く、

舊時圓鏡舊時圓、覿面相臨憶二老禪一、物是人非忘不レ得、和レ光特地叫二蒼天一。

既にして感定まつて默して先師平生の言を誦し、乃ち其の言に擬して云く、

年老憶二先師一、臨レ鏡見二我面一、我面有二來源一、即是先師面。

恁麼に同光し、恁麼に反照すれば、物即人、人即物、先師亡せず、鑒機前に在り、然るときは向(さき)に蒼天と叫ぶ者、之を前言の戲と謂はんも亦可也。(下略原文漢文)

この文は「先師滅を示して八年」というてゐるから、おそらく元祿十六年の師走、即ち卍山が宗統復古に成功して江戸から歸つた冬のことであらう。さすればそれは彼が六十八歳を過ぎて、まさに六十九歳を迎へんとしてゐた際のことである。この老年になつて、一宗の長老と尊敬せら

るゝやうになつてからも、このやうに先師に戀々の情を持つてゐたのは、如何にも彼の純情の人であることを證據立てる。

寶永二年は彼の七十の賀に相當する。よつて豫め慶誕を許さゞる旨、隨徒に傳へたに拘らず諸方からの賀偈が殺到した。その年、彼は九州に旅して筑前の東林に入り、更らにその翌々四年には關東に下り、受業師一線の住持した前頂山に上つてその墓を拜した。おそらくこれが、彼の長い旅の最終であつたのであらう。七十九歳の正德四年には、仙洞の御召があつたが固辭した。かくて八十の誕辰を迎ひ、その夏微恙を示し、八月に入つて稍小康を得、醫者達が、「和尚違和なし、藥の必要がない」といふと、彼は笑つて「老衲無病の病、豈に藥劑の救ふ所ならんや」といひながら、十五夜の明月に遇うた。

露の身の消ゆるまつまに思ひきや、今宵の月に照されんとは。

といふのがその夜の感想、そして十八日、

不起不住、不去不來、心外無法、滿目崔嵬。

の一偈を、その時、病に侍してゐた白龍和尚に授け、更らに

超師超佛、滿八十年、秋風捲レ地、孤月遊レ天、無幻幻兮無病病、全身入塔石中蓮。

と書し訖つて寢に就き、翌十九日昧爽、跏趺して三度び胸を摩し、衆を顧みて「吾今逝矣、汝等努力珍重」というたまゝ怡然として寂を示した。

彼の性格と道風について、白龍の記すところによると、「天賦寛洪安定言寡く、毀譽得失懷に宿めず」して「家風朴實邊幅を修せず」且つ「其の人を誨るや躬ら行うて導き、毫も聲色を動ぜず、機に循つて說き、問を待つて答ひ、默にして契ひ、神にして通ぜしむ。鈍根利器慈を等しくし慈を一にす」といふ風であり「出家の日より世を沒するに至るまで、衣鉢の外餘長を畜へず、書畫翫好の微物といへども、其の所在に置く」廉潔ぶりであつたというてゐる。

斯樣に卍山は寡言沈默であつたといはれるが、しかしその文はまことに博辨宏辭、直ちに例を古今に求めて、その言はんと欲するところの理據を堅固にするのが常例である。しかもそれが何の苦勞もなく滾々として水の湧き出るやうに流れ出すのだ。彼と並んで曹洞の學匠と仰がれる面山瑞方が、それについて斯ういふことを「賀二鷹峯復古大師廣錄鏤レ梓偈序」において述べてゐる。

余曾て左右に侍して其の述作を見る、毫を把ば千言立ろに成りて、少かも意を經ず。蓋し無師

智、自然智の發現する所にして、常情の得て議す可らざる者也。今一件を擧げて以て徵せむ。大師冬夜は水を銅罐に滿て繩をもつて脚爐に繫ぐ、曉に到て湯滾すれば自ら之を面盆に寫して顴面す、是れ常儀也。或る時偶々臘八に到る、例に隨て將に顴面せんとす、忽ち繩斷て湯折す。時に殿上鐘鳴て其燒香を催す。大師遽く出つ、余香に侍す、大師默して將に燒香せんとす。余白して言く、法語無き乎と。大師乃ち徐ろに唱て云く、

繩繫二罐弦一繩斷辰、熱湯覆注熱灰嗔、無レ端失却明星火、轉出劫前古法輪。

其の機に臨み、緣に應じて無上乘を談ずるの自在無礙、意を經ざることや每々是の如し。（原文漢文）

まことに臨機應變、自在無礙と申すべきである。白龍もまた廣錄の被文において、その點に言及し、

先師卍老人、平生語言、隨時應機、宛轉縱橫、自二寶鏡三昧一流出而激二揚此道一、故不レ涉二思惟一、千言立就。

というてゐる。從つてその著述も夥しいもので、白龍は、「大乘語也、閒居錄也、遼白集也、凡

八十餘卷」といひ、更らに白龍自ら集輯した廣錄は四十九卷だというてゐる。これだけの述作を後世に遺すだけでも、すでにそれは偉大なる事業といひ得るのに、更らに宗統復古の改革を完成し、幾多の門葉を養成して一派繁榮に資したのであるから、彼の名が今尙ほ曹洞の一派によつて異常の熱意をもつて崇敬せられてゐるのも、まことに所以なしとしない。

面山の「祖師墨蹟記」

月舟の門に卍山があり、卍山の門に面山がある。この二人はおそらく近代曹洞宗を通じての學匠というてよからう。卍山廣錄四十八卷と相並んで、永福面山和尙廣錄二十六卷は、わが禪宗史上において稀に見る尨大な述作である。しかしこの尨大な述作も面山の事業の全部とはいひ得ない。彼はいろ／＼の舊記を校訂して、それが曹洞宗門の玄旨を闡明する多くの鍵となつてゐる。だからこの方面に關する研究がよく屆いてゐなければ、彼の本領を發揮することが出來ぬ譯である。しかしそれは專門家のことだ。われ等門外人の、必ずしも踏み込むを要せぬ領分だともいひ得る。

月舟が死んだ元祿九年は面山十四歲の時に當る。その頃の彼はまだ僧籍に入つて居なかつた。

鄉里熊本の流長院に入つて住持遼雲和尙の得度を受けたのはその後二年經つた元祿十一年のことであつたのである。その年母が死んで、その悲しみのあまり、彼は墓前において髮を斬り、遁世を願うたのであると傳へられてゐる。

面山が初めて卍山に參謁したのは元祿十六年、廿一歲の春で、それは江戸に於てであつた。その頃卍山は、もう六十を越して七十に手がとゞいてゐたのであるが曹洞宗の嗣法改革を唱導してこれを幕府に訴へ、そのために元祿十三年以來江戸に出てゐたのである。しかしこの時は、たゞこの宗內の大長老の風貌を仰いだだけで、面山はその秋に損翁宗益に從つて仙臺に下つた。そして仙臺の泰心院に留ること三年に亙つたが、そのうち損翁が死んだので其處を辭して關東に出で、相州の老梅庵に閉ぢこもつてゐた。寶永七年面山廿八歲の時、卍山下の隱之道顯の上京に際して、これに從うて京都に上り、隱之の慫慂に從つてその頃鷹ケ峯の源光庵に住んでゐた卍山に隨待することになつたのである。

それから卍山が死んだ正德五年迄では五ケ年を剩すに過ぎなかつた。そしてその間にも面山は始終東西に行脚してゐたのである。だから卍山から親しく提撕を受けた時間といふものは、それ

ほど長い間ではなかつたかも知れない。それに彼等の間には大分年の距りがある。卍山が八十で死んだ時に、面山が三十三であつたのだから、五十年に近い年齢の差がある譯である。だからその感化を受くることの深い點に於ても、三州白龍とか、智燈玄照とか、隱之道顯とかいふ長年、隨侍してゐた人々には及ばなかつたかも知れぬ。しかし、烈々たるその好學心と宗祖道元に對する深い信仰の念とは、全く卍山と軌を同じくしてゐたので、自然、長い間沈滯獨善の風に陷つてゐた曹洞の宗派を改革して、道元の昔に復古せしむる卍山の精神と努力を最もよく繼續したものは面山であつたといつてもよからう。

二

道元に歸れといふのが、卍山の標語であり、また面山の趣旨でもあつた。だから彼等はともに道元の敎旨を集大成なる「正法眼藏」の宣布に最も力を注いだのであるが、その結果は、この祖師に對する異常なる崇敬の念となつて、苟くも祖師の道貌を傳へ得るものは、何によらずこれを敬重したのである。そしてその一端が面山に於ては道元の墨蹟に對する熱烈なる欣求の情となつ

て現はれたのだ。

面山廣錄中に收錄されてゐる祖師眞蹟に關する記文は約十篇ある。そのうちで最も早く眞蹟を拜覽した記文は第二十卷にある「拜閲永祖眞蹟記」であらう。それは正德元年、面山廿九歲の秋、若州空印寺に於て笑岩和尙の夏制を扶けてから永平寺に參詣し、それから東下する途すがら、美濃の妙應寺に數日滯在中、同寺の秘寶を住持の笑山和尙に請うて拜覽した際の記錄である。

山、便ち手ら軸を持して出で之を壁上に掛け自ら香を焚て九拜す。余も亦後に隨て拜を設く。熟々其の筆の展縮を覽るに、曾て肥後に在るの日、廣福寺の坐禪箴、流長禪院の四句の偈を拜瞻すると等うして、巧畫妙貼毫も差ふ所なし。而して紙幅濶さ一尺五寸、堅一尺有餘、文都て十行。始に永平寺の三字を大書して一行と爲す。次に細書して云。今告二知事一自今以後、若遇二午後檀那供飯一留待二明日一。如二其麪餅菓子諸般粥等一、雖レ晩猶行。乃佛祖會下藥石也。況大宋國之內、有道之勝躅也。如來曾許二雪山僧之裏腹衣一、當山亦許二雪時之藥石一矣。字都て七十五字、是を七行半と爲す。次に開闢永平沙門の六字を大書し、下に希玄の二字を細書し、八字を合し一行と爲す。名の下花押有り。祖山出す所の頂相自贊の花押と爾く一般也。（原文漢文、

以下同）

と記し、雪時、藥石を許すの措置につき、道元祖師の一山雲水に對する懇篤なる親切心に對して感佩の意を表してゐるのである。この記文は遺蹟を拜覽した時直ちに記錄したものと見へ「于時正德改元辛卯仲秋初六遊方僧瑞方謹記ニ於妙應禪寺之客窓ニ」と記してゐる。遊方僧瑞方の瑞方はいふまでもなく面山の法諱だ。

この外に、この面山廣錄廿卷には祖師の眞蹟を見るの記文が三つある。その第一は、

上州の喝禪法姪、客秋、請に應じて鉢を寫印に移して此方、余と面する毎に囑して云く、若し永平祖師の眞蹟を得て、以て辨道護身の符とせば則ち生涯の望足れり矣と。余、慕祖の深志を感じて常に之を懷に介む。今春、攝の有馬に湯醫して路浪華を經、旅宿の店主、余に告て云く、頃ろ、永平寺開山の墨蹟を販く者あり、未だ眞膺を知らず、請ふ師に就て質さんと。余襟喜して諾す。然れども未だ之を見るに及ばずして京師に赴く。翌日、跡を逐うて贈る。緘を剝て之を視れば、眞にして膺ならず、恰も鑪を出る純金の毫も怪むこと無き者の如し。恭く之を讀めば、則る般若心經の首題を釋するの語五行にして、末に雲山白公の跋を接で以て一軸と爲す。

裱背も亦備はれり。乃ち店主と價を金三鋌に議定して背奉して庵に歸り、直に中侍者をして之を禪公に贈て、以て其價を償はしむ。禪公歡抃、渴して冷泉を得、飢て香飯に値ふに異ならず。衆を集めて供養事訖て、更に余に就て因緣を記すことを求む。

というてゐる。おそらくこれは延享三年、六十四歳の四月、有馬に入浴した歸途の事件であつたのであらう。さて第二の記文は次のやうになつてゐる。

謹で永平廣錄を接するに云、天童淨和尙、淸凉寺に住して、中秋衆に示して曰、家々門前照ニ明月一、處々行人共ニ明月一、騎レ鯨捉レ月と。師、兄弟と同く三句を分て以て三夜を賞す。十六夜に處々行人共明月を頌す。不論ニ南北及東西一、五十年來乘ニ此月一、可惜上天銀桂枝、人間錯道乾屎橛と、遠孫宜しく以て甄味して父子親密の祖風を感すべき者也。余舊（ひさし）く京師宣風坊の宗仙禪寺に永平祖師の眞蹟を藏すと聞けども、因緣なくして未だ拜觀に及はず。是より先き、眞蹟と稱する者に値ふこと幾多といふことを知らず、而して十が七八は皆膺なり矣。是の故に、時に有りと聞けども、亦慢易に涉ること多し。今夏偶々京師に遊ぶ。乃ち宗仙今の主人珉全力生は舊好なるを以ての故に、特に訪て懇請す。力生卽ち威儀を具して之を壁牙に掛て軸を垂る。余、

顔を仰て一見して覺へず涙下る。香を焚て九拜す。未だ試に讀まずと雖も、亦眞蹟の疑無き事や、所謂十字街頭、白晝に親爺に撞着すといふ者の如し。墨痕九行、云く、天童古佛曾住ニ建康府一九字行清涼院一中秋示レ衆處々九字一行行人共ニ明月一今當ニ十六夜一十字一行敬拜ニ韻末一四字一行大佛小師道玄六字一行不レ論ニ南北及東西一七字一行五十年來乘ニ此月一七字一行惜矣上天玉桂枝七字一行人間錯道乾屎橛七字一行紙幅堅に一尺五分許りにして横に一尺四寸五分許り。此の偈先に錄する所にして矣、玉の兩字本錄と同じからざる者は、蓋し祖師隨意の游戯三昧、後人誤て巧拙を論ず可らず。其の大佛と稱する者は、祖山初め傘松峯大佛寺と號す。寛元四年丙午六月十五日、大佛寺を改めて永平寺と名づく。後寶治二年戊年十一月朔日に至て、傘松峯を改めて吉祥山と號する也。小師は是れ大師に對するの謙稱、法諱に玄字を書する者は、初め大佛寺と稱する際の曆號是れ寛元なるを以ての故に、蓋し元の字を避くる歟。道正庵に秘する所立春大吉、寛元五年の下に道玄と書し、河州大日寺に藏する所の波多野廣長に示す法語、寛元乙巳の下に道玄と書し、永平寺に置く所の齊粥供養の差定、寛元四年の下に道玄と書す。之に由て之を觀れば、今此の眞蹟、曆號無しと雖も亦毫を揮ふの時は寛元曆中に係る故に元の字を避けて玄の字を書す也。憶ふに曆號は天

子より出づ觸犯す可らざるの文字、今之を避る者は祖師純密の道風茲に於て彌々熙なり矣。

この記文は何時頃のことであるか明瞭でない。面山は晩年を多く京都で過してはゐるが、しかしこの文は「今夏偶遊京師」と記してゐるのであるから、この晩年の京都滯住時代でないことは明瞭である。もしそれが事實であるとすれば、彼が夏の京都に遊んだのは寛保三年六十一歳の時か、延享四年六十五歳の時かの二度のうちであらう。寛保二年には五月上洛

坂城に至つて永祖の眞蹟數品を拜見す、中に義雲和尚の寶慶記永祖眞蹟の羅漢講式の艸本あり

と「年譜」に記錄してあり、延享四年には、

三月十日庵を出でて上洛、四月廿五日、伏見に於て肥後の大守細川侯に謁見す。因に坂城に越へ、再び永祖眞蹟等を見る。

と記してゐる。宗仙寺の寺寶を見たのも、そのいづれかの際であらう。其處で今度は更らに進んで第三の記文を見よう。

客秋、余、但州より洛陽に入る。時方に七夕なり。明るを待て將に若州に還らんとす。其夕、宗仙寺の舜良力生、偶々永祖の眞蹟一軸を以て之を緇介に託して視せらる焉。余、燈下に軸を

展べ、瞥視して之を還す。尋で若州常在院の冬會に寓す。會に奥州の老宿昌山有り。話、此の軸に及ぶ。山云く、此は是れ洛下中西氏季忠が家藏する所にして、心中に師の證狀を希望する者也と。時に余謂く、但燈下隱々地に之を視る者遺憾なりと。今冬亦洛に寓す。因に季忠自ら軸を持し來て、余をして白日に之を熟覽せしむ。七言二句、二行十四字、語に言く、朝枝磊落萬年松鱗甲屈蟠百尺龍と、筆畫字の大さ四寸有餘、一點一畫、悉く奔虎怒猊の勢を具して、其の巧妙言の伸る所に非ず。伏して察するに、祖師の弱冠の頃、入宋以前の弄毫也。左傍に朱印有り、形古蠧を模す。篆は乃ち希玄なり。是れ祖師壯年の別名。余案ずるに、朝の字宜しく幹に作るべし。朝に作る者は、料るに壯年英邁の誤寫なり。奇なる哉、中西、何の處より之を得る耶、余曾て眞蹟を拜看すること幾多なるを知らず、多くは是れ細字、未だ是の如くの洪畫を見ず、實に天下之奇物也。嗚呼七寶は珍なりと雖も、亦豈に求めて得ざらんや。是の如きの眞蹟は、設ひ海を窮め山を盡すも亦求めて得べからざるや必せり矣。

これは寶曆三年面山七十一歳の時のことらしい。その前年卽ち寶曆二年の夏には、但州銀山大用寺の結制に在留すること六十餘日、說教授戒を終へて播州の書寫山に上り、七月歸庵した。燈

火の下に一瞥したといふのはその途次京都を横切つた際のことであらう。そして三年九月末また上洛淸滯寺に寓すること七十餘日と年譜に記してゐるから、卽ちその間に中西のこの幅を熟視したのだ。

さてこの際一言說明して置く必要を認めるのは面山の住庵のことである。面山沒後、彼は再び相州の老梅庵に住んだが、享保二年彼が三十五歳の時、鄕里肥後熊本の禪定寺から補席の請書を受けた。そしてその十月、老梅庵を辭して出發入洛したが、禪定寺の方の都合によつて進山は翌享保三年九月まで遲れたのである。面山が禪定に住持してゐたのは約十年であつた。そして享保十四年、彼が四十七歳の時に若州空印寺の請を受けて其處に遷住し、その後、遠州の可睡齊宇治の興聖寺等からの懇請があつたが、一切これを固拜して、寬保元年、彼が五十九歳の時、永福庵を建てゝ、其處に入るまで、空印に留まつてゐたのである。だから大阪に於て般若心經の首題五行の眞蹟を發見したのを初め、その後の二文によつて表現されてゐる事實は、いづれも空印退席後の事件なのである。

三

以上の記文によつて面山が祖師の墨蹟を如何に尊崇してゐたかは、ほゞこれを推測し得ると思ふ。一體、面山はどうしてこれ程までに墨蹟を尊崇したのであらうか。彼は宗仙寺の「不論南北及東西」の偈を見た記文の後に於て斯ういふ風に説いてゐる。

夫れ眞蹟の崇む可きは、蓋し全身と異ならざるに由て歟。何んとなれば今此の一偈や、妙旨の不可思議は意業の所蘊也、章句の超脱幽艶は口業の自在三昧也、筆畫の鳳翥龍蟠は身業の運轉活動也。三業圓融して一轄に彰はる。故に此軸を展開すれば、祖師大人の相、巍々堂々煒々煌々、眉間の毫光、兒孫を覆蔭して、億千萬歳窮盡あることなし。以て瞻仰禮拜すべく、以て恭敬供養す可し。

要するに祖師の人格が、さながらに墨蹟に顯現するから祖師の全身を眼前に髣髴することが出來る。これがその墨蹟を敬仰すべく、尊重すべきゆゑんであるといふのが、面山の信仰であるのだ。

斯様な信仰をもつてゐたのであるから、彼はしば〳〵祖師の眞蹟を拜見する夢を見たものらしい。面山廣錄にはその記錄もあるのである。

元文丁巳の春三月二十八の曉、大開靜の後、余、僧堂より方丈に歸り、暫く繩床に倚て眠る。夢に忽ち一僧あり、二軸を持し來て余に告て云く、此は此れ永平祖師の眞蹟なり。師に就て之を質す、是なりや不や。余、感喜して先づ一軸を展て之を視れば、祖師の墨痕恍たること白日の如し。更に一軸を展るに但是れ僞筆以て采るに足らず。余、其の僧に告ぐ、此の軸は眞なり、彼の軸は僞なり、黑白分れたり焉と。言訖て乃ち獻粥の殿鐘を聞て夢醒たり焉。時に余憶ふ。此の日は是れ祖師示寂の辰にして、夢を祖筆に感ずるや、定めて偶然に非ず、且つ喜くは夢を原くるあらん歟と。淨粥を献じ、燒香禮拜するに及で、感激胸に逼り涙下て襟を沾す。具に之を待藥に話る。翌日三州龍源の萬光力生忽ち至る。蓋し余が新に僧堂を建てて古規を再興するを隨喜するの道悃なり。余や驩ぶこと甚し。晩間、方丈に就て點湯藥石す。因に光公話て云く永平祖師の眞蹟一幅、尾州某寺より託して至る。乞ふ師一見して、爲に眞僞を辨ぜよと。余や之を聞て愕然として潛に昨夢の妄ならざるを感じて、具に纒末を話る。光公云く、尾州向に二

幅あり、一幅は傳て謂ふ僞筆なりと、是の故に焉を措て、唯一幅を持し來る耳。今、夢に因て之を考ふれば、持來する所は頗る眞ならんのみと。乃ち共に沐浴して威議を具へ、高く壁牙に掛け、香を焚て之を拜視すれば、筆畫の展縮、實に眞蹟たること疑無き者にして、其旨は護法を善神に祈るの願文也。謹で實叉難陀所譯の大乘四法經を按ずるに、文殊大士、善勝天子の爲めに種々の夢を說く中に、得陀羅尼の夢、得三昧の夢、得大人相の夢等あり。則ち我が今の奇夢も亦豈に其の種々の中の隨一に非ることを得んや。

これが面山の夢に祖筆を見て、それが直ちに現實となつた奇瑞の記事だ。蓋し彼は、志の在るところ、必ずその應報あることを深く信じてゐたのである。彼は喝禪力生のために、浪花に於て般若心經首題五行の眞蹟を得た記文中に於て左のやうに論斷してゐる。

因て憶ふ、日本洞上の伽藍、畿道に碁布すること凡そ幾萬を以て數ふ可くして、其の席主たる者は、代々皆祖師の遠孫也。然れども室中、祖筆を寶秘するに至ては、僅に三十餘刹に過ぎず但謂ふ、滅後五百年を經が故に其の眞蹟なる者、火災水害、世上に有こと無しと。余謂く、嗚呼豈に有こと無からんや。蓋し仰慕希求に實無きが故に、因と緣と感應せざる耳、苟も感應せ

ざれば覿面千里。今、浪華二十刹の洞宗の如き、未だ曾て其の地に此の眞蹟あるを知らずして、遐く北國の僻壤に光臨する者、因緣の感否乃ち其の證なり。是を海底の犀、天中の月に酬ひ、地上の象、雲外の雷に答するに譬ふべき也。

斯くの如き信仰を懷いて、斯くの如く祖師の遺墨を憧憬してゐたのであるから、これに對して少しの感應もないといふ道理のないことはいふまでもあるまい。だから面山は早くから、しばしば祖師の墨蹟を發見し、多くこれを奉持してゐたらしい。年譜によると享保四年三十七歳の時卽ち熊本の禪定寺に進山した翌年に當つて「南鄕含藏寺に赴て、因に永祖眞蹟の坐禪儀の跋一幅を得たり」と記錄してゐる。それは遺墨を所持するに至つた最初のものではないであらうか。そして廣錄第廿一卷に、

不慧、曩祖永平の眞蹟一軸を室藏して自ら之を秘珍するや晉に蘭亭の古帖に擬するのみにあらず。今秋、請に依て、妙解老和尙の尊眸に備ふ。和尙乃ち稍匠に命じて、舊裝裱の鄙野なるを剝去して、別に綾繡を用ひて一新す。又、墨江不凋居士をして之が軸を作らしむ。調度旣に畢て、乃ち向陽座元に命じて、以て緇介に附して之を賜ふ。不慧、盥手著衣して之を壁上に掛

け、香を焚て拜受す。熟見るに、其の故を替へ新と爲す時は、恰も蒼龍の海を出でて蛻し、玄豹の霧を披て變ずるが如し。一室の中翻然として觀を改む。誰か之を曩祖の全身、忽ち弊垢の衣を脱し、珍御の服を著と謂はざる可んや。不慧、雀躍鼈抃、增す〳〵老和尚護法の大恩、偏に林下の乞士に覃ぶことを感謝す。

というてゐるものは、恐らくこの坐禪儀跋の一軸のことではないだらうか。此處に妙解老和尚というてゐるのは桂隱和尚といふ老僧であつたらしく、當時しば〳〵面山をその寺に招請して說法講演せしめてゐる。

更らに彼は、永平寺傳來の開祖墨蹟を手に入れたことを物語つてゐる。それは永享二年彼が六十三歲の時の話だ。

余、曾て延享二年、乙丑の孟夏、勅特賜大智慧光禪師の篤招を得て、越の祖山に上り、單を孤雲閣に掛て、在留すること幾んと五十餘日、或る時は自ら妙高堂に謁して古今を商略し或る時は禪師孤雲閣に來て、以て東西を閑談す。因に余に謂て云く老人曾て多く本山室內の法寶を看しや。余白す、前年、圓成實性禪師董序の時、天童付屬の嗣書を拜見す。其の時には在留僅に十

七日、命を蒙て吉祥艸を撰して數多を拜見するに暇無し。者回若し許容を蒙らば生涯の禪悅也。伏して乞ふ許せよ。禪師云く、豈に之を惜まんや。乃ち衣鉢に命じて太櫝一箇を舁かしめて到る。衣鉢云く、古筆底、束ねて此の內に在り、緩々に探索して尊意に任ぜられよと。余歡喜餘あり。閑暇を得るに隨うて則ち之を探る。櫝內に多く古筆、紙片亂雜して綴ぢざる底あり。余禪師に白して言く、某甲、多年、寶慶記を整んと欲す、今櫝內を尋ぬるに未だ得ざるは如何。禪師云く、室中、從來寶慶記無し。余曰く、櫝內亂雜の間、祖師の眞蹟あり、若し一二片を賜はらば、寶慶記一册を書寫して以て代ん。禪師云く、大に好し。卽ち紙片數幅を賜ふ。

卽ち面山は永平寺に於て大匱一杯の古筆中から道元祖師の墨蹟を選び出して、そのうちの數幅を手に入れたのである。なほこの文中に出て來る大智慧光禪師といふのは、永平第四十二代の江寂和尚、圓成實性禪師といふのは、第四十世喝玄和尚であるが、この喝玄時代に登山したといふのは享保十九年面山が五十九歲の時のことで、その際、囑を受けて「吉祥艸」を撰し、「永平夜話」を考閱したと年譜に出てゐる。

四

面山が祖師の墨蹟を所持した數は相當のものであつたらしい。「余弱冠より祖師を信慕して今に至て五十年、日々に頂戴奉覲せずといふことなし。是の故に不思議にして眞蹟を感得すること但に十度のみにあらず」というてゐる程であるが、一方において斯樣に祖師の墨蹟を發見して、これを收集することに努めたとともに、一面にはまたよくこれを他人に頒つたやうである。それ等の記文も廣錄中に大分ある。まづ第一に、永平寺で寶慶記と取り替へに手に入れた數片中の一幅を周防泰雲寺の靈源和尙に贈つた。それは

大論第七釋二佛放光一中、問足下乃至肉髻、一々皆放二六萬億光一、此猶可レ數。以二此光一照二三千國土一、尙不レ可レ滿何況十方。答身光是諸光之本、從レ本流二出無量光明一、如二加羅求羅蟲其身微細得レ風、轉大乃至亦能呑噉一、一切光亦如レ是、得二可レ度機一、轉增無レ限、今亦如レ是、觀力未レ成、所照未レ暢、觸レ境成レ照、其用轉明、諸法生故般若生、乃至非レ生、非二不生一、故借二求羅一以喩。

といふ百三十餘字を書したもので、

此の一片を裱褙し、之を衣襲に納めて身を離さゞる者既に十有七夏

というてゐるから、隨分祕藏してゐたのであらう。前にもいうた通りこれを永平寺で手に入れたのが六十三歲であつた事實から計算して見ると、これを靈源和尙に贈つたのは、面山八十の頃に該當する譯だ。

書林小川方敎は余と三十餘年以來の親厚にして、專ら祖師に係るの書を刊行す。今夏、且つ余に從て菩薩戒を受く、其志嘉みすべし、故を以て此の一幅を付して其の家を祝する者なり。

というて贈つたものは、

劉子云、山抱レ玉而草木潤焉、川著レ珠而岸不レ枯焉。淮南子亦云、泉有レ珠岸不レ枯。山海經云、高山多二青碧一。

といふ三十九字を書いた一幅であつたといふ。この小川方敎とは恐らく京都の書肆小川柳枝軒なのであらう。この柳枝軒には、面山が單に著述の出版についてばかりでなく、他のいろ〳〵の用事も賴んでゐたらしく、またよく物を預けて置いたやうなことも、種々記錄されてゐる。

以上の二文は廣錄第十九卷に收められてゐるが、二十卷にもまた同樣なものが二文ある。その

一は參州伊奈村東漸寺の東堂にゐた覺仙力生に南獄所示馬祖之一偈の眞蹟一軸を贈つたことを記して居り、第二は、面山が、その高足衡田祖量に百三十餘字の細書一幅を贈つたことを記してゐる。此處には、その後の分に關するものを收錄して置かう。

案ずるに、夫れ筆痕は禪祖頗る多し矣。今、虛堂、一休、夢窓、春屋等の若きは、多く人に翫ばれて、世に榮耀ある者の如し。然れども徒に酒客笑談の席、茶賓閑話の室に賞稱せられて、未だ身を淨めて恭敬し、香を焚て尊重し、在世行持の道德を仰慕して以て當來の無上正等菩提を發起するの質的と爲すことを聞かざる也。爾くの若きは其の價を貴うするの裱褙は蜀錦を裁ち、軸は荆璧を磨き、箱は燕金を鏤むと雖も、亦尋常珍玩の器と齊し矣。般若の因緣に於ては亦遠からずや。吾祖の眞蹟を遺すや彼と大に異れり、酒客は未だ夢にだも有ることを知らざるなり、茶賓は知と雖も翫ばず。唯無上心を發する遠裔のみありて、偶々一字也、一句也、一行也、一幅也を得れば、秘惜愛護して、以て價直、龍女の寶珠と同じと爲す、彼の十五城は何ぞ屑とするに足らんや。是の故に、祖師に葵藿羹牆するの眞實なるに非るよりは、未だ値遇頂戴の勝緣を感得し易からざる也。何となれば眞蹟は是れ全身と異ならざるを以て也。嗚呼希有なる哉。

斯く記して面山は、衡田力生が「常日、高祖を仰慕すること余と轍を同うす。余、其の深志を感ずるの故に、盤若心經を釋するの教示一百三十餘字の眞蹟一軸を以て贈る」と記してゐるのである。この一文によつても、彼が如何に祖師道元の眞蹟を仰慕敬重したかはこれを推想することが出來る。そして面山のこの感得說こそ、墨蹟その他に對して、ひたむきな憧憬心をもつものゝ屢々經驗する心境であらうと思ふのである。

五

面山の所持してゐた高祖遺墨が洞宗一門に尊重せられてゐたことを記錄したものに「幽谷餘音」中の「永平遺墨記」がある。「幽谷餘音」は信州長谷寺の千丈實巖の述作を集めたもので、洞門に於ては相當に著名なものとされてゐる。さてその「永平遺墨記」には斯ういふ風に記錄してゐるのである。

若州空印寺面山師、倭歌者流の稱する所の古今集なる者一部を得、永平の眞蹟と稱して疑は

ず。人も亦師の頗る賞鑑あることを知つて之を信ず。是に於て一部の古今、裁斷して一派の名藍及び緇素の就て請ふ者に頒播して殆んど將に盡んとす。巖が持する所の如きは、乃ち師の法嗣、越後の產衝天和尙、師の語錄を刻して京師に寓せし時、深く巖も亦歎艶已ざることを察して、特に杖履を逆旅に枉て、而も手から齎らし來て授けらる。卽ち藤原元實が歌にして住吉戀忘草の語あり。熟其の書を視るに、國字なりと雖も、絕て倭習の人をして厭惡せしむるの態なし。其の永祖の眞蹟たること、認ふ可らざるに似たり。縱へ永祖に非ざるも、亦必ず名公卿の筆ならんこと審なり矣。或の曰く、永平人を誡むる時は曰く、倭語の華麗に酖ることなかれと。而して自ら賦する所の歌、多く世に傳へて之れあり。又曰く、天文、地理、倭歌等の書を置く可らずと。而して自ら古今集を嗜む。嗜んで置かず、手から之を寫すに至るは何ぞや。曰く、是永平有時之眼目也、是に參究せば、全部の正法眼藏と雖も、思半に過ぎん。其人唯々す。因て從ふ所を記して以て後に貽すと云。

千丈は古今の一首を得て、「永祖の眞蹟たること認うべからざるに似たり」と、絕對にこれを眞であると斷定することには、多少餘裕を殘してゐるが、しかし、それを得ることを翹望した事實

は否定してゐない。兎も角、この一文によつても、祖師の墨蹟鑑賞に對する面山の權威が、洞宗一門にあまねく認められてゐた事實を、容易に推測し得るであらう。

最初の曹洞僧史傳の著者

長崎の晧臺寺は曹洞宗に於ても、著名の寺である。最初洪泰寺と稱したがその重興一庭融頓が寛永十九年、了外廣覺禪師の號と紫衣を賜はるに當つて、海雲山普昭晧臺禪寺の寺號をも併せて御下賜になつたのである。それから二代雪山鶴曇、三代月舟宗琳、四代蒙山玄光、五代逆流禎順を經て六代湛元祖澄に至つた。祖澄は普通自澄と署名してゐる。貞享元年正月廿四日から元祿八年まで住持を續けた。在職十二年、元祿十二年八月廿五日に示寂と傳へられてゐる。

この晧臺寺の住持は代々相當な名僧であつたやうだ。重興の一庭はいふまでもなく、三代の月舟四代の蒙山（普通獨庵を以て知られてゐる）それから十一代には古岳日峻、十五代には天苗祖育、十八代に漢三道一、二十代に金華俱胝、二十一代に黄泉無著等があり、それ〴〵その當時においては、一方の禪將として雄飛したものらしい。湛元も亦これ等の間に伍して、少しもひけをとらない學僧であつたらうと推想される。

彼は曹洞宗最初の僧史と目せられる「日域洞上諸祖傳」を刊行したことによつて不朽の名を留めてゐるのである。それは元祿七年に京都の書肆秋田屋淸兵衞方から刊行された。

彼は卷頭の序文に於て、

吾永平元禪師截レ海入レ宋、直得二大白淨和尙心印一而東歸、初闢二曹洞正宗於日域一。自後燈々續レ焰、能爲二人天眼目一者不レ可二枚擧一。然年代寢邈而傳記遺佚、難レ識二其行實之大全一。故雖二近世有二僧史之所レ錄僅不レ過二十員一耳。豈可レ不レ惜乎。余不レ揣二顓蒙一、濫二續貂之志一者久矣。或蒐二尋之陳篇一、或咨二質之遺老一、凡得二先德之語句行實其有レ所レ據者一、則雖二一言一行一輒隨而採二收之一、合七十員、離爲二二卷一、曰二日域洞上諸祖傳一

と、その述作の所以を記し、更らに卷末の跋文においては、

予旣撰二日域洞上諸祖傳一而成焉。有レ客謂曰偉哉是擧也、夫撰レ史之難自レ古所レ難而僧史爲二尤難一也。本朝洞上諸師有レ傳上二僧史一者僅不レ過二數員一、志士常爲レ之太息。今此書初出、可レ謂出二遺珠於滄海一、起二往哲於九原一者也。然而問令下彼殷々盈レ耳之異跡一於二此書一則勿レ聞、昭々在レ文之奇行於二此傳一則無レ覩者、是遍探之未レ盡、撰述之未レ備乎、爲レ師疑レ焉。曰予素寡聞淺識安

敢求レ稱ニ僧之董狐一乎、惟自慨下先德之實踐隱ニ沒於歲月一而遂失中其傳上故不レ思ニ謭陋一、探レ遠覔レ近而幾乎泛觀ニ諸師之行跡一、其間一人之傳而有ニ數本之不同一、有ニ多人之異聞一、各順レ所レ習以爲レ眞而不レ能レ辨ニ金鍮一、豈得レ分ニ珉玉一。故予今總ニ會之一、挍ニ讎之一、以擧ニ明々之實狀一而措ニ區々之浮言一、是憎ニ紫之亂一レ朱、恐ニ莠之害下苗也。……大凡撰レ史之任在ニ取レ大略一レ小、擧レ要措下泛者、攬ニ之歷代之史一而可レ考焉。若聞而記レ之、見而書レ之則豈徒丘山之多而已哉。人將レ不レ堪ニ其煩一也。

其悉筆審擧而不レ失ニ折衷一則推ニ之後作者一云

と、著述の用意を述べてゐるのである。この「日域洞上諸祖傳」によりて、曹洞宗の僧史に初めて開拓の鍬が入れられてから、その後續々としてこれに倣ふものが現はれた。約廿年前後を隔てた寶永正德の間には、備陽西來寺の德翁良好が、「續日域洞上諸祖傳」を出し、享保に入つてからは、良高の高弟藏山良機が「重續日域洞上諸祖傳」を出版した。そしてこれ等の諸祖傳とは別に、新に曹洞の僧史を集大成したものと目されてゐる「日本洞上聯燈錄」は享保二十年に芝の青松寺第二十代の住持嶺南委恕によつて開版されたのである。

これ等の僧史の著者が、いづれも當代の學僧として推された人々であつたことはいふまでもな

い。なかんづく德翁良高は、德川時代における曹洞復興の偉僧と稱せられた月舟宗胡（晧臺寺の月舟宗琳とは別人）の高弟で、卍山道白、雲山不白と並べ稱された一人である。彼はその著の卷頭に序した中において、他の佛教各派の史績がそれ〴〵研究され、顯耀されてゐる中に、曹洞宗のみが甚だ不明確であることを述べ、

獨吾洞門專事ニ持撿一、疎ニ交鉛槧一、故從上來可レ傳者若レ有若レ亡、不レ可ニ得而詳一也。先有ニ湛元澄公也者一、竊拾ニ荒散蕩逸之餘一、以著ニ洞上諸祖傳一、亦勤矣

と自澄の勞作を賞揚してゐる。一代の學僧卍山また良高の著に序して、

洞上宗派、恨少ニ纂錄一。但及ニ當代一、晧臺湛公、著ニ述洞上諸祖傳一、梓ニ行于世一、有レ年レ于レ茲。而今西來高公、勉續ニ其傳一、分爲ニ四卷一、總得ニ八十余師一。嗚呼高公之用心有レ輔ニ于宗門一者不レ爲レ不レ多。夫人能弘レ法、法不ニ能弘下人。而法門之興衰、關ニ人之隱顯一、則縱顯ニ一人一、其利不レ尠、況至ニ此多一乎

というてゐるのである。これは德翁の著述に對して賞讃の辭を呈してゐるのだが、しかしそれは直ちに移して湛元に及ぼすことが出來るものであり、あるひは、最初にこれに著手しただけ、む

しろ湛元に對してこそこれを言ふべきものであるとも見做され得る譯である。これ等の事實によつて湛元の著述が、當時の曹洞宗門に、如何なる印象を與へ、如何なる影響を及ぼしたかは容易に推測し得るというてよからう。

斯樣に、湛元は曹洞宗の先輩を顯彰することに功績をあげたが、しかし彼自身の事績についてはあまり多くの記錄が殘つてゐない。勿論晧臺寺には歷代住持の行狀記があるといふから、それを見たならば、あるひは詳細なことがわかるかも知れないが、佛敎大辭典とか佛家人名辭書とかいふ種類のものには、その傳記がないやうだ。筆者の見たところでは、長崎市史、晧臺寺の記述中に散見するものがまづ最も詳細であるやうに思はれる。

一體晧臺寺の住職は、長く長崎に居て其處で死んだものが多いやうだ。たゞ四代の獨庵玄光と十八代の漢三道一とは在職も短く、晧臺寺を退いてからも、諸方に活動してゐる。獨庵は晧臺寺に留まること六年、その後を受けた逆流は在職十年で、經營頗る努めたものらしく、今でも同寺內ではこれを中興と景仰してゐるさうである。そして元和三年、退鼓を打つて席を湛元に讓つたのだ。それから五年經つた元祿元年、本山總持寺から湛元の許へ、同寺輪番住持たらんことを請

うて來たが、湛元はこれに對して、元來晧臺寺が幕命によりて建立經營されし寺院であり、且つその住持の任命は、寺社奉行から現住職の意見を徵し、曹洞宗の行政的最高機關である大本山及び關三ケ寺（下總の總寧寺、同大中寺、武藏の龍穩寺）の意向を聽いた上、老中間の評議によつて決定するといふ順序を經るのであるから、猥りにその寺を去るのは、公命を輕んずる形跡があるとの理由を以てこれを拒否したのである。これは湛元の一見識であつたというてよいかも知れない。兎も角この事があつて以來、晧臺寺の住持は、本山の輪番に應じない慣例を作つたといふことである。

晧臺寺には湛元自筆の伽藍造營記があり、且つ彼の撰した碑文が經塔上部壇上に安置した觀世音菩薩の石像壇石に彫刻されてゐるさうである。彼はまた同寺の梵鐘改鑄を企てたものらしい。それは左の文によつて明瞭である。

改鑄海雲山洪鐘引

先師湛元和尙每謂、鐘之爲レ物也、以ニ音聲一爲レ用、以ニ震發一爲レ德、苟音聲之不レ徹則、無レ所レ施ニ德用一、所ニ以警策之癈而、宗綱之墮一也。如ニ彼秦椒而失レ辛、甘草黃檗之喪ニ甜苦一、無ニ以稱一

焉。當山樓鐘、不レ震如レ擊二瓦缶一、蓋昔年工之未得也者乎。於二吾之懷一有二戚々一也。玆臨二示寂之日一、盡以二衣鉢之餘資一屬レ予曰必改二鑄樓鐘一。於レ是、予擇二鳧氏之習而精者一、命レ之其響想將レ有レ稱二先師之情一、乃彫二舊記於前一、以傳二前代之美一、錄二新文於後一、以揚二先師之美一、庶幾鳴二千歲閒寂之道於二今日一、震二萬世不墜之令於二沙界三寶一、以レ是永盛二國家一、以レ是長榮二幽顯一、但霑二大利樂一云

嘗

元祿十四年辛巳春二月吉旦

當山第七世了潭叟道寂謹誌

先潭和尙奉二先々元和尙遺命一、雖レ有二新銘一、無常之世、不レ待二鐘成一、又示滅矣。予補二斯席一、今秋洪鐘新成、樓上則金氣相應震二發天地一、遠近隨喜、展轉之功不レ可二思議一焉。且閱二一庭和尙之舊銘一、正與二今歲一同二其支干一。予云、一切世間物、皆有レ數、或成、或壞、或始、或終、今古皆然、是永亦平和尙所謂時節因緣、佛性刹那、前後圓成者也。予欲二記レ之胎二後世一。書以添レ銘云

元祿十五年壬午秋七月穀旦

當山八世重關叟亮道謹誌

この鐘銘によつても明瞭なる如く、舊洪鐘は一庭時代に鑄造して、それには一庭の銘が刻み込まれてゐたのである。しかしその鑄造はあまり精巧でなかつたと見へて、鐘聲が頗る惡く、まるで瓦土で出來たものゝやうな聲を發するのみなので、湛元は是非それを改鑄しようと心がけてゐたのだ。が、それは希望のみで遂に實現し得ずに死に直面するに至つたので、彼はその繼嗣了潭和尙に遺言し、自分の貯蓄若干を授けて、その遺思を果たすことを遺囑したのだ。了潭はこの遺命を奉じて、鑄工を撰んでいよ〳〵その事業を完了しようとする中途において病沒し、更らにその次の重關の時代に至つて漸くこれが完成したといふのである。しかもその完成の干子が、一庭が前の洪鐘を鑄造した年と同じであつたので、それもこれも皆因緣だ、と重關は觀じたことを記錄してゐるのだ。

湛元の後を嗣いだ了潭和尙は、晧臺寺に移る前には、長州の大寧寺に居た。大寧寺も曹洞宗では由緒のある寺で、一時はその一派の本山であり、其處の住持も著名な僧侶によつて繼承せられたものである。

湛元は書畫もよくしたものらしい。私は此程たま〳〵彼の草坐の釋尊像に「三身具足、四智明

圓、群生慈父、笠土大仙」と四言四句を題した小さい軸を手に入れて愛藏してゐる。實はこの小研究を試みたのも、この小軸を得たために、彼の事績に興味を感ずるに至つたからである。

良悟下三代記

（良悟——無隱——夜雨和尙）

一

近代の曹洞の緇流には、比較的に翰墨の僧が少いといはれてゐる。月舟は文學に長ぜずと行狀記に傳へられてゐるが、しかしよく偈を作り、文字を書した一人で、曹洞での「書き手」の一人だともいはれる。卍山、面山はいふまでもなからう。降つて尾州萬松の珍牛、三州香積の風外等に至つては、逸格の畫を以て普ねく知られ、信州長谷の千丈實巖の如きまた彼一流の達磨を以て著名であるが、全國の曹洞派が二萬の寺院を擁して住僧數の如きも、當然臨濟派よりは遙かに多數であらうと推測せらるゝに拘らず、その方面に於て一般に知られてゐるものは、寧ろ臨濟、黃檗の何分の一であるともいひ得る。斯樣に見て來ると、曹洞の一派に翰墨僧少しといふ世評もあ

ながち虚傳でないといひ得るであらうか。

この曹洞派のうちに良悟下と稱する一派がある。加賀の寶性院、長州の大寧寺等を中心として山陰、山陽に勢力をもつてゐた一派であるやうに推測されるが、この一派は、曹洞宗の中でも比較的に風流僧が多かつたのではあるまいか。小くとも禪余楮墨に親しむといふ風が多かつたやうに思はれる。それは彼等の墨蹟が比較的に多く今でも殘つてゐるからである。

この良悟下といふのは、無得良悟の流れを汲む一派を指すのであつて、良悟の下には玉洲、無産、無聞、斷崖、無隱等があり、玉洲、斷崖は無得と前後して早く世を去つたが、無隱は無得沒後二三十年も長生したばかりでなく、佛者中の儒を解する者として、廣く世に推稱されたのである。無隱の下に夜雨和尙と綽名された蘭陵越宗があり、斷崖の下に萬里虎關があり、更に虎關の系統を引いた佛海慈舟、甘雨爲霖等、それ〴〵その當時における一方の法器であつたらしく、それ等の遺墨が比較的多く散在してゐたやうだ。

元來良悟は黃檗の影響を最も深く受けた一人である。彼は若うして木庵、潮音等に參じて、その下に實參實究した。およそ近代の禪宗において黃檗ほど翰墨を尙んだ宗派は少い。開祖隱元は

いふまでもなく、木庵、卽非、獨立等々、黃檗の僧といへば、詩を作り、畫を描くことが、最も重要なる消閑の事業であつたのではないか、と思はるゝ程その遺墨が多い。おそらく良悟も亦この風を感染したのではあるまいか。そしてそれが、彼の兒孫にまで影響したのではあるまいか。

二

無得は寬保二年五月二十三日示寂、壽九十二と傳へられてゐるから、年代を繰つて見れば慶安四年に生れたことになる。その年は卍山十六、德翁三歲といふ風で、彼と前後して曹洞復興の中心となつた面々はすでに彼の前に生れて來てゐた。そして隱元來朝の承應三年はまさにそれから四年後に當るのである。彼の生れた地方は東北の會津で俗姓山口氏であつた。十四歲にして天寧寺といふ地方の寺に入つて落髮、それから江戸に出で駒込吉祥寺に留まつて修業した。恰も其處に德翁良高が居て、話がよくあひ、相共に切嗟琢磨した。二十前後になると、良高と約束して共に吉祥寺を出で、上國に遊び、黃檗に上つて木庵に見え、また松隱堂に隱居してゐた隱元を禮した。しかし當時、黃檗に集まつて來た雲水があまりに多かつたので、彼は年少だといふ理由を以

て桂搭を拒絶せられた。其處で今度は上州黑瀧に木庵門の潮音道海を訪ね、良高と共に其處で血の出るやうな修業をしたのである。

ある時の如き、餐はず寢ねず、死坐七日、一夕定中、豁然大悟した。則ち走つて方丈に入ると潮音問ふ、「我がこの方丈、十方路なし、爾、いづれの處よりか來る」無得曰く、「和尙の鼻孔裡より來る」潮音「老僧、鼻孔なきを奈何せむ」無得「正に好し、某甲往來の處」潮音「近前來、痛く一頓を與へむ」無得「羅籠不住」と走り出づ。潮音、後から「爾に三十棒を放す」無得「劍去る久し」潮音「まさに狗口を取るべし」と、時に彼二十三歳。この冬は潮音の室中ではまことに收獲の多い年で、「堂中の英哲十八人、各々精進して後先省あり」と稱せられてゐる。

それから木庵が白金の瑞聖寺にやつて來たので、潮音に從つて其處に暫らく留まり、更らに黑瀧に歸つてなほ修業を續けた。一夜、月下に坐して恍然內外を忘失、卽ち偈を作つて潮音に呈した。

萬里乾坤一色天、夜明簾捲六窓前、等閑坐破蒲團月、不レ覺渾身光璨然。

潮音はこれに對して「爾、工夫熟せり」というて、深く證明したとのことである。

その後、無得は月舟、鐵心等曹洞の先輩を訪ね、また獨照、獨湛等黃檗の諸老にも參じた。特に月舟が宇治田原の禪定寺に退隱して居た折にも、再びその許に參じて偈を呈した。

峯頂有レ雲洞有レ泉、普門每見接二來賢一一輪推上補巖月、照破閻浮萬劫天。

よつて月舟も左のやうに之に和した。

眉間三尺古龍泉、法戰場中誰敵レ賢、轉處分明轉將去、凜然士氣獨衝レ天。

元祿元年、武州松福に出世し、關東の道俗を化してゐたが、同三年加州實性院の明州珠心が彼を招いてその後を嗣がしめた。それは無得が、以前實性院の前住海翁巡浦の弟子となつてゐたからである。かくて無得は實性院の第四代に住した。實性院は大聖寺にある禪院で、大聖寺侯の菩提寺であつた。此處に住持すること十餘年、四十頃から六十前後まで續いたやうだ。しかし其間、元祿七年からは、田院して耳聞山の野水庵に移ると傳へられてゐるから、實性院を離れ郊外に草庵を建てゝ其處に起居してゐたのであらう。また彼の高足無隱の「無孔笛」中に、

余侍二本師得老和尙于武之東禪一者三年一月告レ辭奉レ呈二此偈一

死關緊閉倚二山丘、推二出白雲一不レ許レ留、從レ此江湖何處好、撈レ蝦摝レ蜆學二巖頭一。

といふ作がある。卽ち彼はそれから再び關東地方に錫を留め野州の補陀寺、武州東禪庵等に住したが、寶永八年頃からまた閑雲野鶴の身となつて諸方を經廻り、關東、北陸の各地に遊說した。そして長州大寧の招請を受けて其處に住持したのは六十八歲の年であつた。

無得が大寧に進山開堂したのは享保三年十月であつた。そして同八年十月には門下の玉洲海淋に後を讓つて、自らは石州の檀越恒松氏が建立した瑞巖寺に退隱してその第一祖となつた。翌九年には玉洲が新に法泉院を山口に建立して彼の旋駕を請うたので、その地名の山口が自分の俗姓と同一であるといふので甚だ氣に入り、其處に歸つて終焉の地とした。それから十八年、寬保二年四月に至つて微恙を示した。それまでの間に、彼の門下はその都度しば〳〵壽筵を開いてゐる。「無孔笛」には、その際の賀詩が多く揭載されてゐる。左の一首は元文五年九十の誕辰を祝うたものである。

(上略)是年雲山魔障退散、法兄產公徙補二虛席一。于レ是壽域之榮、法運之盛、闔門道侶莫レ不二皆讃祝一矣。想夫自レ非下護法善神專加二威力一而檀越賢侯益傾中歸心上焉能得レ然哉。不肖道費先レ節兩月、趨レ筵致レ祝、乃見、大仙慈容殊特矍鑠、泉聲山色等爲二歡呼一肅呈二伽陀一篇一

用表二慶筵之魁一

蹈レ雪北來祝二誕辰一、入レ門氣象覩二愈新一、一華瑞現二三千歲一、百壽篆餘二二五春一、德臘共高齊二郝老一、世難永避傚二秦民一、慶筵特喜非二人事一、瞻仰金剛不壞身。

此處に雲山というてゐるのは太寧の山號瑞雲を略したものであり、法兄產公とは獨產和尙を指すのである。この年、獨產が大寧の虛席を補うたものと見ゆる。道費は無隱の法諱であり、その頃石見の圓光寺の住持であつた、彼は誕辰五月二十二日に先立つこと二ケ月に、まづ太寧に來たものと見ゆる。卽ち石見地方の三月はまだ雪があつたのを踏みわけて來たというてゐる譯である。

さてこの元文五年から寬保元年を經て、同二年にも亦何時ものやうに無得老師の誕辰が祝はれたのである。そしてその祝筵の翌五月二十三日に、彼が門下の人々にいふには、

老僧今年九十二、且つ昨日誕辰、是れ壽亦足り、祝壽亦足れり。今、當に往くべし。汝等、我が滅後に於て專ら法に依て住し、流俗の阿師と爲ること勿れ。遠方に在る諸弟子に、其れ亦此を以て之を告げよ。

と。自ら擧火語を示して曰く、

自以二火光三昧火一燒、彰二沒後大人形、請看烟散雲收處、獨露滿山未レ了レ青。

また辭世の偈を唱していふ。

毘嵐吹起、崩二倒牆壁、閃電激空、大千拂追。

かくてその日のうちに長い生涯を終つたのである。嗣法の門下六十二人。語錄の外に、洞上佛祖源流贊の述作がある。それは和尙が八十八歲になつて、視力が衰へたため口述して筆記さしたものだといふことである。

三

筆者は無得についで無隱道費の事蹟を記さうとして、一の疑問に逢着した。それは彼の生年及び歿年に關する疑惑である。禪宗史及び日本禪宗年表等には、享保十四年歿壽九十三となつてゐるのである。それは彼の「行狀」に基づいた記錄であるらしい。筆者は未だその「行狀」を見てゐない。しかし享保十四年とすれば、無得の死以前であり、現に無得の九十の誕辰を祝ふた元文

五年よりも十一年以前となる譯で、當然その時の賀詞の如きは無隱の作から削除されねばならぬ筈である。のみならず、この賀詞の收錄されてゐる「無孔笛」は無隱最初の著述で、その後「心學典論」「雜華集」「金龍尺牘」等が、彼の生前に於て版行されてゐるのである。だから少くとも、元文五年よりもなほ何年か生きてゐたことは明瞭だというてよい。

「無孔笛」卷の二に「重遊二越濱一并引」の一篇が收錄されてゐる。その引に、

長越濱在二府城北十餘里一、爲二北海第一佳山水一也。而長主自レ古置二狙公一、鏃二狙數千箇一、城中人不レ問二四時一絡繹遊レ此。蓋長主之園囿、而與レ民同二其樂一者也。庚申春、予有二周州之行一歸程取二道於長城一、因與二二三子一同遊二濱上一、爲二客路一日之棄一。嗚呼長予父母之國也。而初予見二此濱一也生僅三歲之時矣。乃今齡已五十有三重過焉。則可レ無二感槪一乎、因乃率然賦二此詩一

と記してゐる。卽ち彼が庚申の春周防に行つた歸途、長州の府城に廻つて越濱を再訪したのであるが、元來長府は彼自身の故鄕であり、最初この越濱を見た時は僅かに三歲の時であつたのに、今はもう五十三になつたと回顧して感慨を洩らしてゐるのである。ところで、この庚申の春といふのは一體何時かとしらべて見ると、それは元文五年に相當するのだ。おそらくこの時の周防行

といふのは、老師無得の九十の賀筵に趨行した時のことをいふのではなからうか。兎もあれ、この元文五年を五十三歳として逆算すれば、彼の生れは元祿元年であらねばならぬこととなる。だからこの計算を基本として、今後の記を進めて行かうと思ふ。

彼が無得の膝下に參じたのは何時の事か明瞭でない。あるひは無得の實性院時代にはまだその門下に入つてゐなかつたのではないかとも思はれる。それは、

余住二實性一之明年春偶訪二野水庵舊蹟一

借二問先師嘉遁鄉一、指言大聖古城傍、篳門蓬戸更無レ見、野水東流空淼茫。

といふ詩があるによつて推想されるのであつて、もし無隱が、先師の加賀在住時代に、その門下に居たのなら、野水庵の所在地を「借問」する筈がないと思はれる。して見ると、彼が無得門下に走つたのは、無得が加賀を去つて關東に居た頃であつたものだらうか。そして年代からいへば彼が二十六七歳頃のことではなかつたらうか。

斯樣に見て來ると、彼が無得門下に入る前にどういふ修業をしたかゞ問題になる。「無孔笛」の第四卷に、

雲巖寺掃二受業先師得源和尙塔一

金毛弄罷難レ尋レ蹤、雁塔年深苔蘚封、三拜未レ施淚如レ雨、捧レ袍撫レ頂想二慈容一。

といふ一首がある。思ふにこの雲巖寺の得源和尙について剃髮したのであらうが、その後如何なる經路を辿つたものかは、明瞭でない。

兎も角、彼は武州東禪寺に於て、無得の下に三年の日子を送り、一應其處を辭したことは、前に無得を說く際に引用した詩によつて明瞭である。そのうちに無得が大寧寺に遷住したので、また彼も大寧に參趨したものであらう。この大寧時代が數年續いて、それから、また近畿地方に出かけたものらしい。「金龍尺牘」卷の上、「上二本師得老和尙一」の中にその消息が窺はれる。

曩者、辭二薝蔔室一北踰二銀嶺一、詣二杵築一、登二太山一、出二南海一、遊二播攝靈區一、而頓二舍紀城一將下弛二負擔一下幽居上焉。是地也實爲二天下佳觀一、江皐河瀕、概足二形勝一而以二歌浦一爲第一一也。當二其東北一則雉堞萬仞睥二睨王畿一、連於二執レ圭之國一最壯哉。然而土人風俗鞭聲淫醫、不レ便二緇衣掩居一、以レ故孟秋乃旋二多田里一。此里亦泉石之美、不損二于紀一(下略)

卽ち長州の大寧を出て北の方山陰に入り、出雲の大社に詣で、伯耆の太山に登り、南海から播

攝、それから紀州に出て和歌山邊に居住を構へようとしたのだが、土地の風俗が僧侶の住居に便でないと見て取つて、攝津の多田地方に庵居を決定したというてゐるのである。斯様に諸方を巡遊したについて、無隱は、法侶靈源に書を與へて、

布二路盧山一僅閒二一歲一、能耐二一日三秋之思一。費去年春、重遊二上國一、匍匐拮据。其意欲下求二鷦鷯一枝一、以不レ愈中于素上焉。而首夏走二紀少林一、且壁レ之、其竟濱二於南海之陂一、瘴氣蒸蒸、加レ之旱魃如レ恢、瘠レ我之甚、不レ能レ喰レ食可二一月一至レ有二馮而立式而能起一、秋初病良已、拾二得骸骨一、北來二攝州、絀二約多田山中一、及二既度一也、其地冬溫夏清、尤便二養病一矣。

というてゐる。即ち彼の行脚の目的は、鷦鷯一枝の分を得てその天分を發揮する地を求めんとするにあつたのである。そして紀州の少林に暫らく居たが、氣候身に適せず、一ヶ月も食を攝ることが出來ず、起居に不自由を來す程であつたので、秋初、疾の稍閒たるを見て攝州多田の里に引移つたといふのである、「無孔笛」のうちには山居の作と題するものが相當の數に上つてゐる。おそらくそれは、この多田の山中に於けるものであらう。

抱レ疾常多臥、掩レ扉槐樹陰、日高啼鳥靜、春暮落花深、塵累豈遮レ眼、丘山好息レ心、家傳無孔

笛、時奏待二知音一。

休歇更休歇、到頭餘二自然一、古書三兩卷、訂賦幾多篇、有二鳥知二清韻一、無二人問二別傳一、却思歸較晩、殆老二百城邊一。

我居丘壑裏、竟日絕二喧慮一、聽レ水臥二蘿屋一、看レ雲坐二石臺一、布袍常自織、華髮本非レ裁、古轍何人踐、曹溪路杳哉。

當時の生活ぶりが、これ等の作によつて略推測することが出來る。そのうちに法兄鐵山普願の斡旋によつて一個寺を住持することになつたらしい。そして一個寺の住職となるについて必要な儀式、即ち本山の瑞世と法師の印可とを得る手續を了した。

享保十五年佛涅槃前一日於二法泉室中一頂二受法衣一偈以誌レ喜

大庾嶺頭雲簇々、二龍峰下水潺々、當レ機奪得福田服、被返二津南萬壽山一。

永平禮二祖塔一

再來古佛逞二風流一、白雪調高五百秋、夜靜更闌人不レ侍、一輪明月桂二西樓一。

桂二錫萬壽山一

故愛二墨江地脉靈一、耕雲種月立二門庭一、有レ人如問二祝釐句一、松老壽山生二茯苓一。

とあるのは、いづれもその當時の作であらう。なほその際、無得の賜偈として「無孔笛」に左の一首が收錄されてゐる。

明善無隱長老者回瑞二世本山一付二伽黎一頂一以表レ信

把二住溪雲上一肩一、錦旋何似二法衣旋一、包二羅海嶽一無二窮處一、被作二人天大福田一。

おそらくこの時無隱の住持することになつたのは萬壽山明善寺といふ寺であつたのであらう。

金龍尺牘の「與二靈源禪師一」に

屬者以二鐵兄之命一、領二壽山之主一、余賦質孱弱不レ勝レ衣、遊惰憚レ事、以レ故依違者浹旬、弗レ獲レ已移居焉。而白屋貧羸不レ厭二糟糠一、茅浦襤褸、捽草把レ土、手足胼胝、有レ如二農夫一、(中略)壽山之南密二邇楞伽林一則爲二梅峯禪師舊居一、其所レ收史籍、有二二千許卷一、皆明本、而主人先老、不レ沮二余借來讀一、雪中暇遑、得レ卒二前漢書之業一也。(下略)

卽ち自ら耕作して手足胼胝だらけになつてゐるが、すぐ近所に梅峯禪師の舊居楞伽林があつて其處に明本二千卷程收藏してゐる。そこから本を持ち出して讀み、この冬は前漢書を讀み終つた

というてゐるのである。いはゆる晴耕雨讀の生活を送つてゐたのだ。

享保十五年といへば無隱四十三歲の時だ。卽ちその年になつて初めて彼が一個寺の住職になつたのだ。それから五年程も此處に留まつてゐたのであらうか、石見の妙高山圓光寺に移つたのは享保二十年の春らしい。

余以二乙卯春三月一住二妙山一是年秋八月新建二禪堂一落成、因作レ之示レ徒

選佛場成誰選先、大家正好痛加レ鞭、但看一句雷霆語、不レ許諸方默照禪、岳頂淸風驚二面壁一、庭前爛石任二磨甎一、饒他探二得春池玉一、撿點何曾直二半錢一。

の作がある。この乙卯は享保二十年に該當するのである。この圓光時代に於て「無孔笛」が大體編輯されたものと見へ、卷頭に揭載してゐる大潮和尙の序文は、圓光無隱禪師無孔笛序となつてゐる。しかしこの本は、加賀の實性院に移つてから板行されたもので、從つてその中には、實性院時代の作も多少收錄されてゐることは申す迄もない。

この「無孔笛」は待者機禪湖月編となつてゐる。しかも法姪良廓普宗も相當に盡力したらしい。百拙元養の序文中には、

屬者有二廓上坐也者一挾二複子一而至、蓋洞門耆宿、普頑禪師之徒也。曰吾師叔無隱、出二世石之圓光一、學者鳧趨、搥拂之暇、適レ興應叩、自目曰二無孔笛一(下略)

というてゐる。この無孔笛六卷の板行は、無隱の名聲を世に擴めた。そして引續いて「心學典論」を板行するに至つて、好儒の錙流として、佛敎界以外の方面に於ても廣く認められるゝに至つたのである。

「無孔笛」の板行は延享元年であり「心學典論」の刊行は寶曆元年である。その間六年の歲月を隔つ。そしてそれがいづれも加州江沼郡金龍山實性院藏板となつてゐる。無隱が實性院に遷住したのは寛保二年であつた。

寛保二年八月十一日視二篆加州金龍一九月四日處修二先師得老和尙卒哭忌一

龍池龍興大布レ雲、東海西海動二龍群一、忽然龍沒何處去、黑雲一片凝二池濆一、北山此日秋蕭索、空潭浪澄夜月白、何當四龍池龍再興、更看二風雨壓二雷澤一。

の作がある。無得はこの年五月廿三日示寂したのであるから、九月四日はまさに百日忌に當る。斯やうにその沒後、幾日も經ぬ際に、先師が十餘年の長い間住持してゐた名刹を管掌することに

なつた無隱が、感慨無量のものあつたことは、これを想像するに難くない。そしてこの時は無隱まさに五十五の漸く圓熟境に入つた時代であつたのである。

無隱が長州の大寧に轉住したのは、寶曆三年の春のやうである。それは信州長谷寺千丈實巖の著述「幽谷餘音」中に「賀二無隱禪師住二大寧一序」の一篇があつて、そのうちに「今玆癸酉之春、師應二長門侯請一繼二席於大寧一」といふ文字がある事實によつて推斷することが出來る。この寶曆三年は、彼が六十六歲の年で、實性院に住持してから十二年目に當る。しかしそれまで、彼が始終實性院に居た譯ではないやうだ。少くともその最後の一二年は伊賀の雜華林に山居した事蹟がある。筆者は彼の雜華集及び語錄を持つてゐぬので、的確のことはよくわからないが、しかし寛延三年仲冬と記してある「金龍尺牘」の序文には金龍無隱道費と自署してあり、その翌寛延辛未卽ち寶曆元年三月の日附のある大潮の序文にも、「自二石州圓光寺一遷、董二席加州金龍一、槌拂之暇最多二撰著一」というてゐるのだから、兎も角寛延の末年までは實性院に居たものと見てよい。だから實性院を退いて伊賀山中に閑居したのは恐らく寶曆元年中のことではなからうか。寶曆二年に書かれたものであらうと推測される千丈實巖の「寄二雜華無隱和尙一」の一篇には、「實巖去冬辭二

坐下二留三龍光院一十有餘日」というてゐる。その事實から推測して、寶曆元年の冬は、すでに雜華林に遷住したものでないかと推斷されるのである。

四

長州大寧寺は、昔は曹洞宗出世道場の一であつたと傳へられる。卽ち關西地方の本山格であつたのだ。千丈實巖は、前に述べた大寧住山の賀狀において、

大寧巨刹也、而自三石竹二師一遞世接レ踵祖風熾煽、三百餘年一日矣。況享保初、無得禪師董レ席、其成二器於此一、而龍蟠鳳逸者、莫レ不三各大二其聲光一、又三三十餘年于今一、而師則其尤也

というてゐる。此處に石、竹二師というてゐるのは石屋眞梁、竹居正猷兩和尙をさすのであつて、石屋が最初大寧創建に取かゝつたがこれを果さずして世を終へた。それでその門下の智翁永宗がこれを完成したけれども、しかし大に法燈をかゝげて寺運を隆盛にしたのは、同じく石屋門下の竹居であつたのである。千丈はこの山來を說いて大寧は巨刹なりというてゐるのだ。もしそれ無得の關係、更らに無得門の鳳鸞としての無隱の地位については改めて說明する迄のこともなからう。

千丈は更らに進んで左のやうにいうてゐる。

或曰、今天下之諸侯、儒術登レ人、無三複盛二于長藩一、長藩之學、師二于物氏一、師之典論、駁二乎物氏一、如三仇讐一然、然則師之住二于大寧一也、藩主近臣、爲二之先容一如何、曰、師之駁二乎物氏一也、公駁也。公駁而議レ之、議者不レ公也。不公之議、設累二乎千萬人一、何損二益乎師之道一也。巖寓二大寧一有レ年、因竊視下其稱二儒士一者上、則君子之風存焉。渠若得二師所一論讀レ之、必有下改レ玉旋レ踵、而爲二物氏一慨二罪於我一者。然則師右二槌拂一左二翰墨一、入焉而鞭二管龍象一、出焉而排二斥異端一、而益緣二飾乎祖道一、應下以二此學一徵上焉。

當時長州の學系は徂徠門下の山縣周南を中心として徂徠學派全盛の時代であつたのである。其處に「心學典論」において徂徠學を手痛く攻擊した無隱の乘り込むことは、恰も平地に波瀾を捲き起すものでないか、との疑惑はまことに一應の道理がある。しかし千丈の見るところによると、無隱の徂徠攻擊は公議である。私情に基づくものではない。この公議に對して私情の反擊あるべき筈はなく、特に多年大寧に修業僧として留まり、深く長府の土風を觀察した處によると、一般に君子の風があるから、却つて彼等が無隱の書を讀んだら、必ず深く反省する者を生ずるに相違

ない。斯様にいうて千丈は無隱の大寧遷住を祝福したのだ。「金龍尺牘」その他に依つて見ても、それが事實であつたらしく、周南門下の瀧鶴臺、和智棣卿等とよく往復した事實が看取され、周南自身また「心學典論」に對して頻りに賞譽の辭を與へたことが、それ等の書簡中に現はれてゐる。

「心學典論」「金龍尺牘」は共に無隱門の逸足蘭陵越宗によつて編集され、その斡旋の下に刊行されたものである。「心學典論」の跋文において越宗は次のやうに說いてゐる。

越宗先レ是、事二於一二碩德一而爲レ日矣、自覺既得二歡喜之地一、而寬保末年、北遊二於加國一、覿二和尙於龍山一。初瞻二其道貌一則巍々乎如二泰山之於二衆岫一也、漸聞二其話言一則洋々乎如二巨海之無二涯畔一也。若夫提二宗要一而入二無象一、隨二機變一以爲二對揚一、則黯然倜然、有下鬼神不レ可二以測一其由一者上。於是乎、越宗析レ杖棲止、而拳々服膺、夙夜扣以二至道一矣。

是によつて見ると、越宗は無隱の門に入る以前、すでに一二の碩德に參じて、相當の自信を得るに至つてゐたのだ。然るに無隱に遭うて見ると、その自信が非常に動搖を感じたものらしい。それで杖を折つて實性院に留錫したものと見ゆる。「無孔笛」にある左の偈はおそらくその當時のものであらう。

駿陽越宗禪人來參、偈以喜二會晤一

探二盡百城烟水濱一、當機一句見二超師一、毫端不レ隔毘盧境、樓閣門開更待レ誰

無隱と越宗とはよく氣が合ふたものらしい。それを實證する詩偈は、「無孔笛」中にも越宗の「草庵稿」中にも容易に發見することが出來る。しかしそれはいづれ後に讓るとして、更らに越宗の典論跋文に戻らう。

和尙一日從容謂二越宗一曰、學道之人有レ術焉、女嘗知レ之耶。對曰、未也、可レ得二而聞一與。和尙曰、而與二當今耆年一其器惡不レ若二於費一也、而以二其道一望二諸費一則由二七雄戰爭之於二三代垂衣一也、此豈有二他故一、蓋以二學弗レ繩二於聖謨一也。越宗聞其言一、奮焉而退、迺自取二諸圓頓修多羅暨唐咸通以前禪書一、以反二復研二窮之一、則鄉和尙之所レ示、巍々乎如二泰山一者、洋々乎如二巨海一者、黯然倜然、鬼神不レ可二以測一其由一者、一皆於レ斯見焉。越宗乃蹶然而起、遽詣二函丈一、自言、老和尙何不レ欺二越宗一之久也。和尙微々笑而已。嗟夫越宗之往所レ失者、非レ爲二戒之不レ急焉、非レ爲二定之不レ務焉、卽是乘之緩焉已矣。然推下越宗所二當失一者上、以圖二他人一知二其必非レ母二同レ疾病

者。

即ち無隱の巍々乎、洋々乎たるゆゑんのものは、宗乘に於ける彼の修養である。越宗が、無隱に對して威壓を感じたゆゑんのものは、戒律の不急なる爲にあらず、禪定の不足なる爲にあらず、まことに宗乘の學得に充足を缺いてゐたがためである。天下この同病者なきを保し得んや。其處でこの「心學典論」三萬言を刊行するゆゑんであるといふのが、この跋文の骨子である。これに依りて見ても明瞭である通り、無隱は學弗レ繩二於聖謨一ことを以て、天下の耆年と自分との相違するところとしてゐたのである。彼は戒律、禪定ばかりを尊重せず、更らに文字を以て最も必要な學道の術であるとしたのだ。斯くして彼は「心學典論」に於て、宗原を說き、佛心を說き、宗乘を說き、性修を說き、長養を說き、儒敎、道敎を說き、文學、詩偈その他にまで說き及ぼしてゐるのである。

無隱が何時死んだか、の點も、筆者には今のところ判然してゐない、たゞ「草庵稿上」には、

奉輓本師和尙

雪晴五夜月西沈、無レ限悲風遶二鶴林一、徹底海乾天地黑、洪波浩渺失二南針一 遺偈有海乾徹底白浪滔天之句

の偈があり、同下には「懷先和尙十首」および「先和尙忌」等の作が收錄されてゐるから、この「草庵稿」の刊行された明和七年よりは、餘程以前であつたらうと想像される。假りに明和七年に死んだものとすれば、彼の生年元祿元年から數へて八十三歲になる計算であるから、恐らく八十未滿で長逝したものではなからうか。

無隱は文學を以て學道の最も必要な術と信じてゐた。從つて彼は文章道にも相當の苦心を拂つたものであらう。そして亦相當に自信を持つてゐたものと想像される。千丈實巖の「幽谷餘韻」にはそれについて斯ういふ話を載せてゐる。

無隱和尙、以二翰墨一名二于叢林之間一、西溟子大潮、序二其所レ著之書一、極奬二譽之一。而余嘗與レ師論文、因觀二西溟手書、國字牘一紙一、有レ言云、源信、虎關、玄光、梅峯、卍山等撰著、亦視二坐下所レ爲、可レ謂二今文一云々。隱公以二其書一誇レ余。余咲曰、勿レ誇。曰何。曰、西溟有レ鑑、唯以二數輩倭人一爲二坐下一、定二優劣一、而雖二近代之華僧、南源、高泉之流一、未二輒比二之於坐下一、大潮雖レ如レ推二稱坐下一、而其底意、未下許二座下一以ㇾ此華域上明矣。唯以二其言婉曲一、使二座下不ㇾ覺耳。隱公勃然變レ色、而恨下聞二余餘論一之晚上。且觀下大潮評二余拙文一、謂㆓有二腕力一、有二眼力一、有二骨力一、有㆒兩漢家遺

風歌豔不レ已。（跋無隱和尙帳）

千丈は斯やうにいうて、無隱和尙が後進の忌禪なき言葉をきゝ、且つその美點を容易に認めた淡白さを說いてゐるのである。

岡白駒は京都の儒者だ。著述も頗る多く門下にも著名の士がある。彼は「金龍尺牘」に序して、

余嘗讀二心學典論一、文藻華贍、絢々乎無二復江湖習氣一、因嘆曰、昇平文運、嗚乎盛哉、若二詩僧一則余往々得二見且聞一矣、始見二盛事及一於緇流一、安得レ見二此人一。烏石山人自言有二通牘好一、咨歲來二於京都一、介二山人一見レ訪二敝廬一。夫止觀深淺、余所レ不レ知也、其爲レ人也、謙遜溫厚、微二啻文章美一也。一見遂如二舊識一。因示二金龍尺牘一（中略）余因讀レ之、縟思翩々、辭若レ對レ面、愈益信二我所レ見不レ誤也。昔者空海入レ華求レ法、其所レ著、映辭麗藻、雖二其資之隸敏一乎、華人交際之所二董習一、實使レ然也。降レ是寥々乎無二復聞一焉。世獨稱二師錬釋書、玄光護法一。釋書之文、雖二頗得二紀傳之體一、語多二和習一、字有二謬義況一光之拙陋、豈足レ道哉。余故曰、始見二盛事及一於緇流一（下略）

というてゐるがこの岡白駒のいふところ、卽ち緇流の文章としては空海以來で、虎關師錬の元享釋書、獨庵玄光の護法集も、文章としてこれを見るとき、其處に幾多の缺點があるといふ說が直

ちに妥當であるか否かは別として、兎も角、無隱の文が、禪家の間にありて、比較的に出色のものと認められてゐたことは事實であつたと見てよからう。だから大潮の如きも、その詩集「魯寮集」を刊行するに當りては、無隱の序文を徵してゐるのである。

無隱は、書についても多少の自信をもつてゐたらしい。それは「無孔笛」中に左のやうな文字があることによつて推測し得る。卽ち

予性恬淡寡レ欲、然屢々舍未レ能者文、書耳、意者、宿習之使レ然歟。今玆之春、越侍者從二芙蓉山下一來、茶話言及二于此一矣。因乃請曰、願擬二老杜飮中八仙之作一以示二草中之聖一、予曰、漢魏以來、稱二草聖一也、亦局二乎八人一、然若撮二其尤者一則得乎。於レ是遂爲二此歌一

と序して七言の長詩が收錄されてゐるのである。更らに斯樣な文字もある。

自畫二大悲像一贊

予發願學レ畫二觀世音菩薩像一、凡每レ見二開本邦支那巧妙畫軸一莫レ不二借來摹二寫之一、會閱二明宋文憲公護法錄一、中載二無授上士寫レ經成二大悲像一。于レ是傚二擘于他一乃用二五色粉墨一、細二書梵本大悲咒數卷一、週二於像中一、眉目衣帶璨然可レ觀焉。嗚呼予之近日所レ習畫圖、奚敢望レ髣二髴於古人一、

然其所レ以欲㆑不レ貳二人法一而冥ゝ契聖意㆓則一而已矣。畫成合掌系レ贊云
人卽是法、法卽是人、一字兩字、偏身通身、驀然紙破墨痕壞、還レ我本來面目眞。
これによつて見ると、無隱は相當數の大悲像を描いたものであらうと推測される。

五

「無孔笛」のうちに左のやうな一首がある。如何にも閑寂恬淡な無隱の生活を推測し得るものだ。

春宵書懷

疎雨淡烟日已暝、焚香閒寂坐二江亭一、人生胡蝶夢多レ樂、老去桃花睡屢醒、半夜燈前雙鬢雪、百年水上一浮萍、今春春色又看過、何處岩根待二我靈一。

しかしこれは春宵の書懷で、閑寂なうちにも何處やら華やかなところがある。それに比べると蘭陵越宗のものは、更らに枯淡の生活ぶりを示すものが多い。

寓居裁芭蕉

病生爲レ癖好二蕭條一、身自似レ期二春雪消一、鄙號從二謾稱一夜雨一、寓居移處裁二芭蕉一。

坐雨

茅簷微滴桂二蕭條一、依レ例焚レ香坐二寂寥一、半夜無レ人燈火落、秋聲與レ雨在二芭蕉一。

山中寂寥の景趣が自然に髣髴される。長州の儒醫として著名な永富獨嘯庵は「草庵稿」の卷頭に掲げてある「夜雨禪師傳」において、

筑之山中、有禪師、名越宗、字蘭陵、不レ知二何許人一、性愛二夜雨一、每二天夜雨一、焚レ香兀坐、以至二天明一。山村人、始不レ識二其名一、妄號二夜雨和尙一。師奇二其言一、遂自稱二夜雨禪師一云

というてゐる。かやうに獨嘯庵は、何許の人たるを知らずというてゐるが、しかし前にも述べたやうに「無孔笛」中には屢々「駿陽の越宗」とか、「越侍者芙蓉山下より到る」とかいふ文字があるのであるから、彼が駿河の人であることはいふまでもないところであらう。そして加州に無隱に見へたのは寛保の末年だというてゐるからおそらく寛保三年であらうか。もしそれが事實であるとすれば、その年は無得が死んで、無隱が實性院に遷住した翌年卽ち無隱五十五の年に當り、越宗は二十七歳の時であるやうだ。そしてそれから十餘年に亙つて無隱に隨侍してゐたものらしく、「懷先和尙十首」のうちには、

曾侍二巾鉢一、十五年、嚴如二王者一似二金仙一、霈然作レ雨烏藤杖、惱二殺人天一血氣羶。
憶昔南方行脚時、天風吹レ我上二龍池一、十年片語無二奇特一、乘レ興但聞二落韻詩一。

といふやうな作がある。假りに越宗が無隱に參じたのが寛保三年として、それから十年乃至十五年その膝下に居たとすれば、それは寶曆年間に當ることになり、無隱の大寧住山時代となるのである。越宗は大寧に無隱に隨侍してゐるうちに、石見の國に一個寺をもつことになつたらしい。

移錫石城

法海餘兒名字僧、江湖掃盡一枝藤、倦淤欲レ睡城隈寺、莫レ道室中繼二祖燈一。

感懷

四十年間西又東、青雲白髮思無レ窮、忽爲二粥飯一朝主一、往事都歸感慨中。

結夏示衆

大麻山北石城東、卓爾禪房四壁空、結夏相依多少衆、蠟氷鵝雪一堂中。

等の作がある。しかしこの石見の住山時代はあまり長いものではなかつたやうだ。

石見出庵

去年蹈雪離二南國一、今歲看レ花出二北州一、南北從來無二別趣一、下レ山落月桂二城頭一。

そして再び大寧に歸り、その間に無隱の死に遭うたのではあるまいかと推測される。

筑紫の山庵時代はその後のことであらう。「草庵稿」中には「草庵十九首」の作がある。そのうちから手にまかせて二三首を抽出しよう。

草庵聊結隱二山谿一、柳浦城邊渭水西、葉落林間鹿呼レ友、花開枝上鳥來啼。
一莖草室在二幽谿一、尖筆峯前研海西、老後還誇文字癖、杜詩讀了暮鴉啼。
半間草屋枕二寒谿一、片石孤松窮舍西、日々相逢多二野俗一、一瓢不レ樂語レ貧啼。
獨嘯庵のいはゆる「山村の人其名を識らず、妄りに呼んで夜雨和尚といふ」たのは、此時のことであらう。しかし越宗の山庵生活はこの時に初まつたものではない。彼はその以前大和の葛城においてすでにその經驗がある。

葛城庵居二首

夜雨松風一草庵、嬾眠長臥髮毿々、病生望斷人間世、甲子今年四十三。
役公舊住葛城山、暫桂二烏藤一此閉レ關、未下採二松花一堪レ作レ食、日提二鉢鉢一下二人間一。